長岡京市文化財調査報告書

第 20 冊

1988

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 20 冊

1 9 8 8

長 岡 京 市 教 育 委 員 会

長法寺遺跡の遠景(北から)

序　　文

長岡京市では、昭和30年代から急速に都市化が進み、それに伴う開発行為により数多くの遺跡が危機に瀕し、貴重な文化財が失われてきました。

とくに近年の開発傾向をみると、これまで盛んであった市東半部の住居地域がほぼ宅地化され、新たに奥海印寺地区など西半部で宅地開発が増加し、さらにこれまで開発が見送られていた古墳など地上標識のある遺跡周辺まで開発が進んできています。

このようななかで、従来明らかにされていなかった地域で新たに遺跡が発見されるとともに、地上標識のある遺跡では長法寺七ツ塚古墳群にみられるように保存か開発かの選択が迫られてきており、これらの遺跡の保護対策を早期に講じることが必要になってきました。

そこで、市西部地区での分布調査を行い、今年度に昭和57年度刊行した遺跡地図を改定し、より遺跡の実態に即した保護対策が講じられるべく努力してまいりました。

ここに刊行いたします報告書は、昭和62年度中に教育委員会が直営で実施しました国庫補助事業の成果をまとめたもので、そのおもな内容といたしまして、弥生時代の環濠集落と判明した長法寺遺跡、長岡京西二坊大路東側溝、長法寺七ツ塚古墳第３号墳周濠、奥海印寺遺跡の集落等に関するものであります。

これらの成果は本市の歴史を解明する上で貴重な資料になるとともに市民の歴史学習資料として広く活用していただけると期待しております。

最後に、調査実施にあたって種々のご指導をいただいた諸先生方ならびに関係行政機関、また、発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々に、紙上をお借りし、厚くお礼申し上げます。

昭和63年３月　　長岡京市教育委員会

教育長　湯　浅　成　治

凡　　例

1．本冊は、昭和62年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかの発掘調査の概要報告である。

2．上記の調査地は付表―1のとおりである。その位置は第1図に示した。

3．長岡京跡の調査の次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977)』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。

4．長岡京内の条坊名は、山中章他「第126図長岡京条坊図」(向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集　1982年）による呼称に従った。

5．各調査報告の執筆者は、各章のはじめに記した。

6．本書の編集は長岡京市教育委員会管理課文化財係　中尾秀正が担当した。

7．現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々の御協力を得た。

〔調査作業員〕　麻田安太郎・天野菊次郎・井本千代治・岩岸三郎・佐藤昭三・田中寅吉　中村正雄

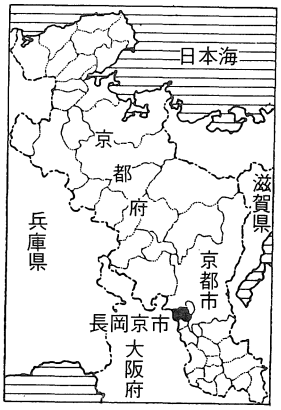
〔調査補助員・整理員〕

青木也寸志・岩川絢子・占部真里・小田賢・小田昌子・奥田泰江・川勝庸行・倉橋裕之・坂根瞬・鈴木芙美子・田中佐知子・田中智紀・服部裕幸・前田明美・吉岡勝則

付表―1　　本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間（現地）	調査面積	備考
長岡京跡 右京第228 次調査	7ANJMM	長岡京市長法寺 南野20-1ほか	金剛住宅㈱	1986 4.21～5.13	約300㎡	長法寺遺跡第一次調査 今回は弥生時代を報告
長岡京跡 右京第265 次調査	7ANIKE-3	長岡京市長岡 三丁目25-41	田村義明	1987 7.14～8.4	118㎡	長岡京西二坊大路
長岡京跡 左京第184 次調査	7ANMST-4	長岡京市神足 芝本6	伊辻克美	1987 11.26～12.26	120㎡	長岡京東一坊坊間大路
長法寺七ツ塚古墳群 第2次調査	7ANJKK-2	長岡京市長法寺 北畠17	藪内治作	1987 7.21～8.25	330㎡	第3号墳の周濠と陸橋 長岡京跡右京第269次調査
奥海印寺遺跡 第3次調査	2LOPTJ-3	長岡京市奥海印寺 東条28-1	多貝　茂	1987 5.8～6.13	110㎡	鎌倉時代の住居跡
奥海印寺遺跡 第4次調査	2LOPSR	長岡京市奥海印寺 城10-26 ほか	伴野昇次 ほか3名	1987 5.28～6.24	150㎡	鎌倉時代の住居跡

第１図　本書報告調査地位置図



長岡京条坊復原図　平城京型復原による

長岡宮

北京極大路
一条大路
南一条大路
二条大路
三条大路
四条大路
五条大路
六条大路
七条大路
八条大路
九条大路

西四坊大路
西三坊大路
西二坊大路
西一坊大路
朱雀大路
東一坊大路
東二坊大路
東三坊大路
東四坊大路

0　2000m

本　文　目　次

序　　文……i
凡　　例……ii

第１章　長岡京跡右京第 228次調査概要（２）……1
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　まとめ

第２章　長岡京跡右京第 265次調査概要……13
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第３章　長岡京跡左京第 184次調査概要……21
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構と出土遺物
4　まとめ

第４章　長法寺七ツ塚古墳群第２次調査概要……27
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第５章　奥海印寺遺跡第３次調査概要……33
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第６章　奥海印寺遺跡第４次調査概要……45
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

図　版　目　次

巻頭図版　　長法寺遺跡の遠景（北から）

長岡京跡右京第 228次（７ＡＮＪＭＭ地区）調査

図版　1　　調査地全景（北から）
図版　2　　(1)　竪穴住居ＳＨ22813（南から）　　(2)　竪穴住居ＳＨ22804（西から）
図版　3　　(1)　溝ＳＤ22808（東から）　　(2)　溝ＳＤ22808の土層（西から）
図版　4　　(1)　竪穴住居ＳＨ22813・中央ピットの土層（北西から）
(2)　竪穴住居ＳＨ22813・中央ピットと排水溝の土層（南東から）
(3)　溝ＳＤ22808遺物出土状況（南から）　　(4)　溝ＳＤ22808遺物出土状況（東から）

長岡京跡右京第 265次（７ＡＮＩＫＥ－３地区）調査

図版　5　　(1)　溝ＳＤ26503（南から）　　(2)　調査地全景（東から）
図版　6　　(1)　竪穴住居ＳＨ26504（南から）　　(2)　竪穴住居ＳＨ26509（南から）
図版　7　　(1)　溝ＳＤ26503断面（南から）　　(2)　土壙ＳＫ26506断面（北から）
(3)　土壙ＳＫ26511断面（西から）　　(4)　竪穴住居ＳＨ26504遺物出土状況
(5)　竪穴住居ＳＨ26504断面（西から）　　(6)　竪穴住居ＳＨ26509カマド検出状況　　(7)　竪穴住居ＳＨ26509遺物出土状況
図版　8　　出土遺物

長岡京跡左京第 184次（７ＡＮＭＳＴ－４地区）調査

図版　9　　(1)　上層遺構検出状況（北から）　　(2)　下層遺構検出状況（北から）
図版　10　　(1)　溝ＳＤ18404検出状況（南から）　　(2)　出土遺物

長法寺七ツ塚古墳群第２次（７ＡＮＪＫＫ－２地区）調査

図版　11　　(1)　発掘調査地遠景（南西から）　　(2)　発掘区全景（南から）
図版　12　　(1)　３号墳と周溝ＳＤ26901・溝ＳＤ26902（西から）
(2)　周溝ＳＤ26901全景（北から）　　(3)　出土遺物

奥海印寺遺跡第３次（２ＬＯＰＴＪ－３地区）調査

図版　13　(1)　拡張前の18層上面・ＳＸ01（北東から）
(2)　拡張前の18層下面（北東から）
図版　14　(1)　拡張後の調査地全景（北西から）　(2)　井戸ＳＥ09（北西から）
図版　15　(1)　ピットの根石検出状況（南東から）　(2)　土壙ＳＫ07・銭貨出土状況（北西から）　(3)　ＳＸ01・Ｃ３区石列検出状況（南西から）
(4)　ＳＸ01・Ｂ１区遺物出土状況（南東から）
図版　16　出土遺物(1)
図版　17　出土遺物(2)
図版　18　出土遺物(3)

奥海印寺遺跡第４次（２ＬＯＰＳＲ地区）調査

図版　19　(1)　調査地全景（北東から）　(2)　調査地全景（南から）
図版　20　(1)　第１トレンチ全景（南から）　(2)　第１トレンチ全景（北から）
図版　21　(1)　第２トレンチ全景（東から）　(2)　第２トレンチ全景（西から）
図版　22　(1)　第３トレンチ全景（北から）　(2)　第３トレンチ全景（南から）
図版　23　(1)　掘立柱建物ＳＢ08柱掘方（西から）　(2)　掘立柱建物ＳＢ09柱掘方（西から）
(3)　ＳＸ04（西から）　(4)　土壙ＳＫ05（北西から）
図版　24　出土遺物
図版　25　土壙ＳＫ05出土遺物
図版　26　(1)　土壙ＳＫ05出土瓦　(2)　土壙ＳＫ05出土金属器

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図……iii

長岡京跡右京第 228次（７ＡＮＪＭＭ地区）調査

第２図　発掘調査地位置図……1
第３図　調査地遠景……2
第４図　検出遺構図……3
第５図　竪穴住居ＳＨ22804実測図……5
第６図　ＳＨ22804紡錘車出土状況……5
第７図　竪穴住居ＳＨ22811実測図……6
第８図　ＳＨ22811遺物出土状況……6
第９図　竪穴住居ＳＨ22814実測図……7
第10図　ＳＨ22814遺物出土状況……7
第11図　竪穴住居ＳＨ22813実測図……8
第12図　ＳＨ22813中央ピット実測図……8
第13図　ＳＨ22813遺物出土状況……8
第14図　土壙ＳＫ22807実測図……9
第15図　土壙ＳＫ22812実測図……9
第16図　ＳＫ22812遺物出土状況……9
第17図　溝ＳＤ22808実測図……11

長岡京跡右京第 265次（７ＡＮＩＫＥ－３地区）調査

第18図　発掘調査地位置図……13
第19図　調査地南壁土層図……14
第20図　検出遺構図……15
第21図　溝ＳＤ26503実測図……16
第22図　竪穴住居ＳＨ26509実測図……16
第23図　竪穴住居ＳＨ26504・ＳＨ26513実測図……17
第24図　出土遺物実測図……18

長岡京跡左京 184次（７ＡＮＭＳＴ－４地区）調査

第25図　発掘調査地位置図……21
第26図　調査作業風景……22
第27図　検出遺構図……23
第28図　調査地土層図……23
第29図　溝ＳＤ18401断面 ……24
第30図　溝ＳＤ18404断面 ……24
第31図　出土遺物実測図……25
第32図　東一坊坊間大路復原概念図……26

長法寺七ツ塚古墳群第２次（７ＡＮＪＫＫ－２地区）調査

第33図　発掘調査地位置図……27
第34図　調査地周辺地形図……28
第35図　検出遺構図……29
第36図　周溝ＳＤ26901・溝ＳＤ26902土層図 ……30
第37図　出土遺物実測図……31

奥海印寺遺跡第３次（２ＬＯＰＴＪ－３地区）調査

第38図　発掘調査地位置図……33
第39図　トレンチ壁面図・ＳＸ01断面図・地区設定図……35
第40図　調査風景……36
第41図　検出遺構図……37
第42図　井戸ＳＥ09断面図……38
第43図　掘立柱建物ＳＢ03実測図……39
第44図　Ｂ１・２区13層出土埦皿類の法量図……40
第45図　出土遺物(1)……41
第46図　出土遺物(2)……42
第47図　出土遺物(3)……43

奥海印寺遺跡第４次（２ＬＯＰＳＲ地区）調査

第48図　発掘調査地位置図……45
第49図　検出遺構配置図……46

第50図　奥海印寺城範囲推定図……47
第51図　第１トレンチ平面・断面図……48
第52図　第２トレンチ平面・断面図……49
第53図　土壙ＳＫ05断面図……50
第54図　第３トレンチ平面・断面図……51
第55図　土壙ＳＫ05出土遺物実測図１……53
第56図　土壙ＳＫ05出土遺物実測図２……54
第57図　出土遺物実測図……54

付　表　目　次

付表－１　本書報告調査一覧表……ⅱ
付表－２　西二坊大路検出側溝座標一覧表……16

第１章　長岡京跡右京第 228次（７ＡＮＪＭＭ地区）調査概要(2)
――右京四条四坊十一町・長法寺遺跡――

１　は　じ　め　に

1　本報告は1986年４月21日から５月13日まで、長岡京市長法寺南野20―１他において実施した長岡京跡四条四坊十一町推定地における発掘調査に関するものである。

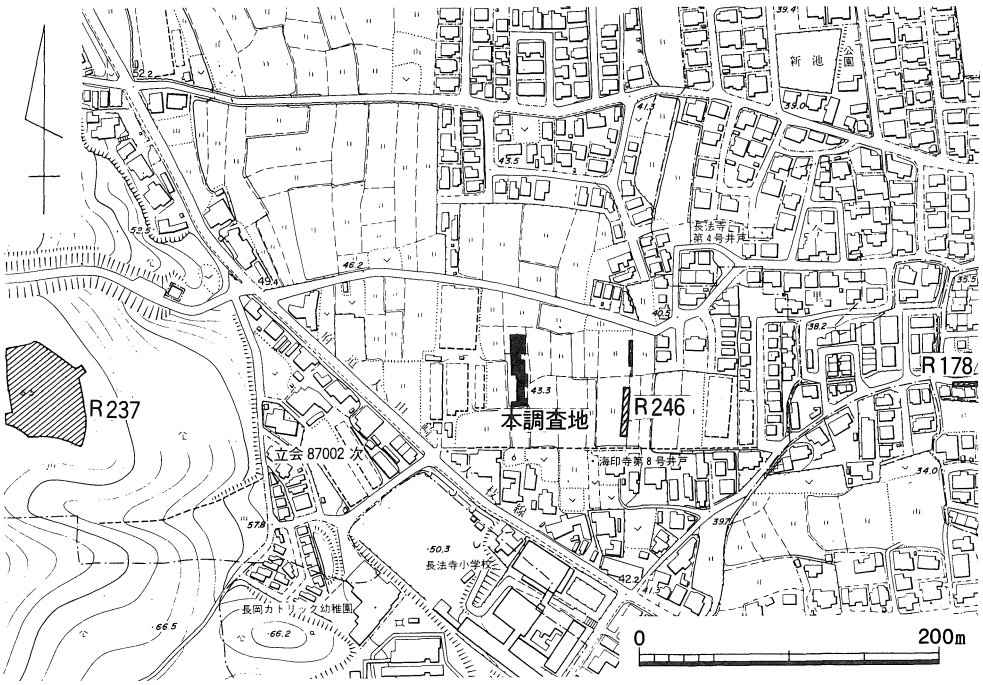
2　この調査によって新たに弥生時代・奈良時代の遺構が発見され、長法寺遺跡と命名された。これらのうち、弥生時代以外の時期については既に報告済みであるため[(1)]、本報告では弥生時代の遺構に関して報告する。

3　本調査は、宅地造成に伴い実施した調査で、調査面積は最終的に 300㎡ となった。

4　現地調査および整理作業は長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。調査員は(財)長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、小田桐淳が担当した。

5　調査実施にあたり、土地所有者である金剛住宅株式会社には数々の御協力を得た。また調査中には京都文教短期大学名誉教授中山修一氏、大阪大学助教授都出比呂志氏、(財)京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏等には多くの御指導・御協力を得た。

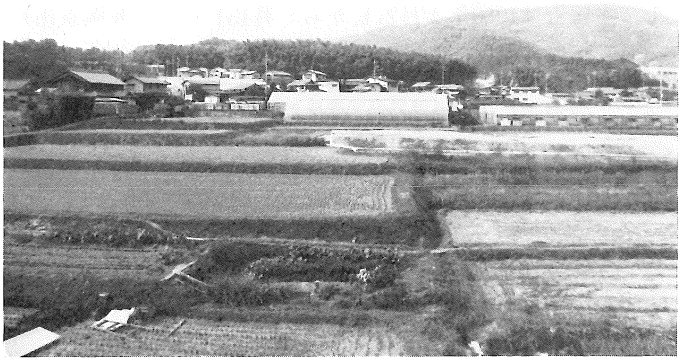
6　調査後の遺構図面の整理・遺物の実測等は前田明美が主に行い、編集・執筆は小田桐が行った。なお弥生時代の遺物についてはなお検討を要するため、周辺関連遺跡の整理を待って報告したい。



第２図　発掘調査地位置図　（１／5000）

2　調　査　経　過

調査地は西山丘陵に切り込む河川によって形成された扇状地に立地しており、現在西から東、南から北に向かって段々に低くなる田畑の区画によって分割されている。このうちトレンチを設定したのは南北に並ぶ２枚の水田面で、これも北側水田面が南側水田面より50cmほど低い面となっていた。



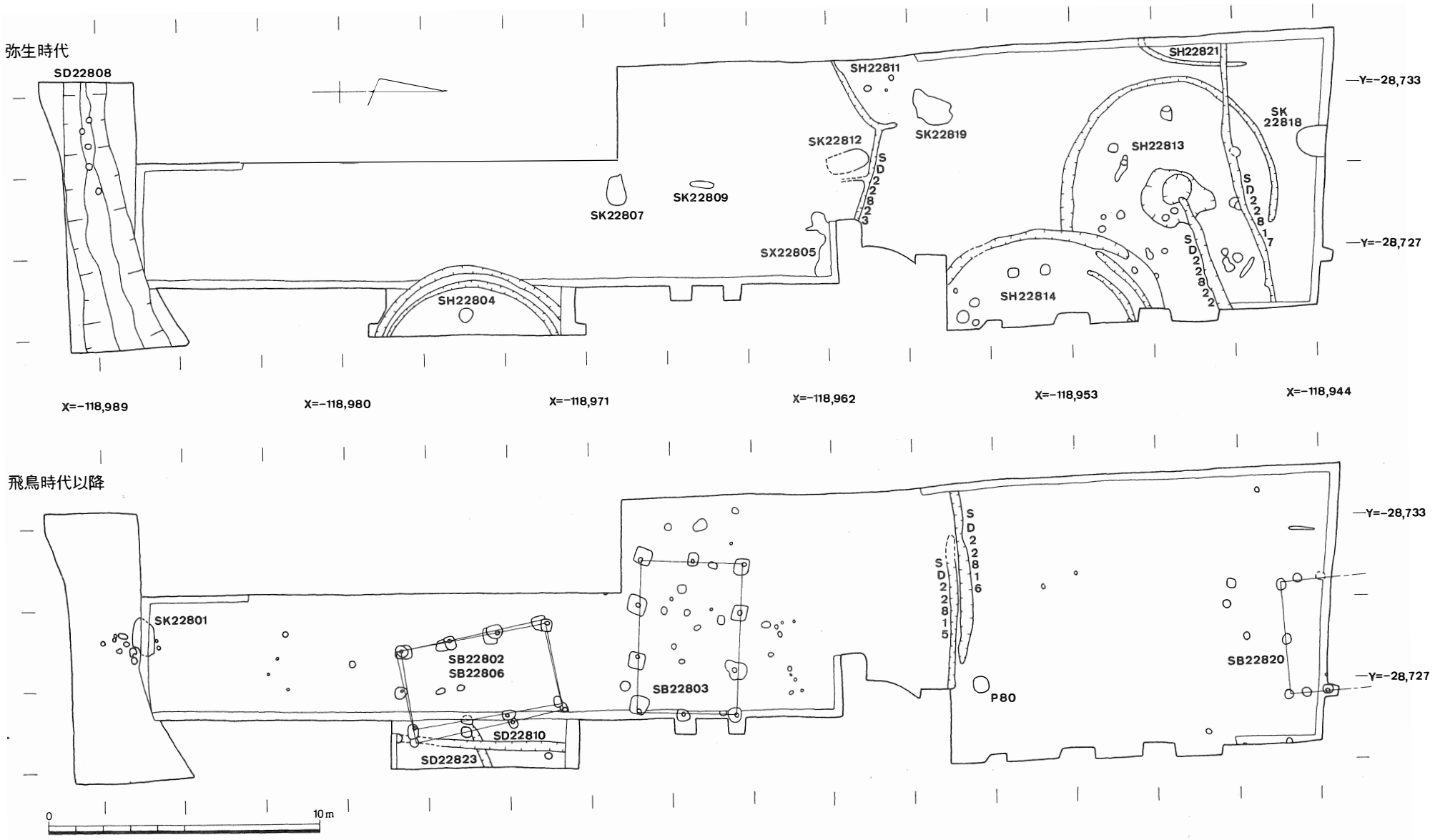
第３図　調査地遠景

調査トレンチでの基本層序は、現在の水田に伴う耕作土・床土層の下にさらに近世までの遺物を包含する耕作土層が堆積していた。これらの層を除去すると黄灰色土の地山層が現われ、この地山面上から各時期の遺構が切り合って検出された。地山面は若干の傾斜をもっており、その比高差はトレンチ東端と西端では約40cm、南端と北端では約70cmを測る。また当地は海抜43.5m前後の標高に位置している。

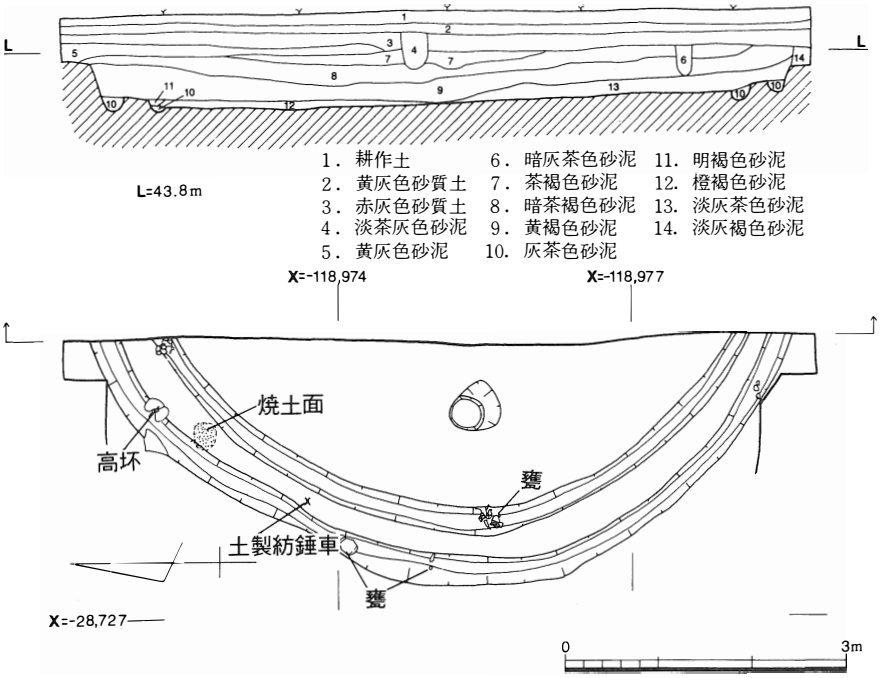
ここで検出された弥生時代の遺構は中期から後期にかけての集落址の一部で、竪穴住居５軒（円形プラン３軒、隅丸方形プラン２軒）、土壙５基、溝などである。中でもトレンチ南端で検出された大溝（ＳＤ22808）は、最大幅約３ｍ、深さ1.1ｍを測り、弥生時代長法寺遺跡が環濠をもつ集落である可能性を示すものと考えられた。これらの時期は、中期に属す住居が１軒ある他は全て後期の遺構である。後期の中でも出土遺物に時期差が認められ、二時期に遺構の変遷があることが確認されている。

当遺跡周辺に展開する弥生時代集落は、調査地の北方約１kmに中期から後期にかけての井ノ内遺跡が所在する他、北東約１kmには同じく中期から後期の今里遺跡、東へ約 0.8kmにはこれも中期から後期の遺物が出土する陶器町遺跡、南東約 0.5kmには前期から後期の遺物が出土する東台遺跡などが点在している。また当調査終了後に実施した右京第 237次調査地は、当調査地の西方約 280mの西山丘陵の屋根上にあたるが、ここでも後期の集落（谷山遺跡）が発見された。[(2)] これら周辺に展開する諸遺跡と長法寺遺跡との関連は注目されるが、中でも谷山遺跡は立地的に当遺跡と密接な関係があると考えられる。

乙訓地方における弥生時代後期の様相はまだ十分な資料が出土しておらず不明瞭であるため、遺物の編年および集落の変遷は谷山遺跡の整理を待って別稿で報告することとし、ここでは遺構の概略と若干の考察に留めておきたい。



第４図　検出遺構図　（１／200）

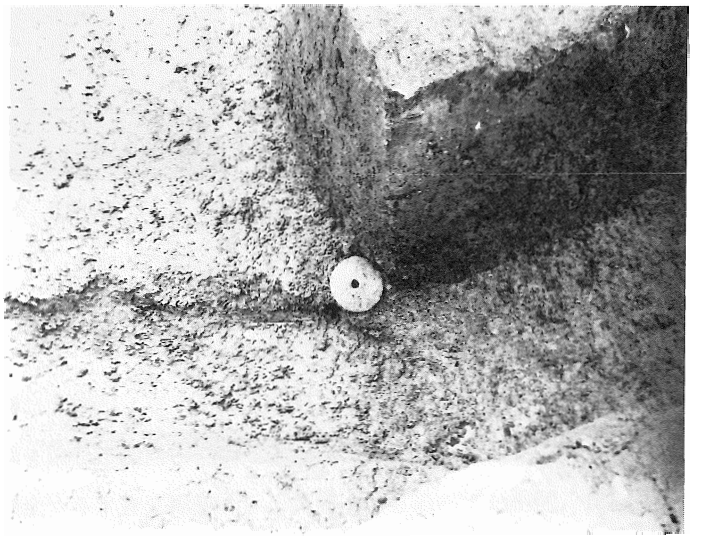


第５図　竪穴住居ＳＨ 22804 実測図（１／80）

３　検　出　遺　構

竪穴住居ＳＨ22804

復原径約８ｍの円形住居で西側⅓ほどを検出した。埋土は４層のレンズ状堆積からなっており、床面までの深さは約50cmを測る。住居床面の周囲には幅20cm、深さ10cm前後の壁溝が巡っている。壁溝の内側にはもう一条円形に同様の規模の溝が巡っており、住居北半ではこの内側の溝の中側が10cmほど低くなっている。南半でも内側溝と壁溝との間に比べ、内側溝の中側は面が下がっている。このような状況からこの住居跡は建て換えて拡張されたと考えられる。

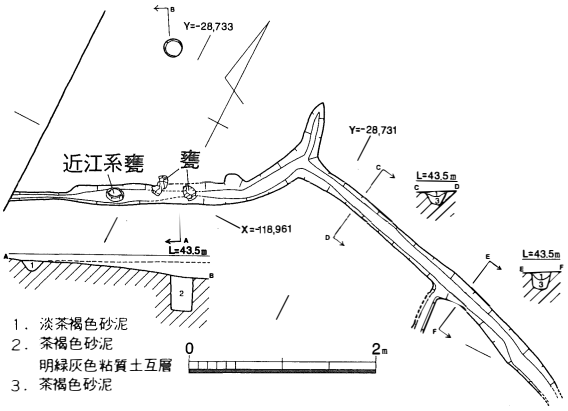


第６図　ＳＨ 22804 紡錘車出土状況

内側の溝をＳＨ22804古段階の壁溝とすると、ＳＨ22804（古）の復原径は約6.8m ほどとなる。

新段階の床面の遺物としては、住居跡北西部の壁溝上で甕（搬入品？）、壁溝に接っする床面

上で高杯、土製紡錘車などが出土した。この紡錘車は直径5.9㎝、厚さ3.3㎝、中央孔径0.7㎝で、重さ110ｇほどを測る大型品である。住居南西部ではほとんど遺物は認められなかった。主柱穴は1本だけ確認している。



第7図　竪穴住居ＳＨ22811実側図（1／80）

竪穴住居ＳＨ22811

段差をもつ南北2枚の水田面の境目で検出された隅丸方形住居で、北半は削平され消滅していた。一番残りの良い部分で深さ8㎝、ほとんど壁溝のみでの検出であった。規模は明らかにし得なかったが、住居の南辺は東で北へ29°振っている。主柱穴は1本のみ確認された。

この住居の南東コーナーから東へ延びる溝が検出された。この溝は幅20㎝弱深さ14㎝から23㎝ほどの断面U字形をした溝で、住居と接っする部分では壁溝の底と同じレベルであるが東へ延びるにつれて深くなっている。埋土は住居・壁溝埋土と同様の土で、平面精査では切り合い関係は認められず、住居に付属して設けられた排水溝であると考えられる。

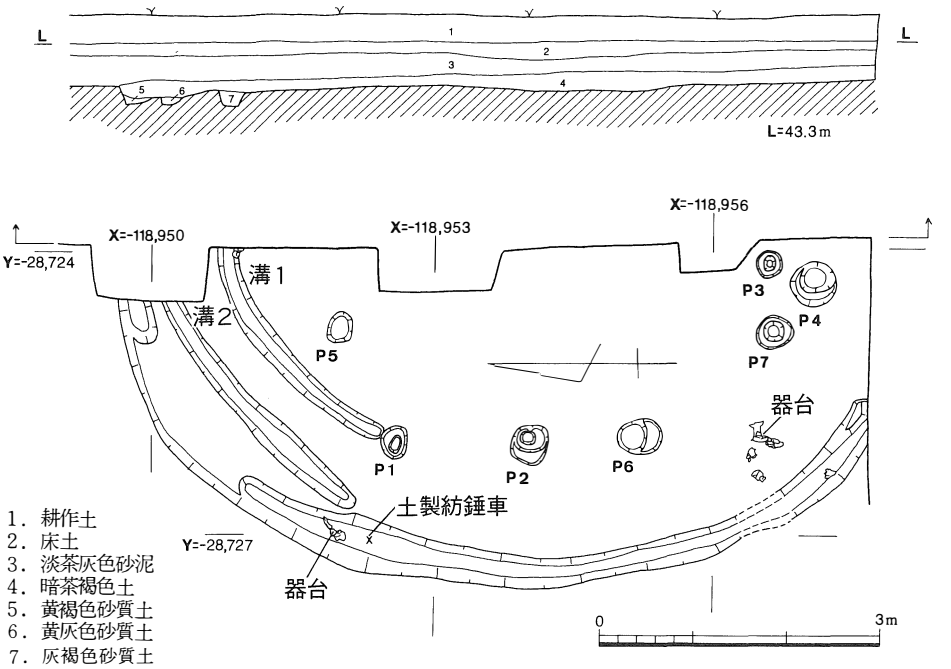
第8図　ＳＨ22811遺物出土状況

土器は南辺壁溝内に甕が3個体並んで検出された。うち1個は近江系の甕である。

竪穴住居ＳＨ22814

ＳＨ22813を切っている円形住居で、検出プランは南北に楕円ぎみになっているが、復原すると直径8～9ｍになると考えられる。住居の西側半分弱を調査し得た。埋土は部分的に2層に分かれ、20㎝ほどの深さで床面に至る。壁溝を有するが全周せず、北西部で1.8ｍの間が途切れている。床面からは壁溝の他に、北部で壁溝の内側に巡る溝2条、柱穴Ｐ1～7が検出された。これらの溝と柱穴から、この住居もＳＨ22804と同様建て換えられていると考えられる。

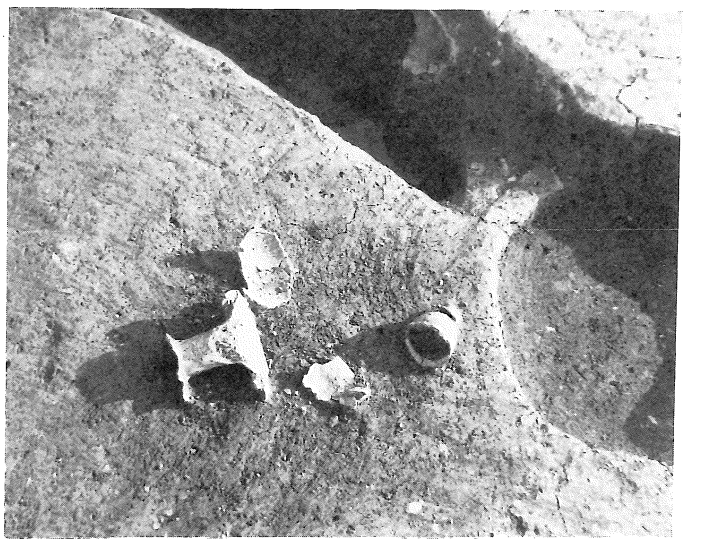
土器は、西側壁溝内から器台、土製紡錘車、南西部壁溝寄りの床面から器台、小型甕などが検出された。紡錘車は直径7.6㎝、中央孔の0.8㎝、厚さ2.9㎝の大型品でＳＨ22804出土例よりさらに大きいものである。側面には刻目が施されており、かなり磨耗していた。



第９図　竪穴住居ＳＨ 22814 実測図（1／80）

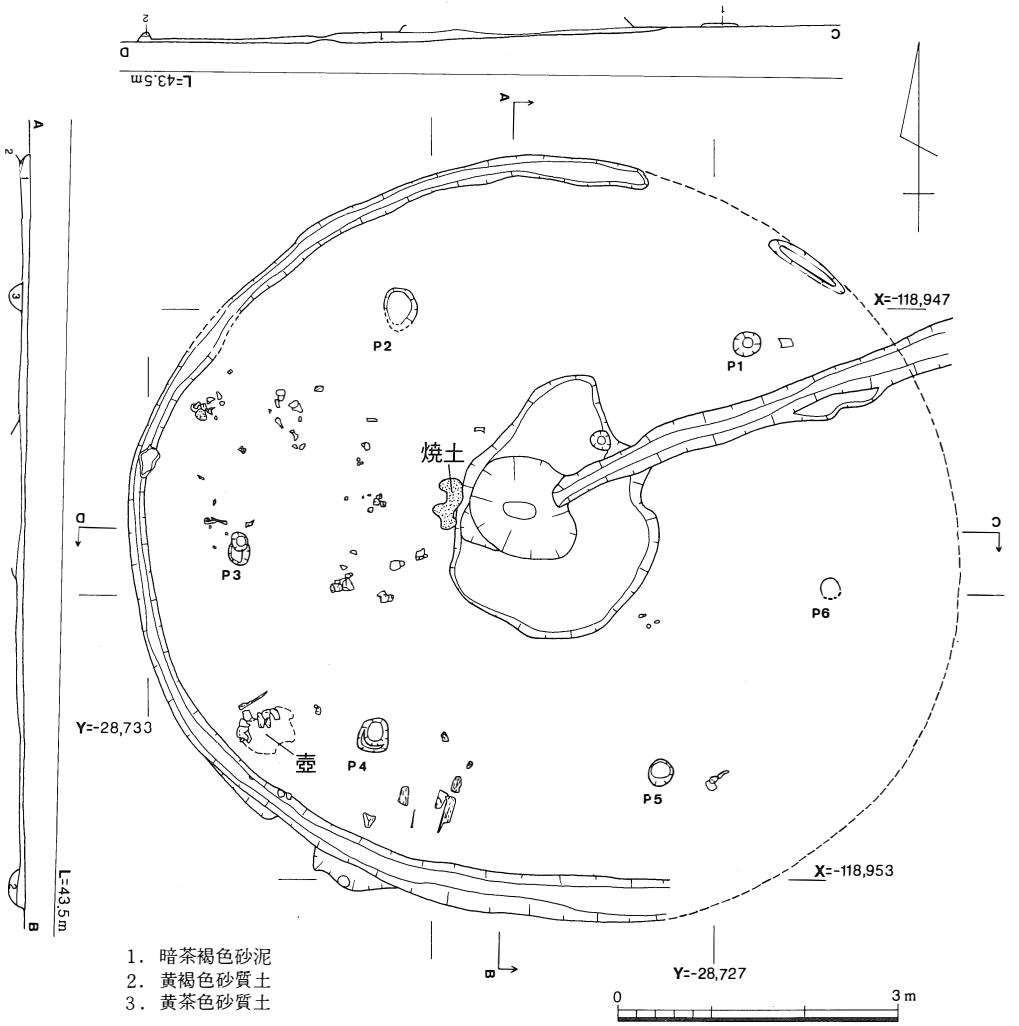
竪穴住居ＳＨ22813

ＳＨ 22814 によって東側が切られており、またこの切り合い付近から東側は削平された傾斜面によって残存していないが、ほぼ全容を検出し得た住居である。規模は南北に８ｍを測るが東西は復原すると９ｍ弱くらいになる、若干楕円ぎみを呈した住居跡である。深さは残りのいい部分でも10cm弱と浅い。床面には炭化材が多く、火災による焼失住居と考えられる。



第10図　ＳＨ 22814 遺物出土状況

住居床面には、周囲に幅20～40cm、深さ５～20cmの壁溝が巡る。主柱穴は６本で、住居中央には中央ピットが検出された。中央ピットは径 1.1ｍほどの不定形プランで10cmほど下がって平坦面をつくった後、西寄りで径 0.5ｍの円形にさらに50cmほど下がる。埋土には炭が混り、平坦面上には炭が層になって堆積していた。また北部では炭層の他に、炭と灰による層が中央



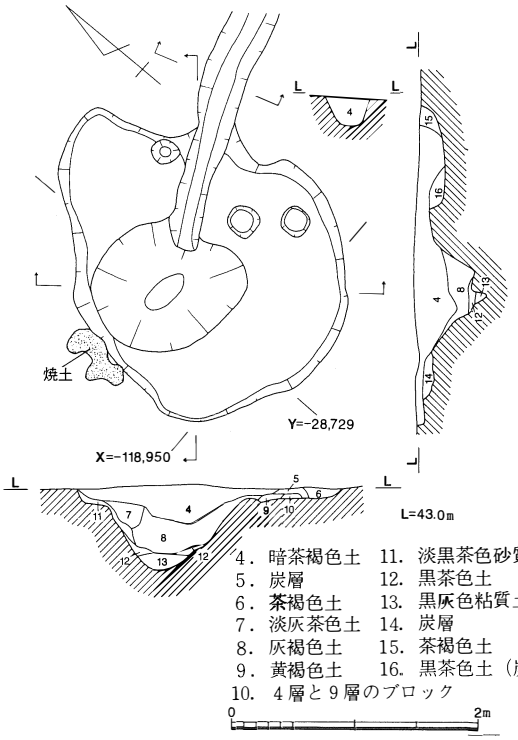
第11図　竪穴住居ＳＨ 22813 実測図（1／80）

ピットの底にかけて流れ込んでいた。中央ピットの西肩床面には焼土塊があり、この付近は炭も多く、床面から中央ピットの一段目にかけて若干赤変していたが、炉跡としては確認できなかった。この中央ピットから東方住居外に延びる溝ＳＤ 22822は、幅40cm前後、深さ20cmほどの断面Ｕ字形を呈している。この溝底は東へ順次低くなっており、ＳＨ 22814に付属する排水溝であると考えられる。

床面遺物の状況は、形になるものはＰ３とＰ４の間の壁溝ぎわに壺が１個体あったのみであるが、破片は住居の西半に多く散在しており、北部と南部にはほとんどみあたらなかった。

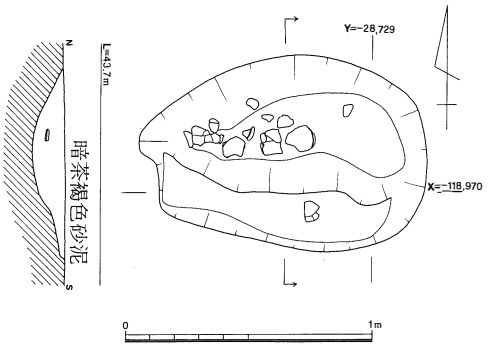
竪穴住居ＳＨ22821

隅丸方形住居の壁溝と考えられる溝が検出されている。この溝は幅20cm、深さ５cmほどで北

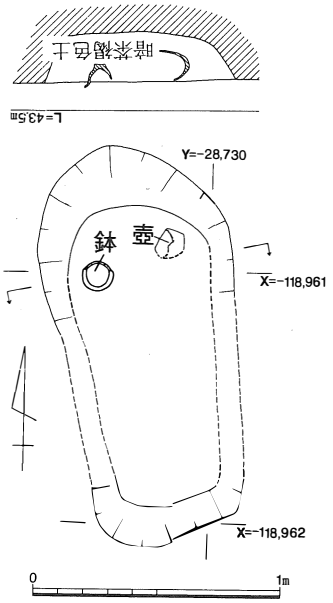


第12図　ＳＨ22813中央ピット実測図（１／60）

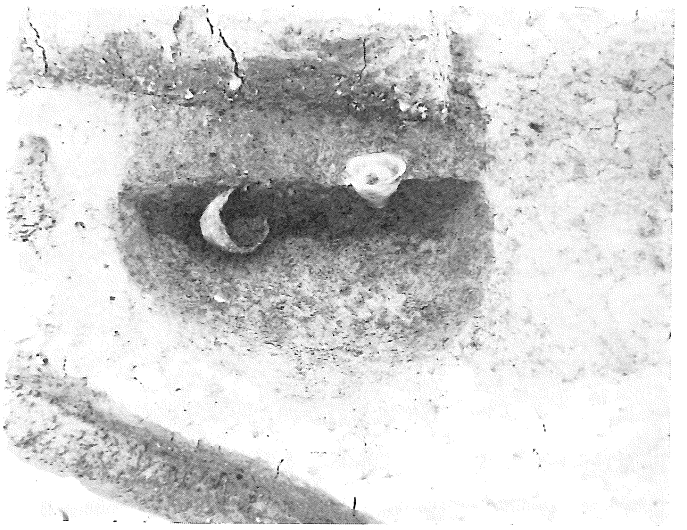
第13図　ＳＨ22813床面遺物出土状況



第14図　土壙ＳＫ22807実測図（１／30）



第15図　土壙ＳＫ22812実測図（１／30）



第16図　ＳＫ22812遺物出土状況

部では削平によって消滅しているが、南部ではカーブしてトレンチ西外に延びる。

これらの住居はＳＨ 22813 が中期に属す他は後期の時期である。

土壙ＳＫ22807

ＳＨ 22804 とＳＨ 22811 との間に位置する土壙である。規模は東西 1.1 ｍ、南北0.75m 深さ15cmを測る。傾斜はゆるやかに落ち込む。埋土は暗茶褐色砂泥の単一層である。中から投棄された土器片が比較的多く出土しているが、形になるものは少い。時期は後期に属す。

土壙ＳＫ22809

ＳＫ 22807 とＳＨ 22804 との中間に位置する。幅 0.3 ｍ、長さ 0.9 ｍほどの南北に細長い土壙で、深さは５cmほどと浅い。暗茶褐色砂泥の単一層で、遺物は破片が若干出土した程度である。

土壙ＳＫ22812

ＳＨ 22804の排水溝南隣りに位置する土壙で、幅0.7m 長さ1.6ｍの南北に細長いプランをもち、深さ20cmを測る。底は平らでＵ字に近い断面形態である。遺物は後期の鉢が完形で出土した他、壺体部下半など数は少いが大形の破片が出土した。

土壙ＳＫ22818

ＳＨ 22813 の北方、トレンチ北壁にかかる土壙で、東西 1.2 ｍ、南北１ｍ以上、深さ40cmを測る。埋土は三層よりなっており、遺物は主に暗褐色粘質土から出土した。時期は後期に属す。

土壙ＳＫ22819

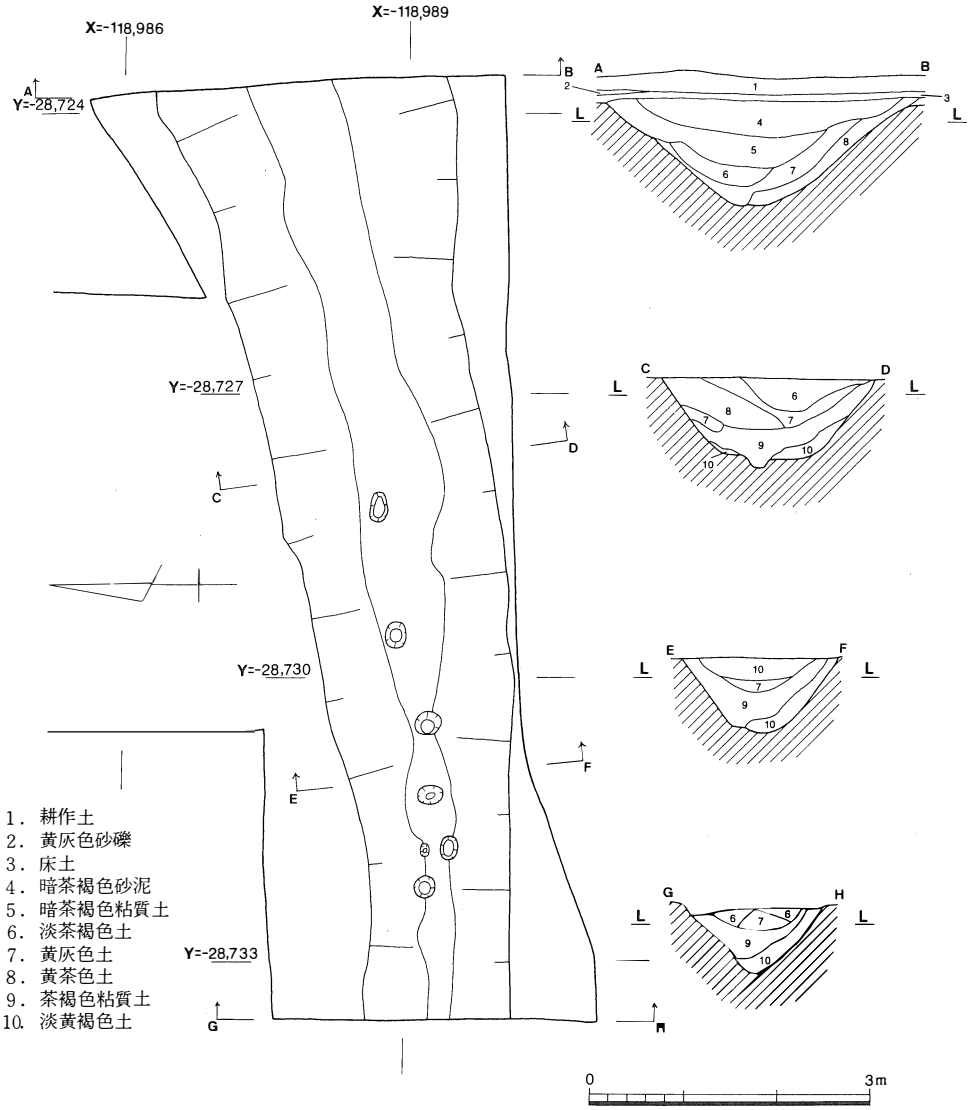
ＳＨ 22804 と重なる土壙であるが、住居が削平によって消滅しており、新旧関係は確認できなかった。幅１ｍ、長さ 1.7 ｍの不定形プランをもち、深さは60cmを測る。黄茶色ないし暗茶褐色の砂質土で埋まっており、遺物は全く出土しなかった。

溝ＳＤ22808

トレンチの南端で検出された東西溝で、規模は西端では幅 1.5 ｍ、深さ 0.7 ｍであるが、東端では幅 3.3 ｍ、深さ 1.1 ｍを測る。断面の形態はＶ字形ないしは逆台形を呈し、西から東へ深くなってゆく。10m の長さにわたって調査し得たが、溝底のラインは北側へ若干カーブしている。溝の底にはピット状の凹みが４ｍの範囲で確認された。この凹みは直径15～20cmで、深さは10cmほどである。埋土は各断面４～６層に分層され、各層から大量の土器が出土した。出土位置は各層共溝の中央部付近が多く、形になるものが密集している部分もある。最下層は南側から流入した地山崩解土で、この層は遺物が少い。

溝ＳＤ22817

トレンチ北辺近くで検出された西から東へ流れる溝で、幅20～30cm、深さ７～10cmを測り、断面Ｕ字形を呈す。ＳＨ 22808、ＳＨ 22813 を切るが、出土遺物から後期の時期と考えられる。断面形態、埋土の状況がＳＨ 22804、ＳＨ 22813 の排水溝と類似することから、調査トレンチのさらに西方にある住居跡の排水溝である可能性が高い。



第17図　溝ＳＤ 22808 実測図（１／80）

4　ま　と　め

長法寺遺跡は今回の調査によって始めて存在が知られた遺跡である。内容は今回遺構を報告した弥生時代中期から後期にかけての集落跡と、昨年度報告した奈良時代掘立柱建物群からなるが、調査面積が限られたものであり、周辺地域の調査が進んでいないことから、今後さらに他時代の遺構もみつかってゆくものと考えられる。ここでは住居構造と立地を通して長法寺遺跡の特徴をまとめておきたい。

住居の構造

12 まとめ

今回検出された住居は、いずれも部分的な検出であるため、住居の構造および床面の利用状況などを完全に把握するには至っていないが、2～3注目すべき点が新らかになった。

まず第一に2軒の住居で排水溝が確認されたことである。当地が扇状地上に立地していることはすでに述べたが、ここは西山丘陵にしみ込んだ地下水が湧出しやすい地質であり、このような環境の下で排水施設が必要であったと思われる。この点から考えるとＳＤ22808の機能の1つにこの排水目的があったであろうことは想定される。ＳＤ22808と2軒の排水溝はいずれも西から東へ傾斜しており、この原則から西半分しか検出されなかったＳＨ22804、ＳＨ22814にも排水溝が付属する可能性は十分に考えられる。

ＳＨ22811とＳＨ22813は時期・住居平面形が異なるものであるが、排水溝の始まる場所にも違いがある。つまりＳＨ22811では壁溝から始まるが、ＳＨ22813は中央ピットから始まる。後者の場合は排水溝の底面レベルは壁溝より深い。このような排水溝を伴った住居跡は、乙訓地域ではこれまで確認されていなかった。周辺地域では田辺天神山遺跡で中央ピットから延びる例が後期の時期で検出されていることから、この違いが時期的なものではなく、機能の点からむしろ住居の規模もしくは土地条件に関係するものであると考えられよう。

この問題に関連して、壁溝と中央ピットの役割りは、排水溝がとり付くことから除湿・排水の機能をまず認め得る。いわゆる「壁溝」について、これまで側板材を埋め込むための掘込み例と開放性の溝掘り例の2例が知られているが、当遺跡ではＳＨ22804やＳＨ22814でも壁溝内に土器などがはまり込んでいることから、全て開放性の溝であったと考えられる。

集落の範囲

調査地の周囲は現在でそれぞれ0.5～0.9ｍの段差をもっているが、ＳＤ22808の底面が10ｍで45㎝の高低差をもち、2.5°強の傾斜面が復原できる。長法寺遺跡はこのような傾斜面に立地しているのであるが、その範囲をここで想定しておきたい。

現在の西山丘陵には、扇状地を形成した河道の痕跡が谷筋として200～300ｍ間隔で並行している。今回の調査地はこの中の1つにあたり、トレンチは北寄り扇央部付近にあたる。扇頂部はトレンチの南西150ｍほどの所になるが、この付近で実施した第87002次立会調査では弥生土器を含む遺構状の落込みが確認されており、長法寺遺跡が扇状地の扇頂部から扇央部にかけて、丘陵を背にして展開される集落であると想定される。このような弥生集落の立地は、周辺の遺跡と比べ特異な存在といえ、今後の研究が待たれる。

注1）小田桐　淳「長岡京跡右京第228次調査概要(1)」『長岡京市報告書』第18冊　1987年3月

2）「長岡京跡右京第237次調査・谷山遺跡現地説明会資料」1986年10月

第２章　長岡京跡右京第265次（７ＡＮＩＫＥ－３地区）調査概要

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1987年７月14日から８月４日まで、長岡京市長岡三丁目25－41において実施した長岡京跡右京四条二坊十五町（西二坊大路）推定地、および陶器町遺跡の発掘調査に関するものである。

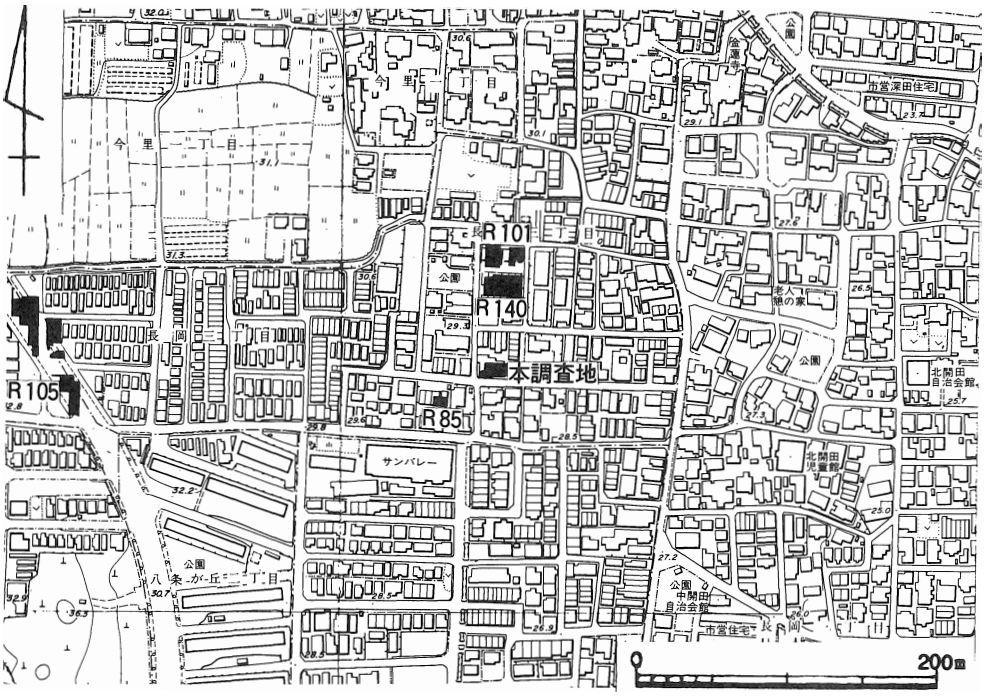
2　本調査は、共同住宅建設工事に伴う事前の発掘調査であるが、西二坊大路を究明するため、国庫補助事業として実施した。調査面積は約 118㎡ である。

3　調査は、長岡京市教育委員会が主体となり、調査員は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、原秀樹が現地を担当した。

4　調査実施にあたり、土地所有者である田村義明氏には種々のご協力を得た。また、現地調査および本報告の作成にあたっては、京都文教短期大学名誉教授　中山修一氏より種々のご教示を得た。さらに、遺物写真は財団法人京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏に撮影・指導していただいた。

5　調査後の遺物実測や図面整理には、主に原、田中智紀、占部真理が行なった。(1)

6　本報告の執筆ならびに編集は、原が行った。



第18図　発掘調査地位置図（１／5000）

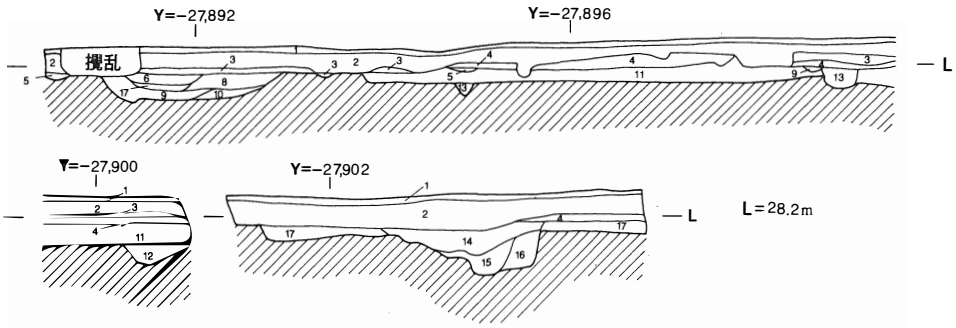
2 調 査 経 過

本調査地は、阪急電鉄長岡天神駅の北西約 700m、町名変更前は「陶器町」と呼ばれた住宅街の一角に位置している。地形的には、段丘部および緩扇状地にあたり、付近の標高は29m前後をはかる。陶器町の名称については、昭和初期に京都清水焼の陶工がこの地に移り住んだことからつけられた町名であり、これまでの発掘調査においてもレンガ積みの窯の一部や窯道具などが出土[2]している。長岡京の条坊復原によると、右京四条二坊十五町および西二坊大路に想定される所であり、なおかつ弥生時代から奈良時代の集落跡である陶器町遺跡に含まれている。調査対象地の周辺では、これまでに右京第85次[3]、第101次[4]、第105次[5]、第140次[6]調査において弥生時代後期の溝、古墳時代後期の竪穴住居、長岡京以前の掘立柱建物、長岡京西二坊大路東側溝に比定される溝などが検出されており、当地においても同様の遺構・遺物が確認されるものと予想された。このような調査成果に基き、市教育委員会は当該地における共同住宅建設計画について発掘調査が必要と判断し、国庫補助事業として調査を実施した。

調査は、西二坊大路東側溝が想定される箇所を含めて東西13m、南北８mのトレンチを設定し、一部遺構確認のため西側へ拡張を行った。調査地の層位は、基本的に旧建物の攪乱、表土、暗黄灰色砂質土を除去すると地山（黄褐色土）となり、遺構はすべて地山面で検出された。地山面の標高は28.1mをはかる。

3 検 出 遺 構

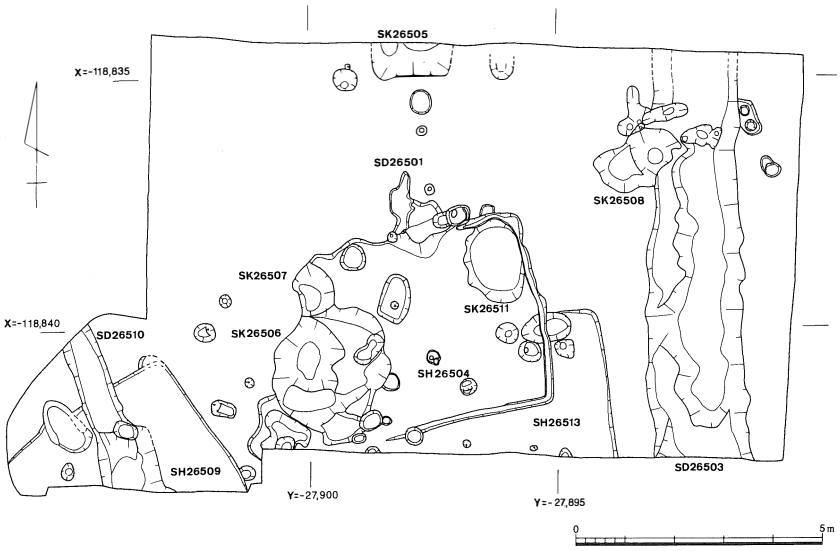
今回の調査で明らかになった主な遺構は、溝２、土壙５、竪穴住居３、ピットなどであり、他に層位的に新しい南北方向の溝３条を検出している。以下、主な遺構について長岡京期、古墳時代の順に述べる。



1．表土
2．暗黄灰色砂質土
3．灰色砂質土
4．黄灰色砂質土
5．褐色砂質土
6．茶灰色土
7．灰色粗砂
8．淡茶褐色土
9．暗茶褐色土
10．黄褐色粘質土混り茶褐色土
11．暗茶褐色土
12．黄褐色粘質土混り暗茶褐色土
13．暗茶灰色土
14．茶褐色土
15．暗茶褐色土（地山ブロック混り）
16．明茶褐色粘質土
17．暗茶灰色土（ＳＨ26509）

0　3m

第19図　調査地南壁土層図（１／80）



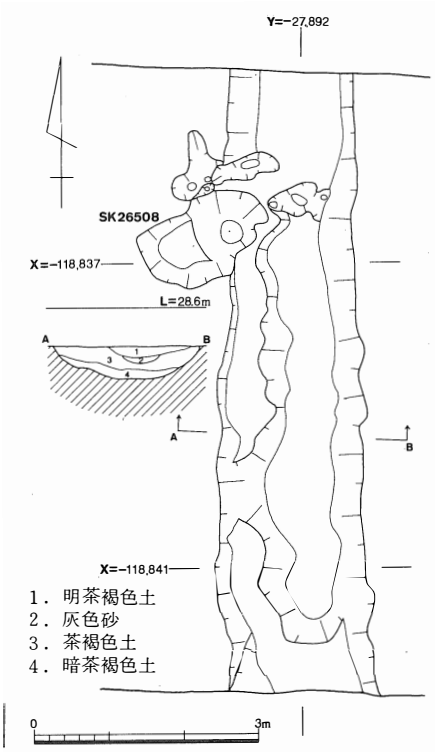
第20図　検出遺構図（１／150）

溝ＳＤ26503　　トレンチ東端で検出した南北方向の溝である。幅は 1.7～ 2.0ｍをはかり、深さは部分的にわずかに落込む箇所がみられ最も深いところで約 0.5ｍをはかる。溝内の堆積層は、中程に砂の堆積がわずかに認められる他は、流水や滞水の状況は認められなかった。遺物は、少量の土師器、須恵器が出土したが図化できるものはわずかである。また、北約50ｍ地点で行われた右京第140次調査で検出した溝ＳＤ14001は、規模や方向、座標位置からみて同一の溝と考えられる。

竪穴住居ＳＨ26504　　トレンチ中央部で検出した方形住居で、北西辺に造り付けカマドを有する。規模は、西側部分が土壙ＳＫ26506等と重複しており明らかではないが、東側の一辺は 3.9ｍをはかる。カマドは壁より張出して築かれており、その内側は長円形に浅く掘り込まれている。カマド内からは焼土層とともに土師器の小片が出土した。また、カマドの東側に近接する土壙ＳＫ26511は貯蔵穴と考えられるが遺物は出土しなかった。なお、柱穴については明確に検出されなかった。遺物は、土師器、須恵器、滑石製紡錘車などが出土している。

竪穴住居ＳＨ26513　　トレンチ中央部で検出した方形住居で、北西辺の一部は竪穴住居ＳＨ26504と重複しており、相互の前後関係は本遺構の方が古い。北壁では、中央よりやや東へ寄る部分で焼土塊を含む長円形の掘り込みが検出されており、カマドの一部と推定される。壁溝・柱穴は確認されなかった。また、ＳＨ26504と重複する部分については、トレンチ南壁でもＳＨ26513のつづきは確認されなかった。本住居は他の２軒と比べて浅く、床面までの深さは約10㎝未満である。遺物は、土師器、須恵器が出土している。

土壙ＳＫ26506　　長径 2.6ｍ、短径 2.3ｍ、深さ 0.8ｍをはかる惰円形の土壙で、竪穴住



第21図　溝ＳＤ26503実測図（１／100）

付表－２　西二坊大路関連遺構座標一覧表

東側溝

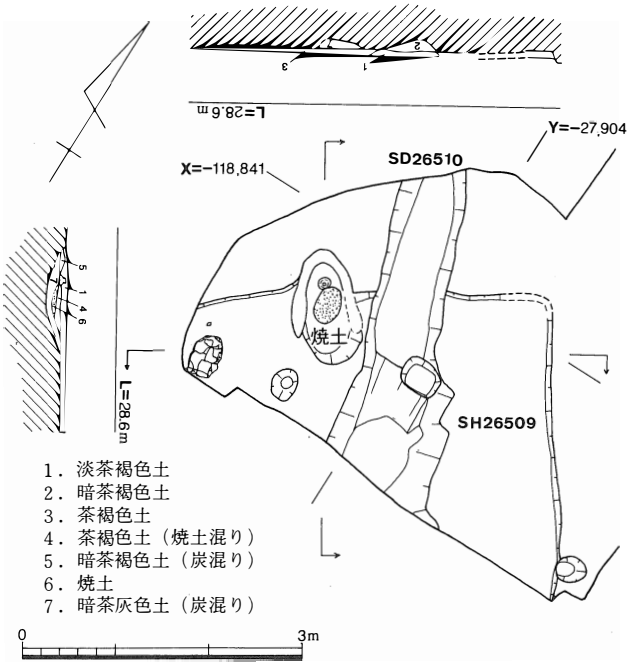
遺　構　名	国土座標（X）	国土座標（Y）	標高
ＳＤ 28501	−117.840.0	−27.896.3	29.9
ＳＤ 17104	−118.150.0	−27.894.85	27.4
ＳＤ 0731	−118.346.54	−27.895.29	25.9
	−118.450.54	−27.895.52	26.2
ＳＤ 14001	−118.789.0	−27.892.38	28.7
ＳＤ 26503	−118.839.0	−27.892.0	28.1
ＳＤ 9040	−119.586.5	−27.898.295	21.8
9044	−119.594.0	−27.895.5	21.8

西側溝

遺　構　名	国土座標（X）	国土座標（Y）	標高
ＳＤ 2601	−118.450.5	−27.912.2	
ＳＤ 9039	−119.586.5	−27.911.695	21.8

朝堂院中軸線

	国土座標（X）	国土座標（Y）	標高
	−117.542.57	−26.840.39	32.0



第22図　竪穴住居ＳＨ26509実測図（１／80）

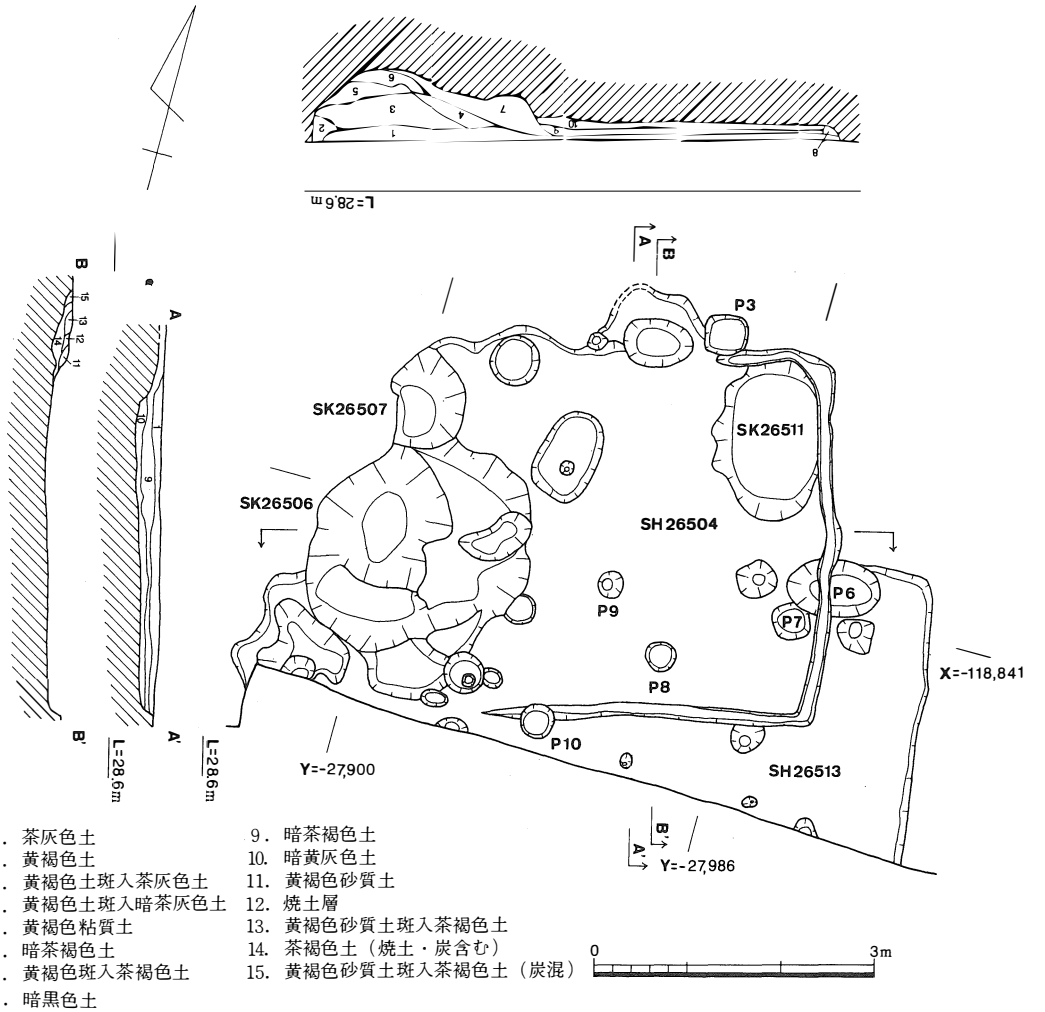
居ＳＨ26504より後に掘られたものである。土壙の東側と南側は浅い段をもつ。遺物は、土師器、須恵器が出土している。

溝ＳＤ26510　　トレンチ西端で検出した溝で、竪穴住居ＳＨ26509と重複しており、相互の前後関係は溝の方が新しい。溝は、幅 0.7m、深さ0.15mをはかり、南壁にかけて幅、深さともに 1.2m、 0.5mと拡大する。遺物は、土師器、須恵器が出土している。

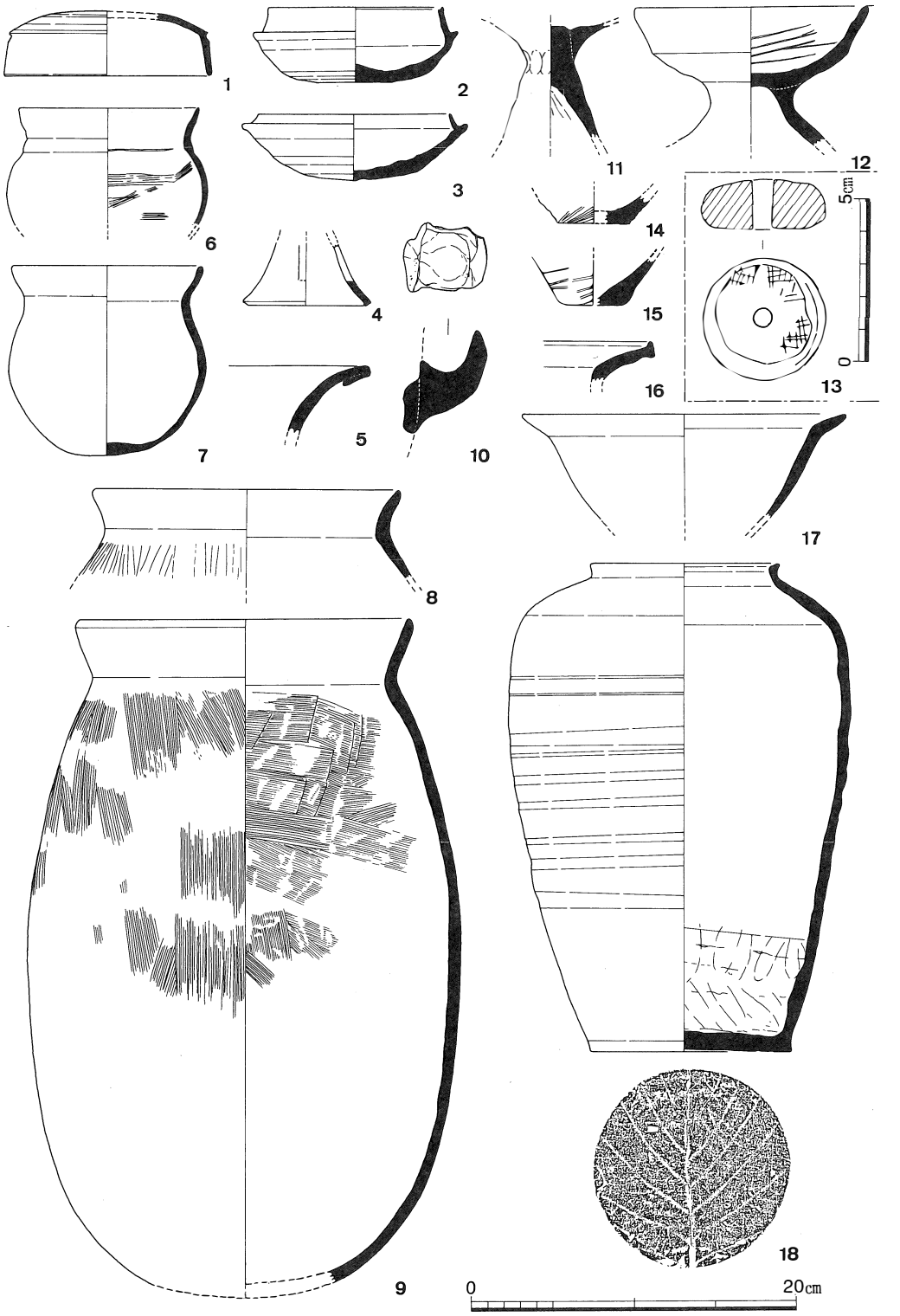
4　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、土馬、滑石製紡錘車、陶器などであり、その大部分は竪穴住居や溝から出土したものである。しかし、遺構は検出されなかったものの弥生～古墳時代の遺物も出土しており、最後にまとめて概略したい。

溝ＳＤ26503　出土遺物　　土師器、須恵器、土馬、瓦が少量出土した。須恵器壺Ｂ（18）は、体部内面下半をナデ調整し、内面上半と外面をヨコナデ仕上げする。底部外面には木ノ葉圧痕



第23図　竪穴住居ＳＨ26504・ＳＨ26513実測図（１／100）



第24図　出土遺物実測図（1／4・1／2）

がみられる。口径11.4㎝・器高29.7㎝。他に木ノ葉圧痕を有する例としては、左京第27次[7]調査で出土した須恵器甕がある。他の出土遺物は、土師器壺Ｂ、須恵器坏Ｂなどがある。

竪穴住居ＳＨ26504出土遺物　土師器、須恵器、滑石製紡錘車が出土した。土師器には、甕（６・８）、把手（10）、高坏（11）がある。６は、淡灰色系の色調を呈し、胎土中の砂粒は他に比べて微小である。体部内外面はハケメ調整を行う。８は、胎土に多量の粗砂粒を含み、黄褐色系の胎土・色調を呈する。体部外面はハケメ調整、内面は磨滅している。10は、甕の把手と考えられ、貼付によって接合している。他に７点出土している。11は、脚部内面にしぼり目を残し、坏部と脚部の接合面で剥離している。須恵器には、高坏（４）の他、坏・蓋・甕・壺・器台がある。４は、脚部のみの小片で透しは長方形と考えられる。なお、ＳＤ26503から出土した甕（５）も同時期と考えられ、他は小片のため図示しえなかった。滑石製紡錘車(13)は１点出土した。全体に磨滅しているが、底部にわずかに斜格子が観察される。

竪穴住居ＳＨ26509出土遺物　土師器、須恵器が出土した。土師器には、甕（７・９）、高坏（12）がある。７は、胎土に多量の粗砂粒を含み、赤褐色系の胎土、色調を呈する。内外面とも磨滅している。９は、長胴の体部と斜め上にひらく口縁部をもつ大型の甕である。橙褐色系の色調を呈し、胎土に多量の砂粒を含む。12は、裾ひろがりの低い脚部と、曲折して立つ口縁部をもつ。坏部内面にはわずかにヘラミガキの痕跡をとどめる。この高坏は、カマド内で支脚として使用されていたものである。須恵器には、坏・蓋・壺・甕などが出土している。

弥生・古墳時代の出土遺物　上記の各遺構出土遺物の他にも、少片であるが弥生・古墳時代の土器が出土している。弥生土器には、甕（14～16）、鉢（17）がある。いずれも弥生時代後期に比定される。須恵器には、坏（１）、蓋（２）がある。１は、体部外面に重焼きの痕跡がみられる。いずれも陶邑古窯址群のⅠ期に比定される。

５　ま　と　め

今回の調査は、長岡京西二坊大路の確認、および陶器町遺跡の集落構造を解明することを目的としたものである。調査面積は限られているものの、検出された遺構は従来の調査成果とあわせて新たな資料を追加することとなった。以下、その概略を述べる。

本調査地は、長岡京の条坊復元によると西二坊大路東側溝の推定位置にあたる。すでに東側溝については、右京第７・26次[8]、第90次[9]、第140次[10]、第171次[11]、第285次[12]調査で検出されており、現在のところ右京域における南北道路の中では最も調査例の多い条坊側溝である（付表―２）。中でも、今回検出した溝ＳＤ26503については、本調査地の北約50ｍ地点で行った右京第 140次調査で検出した溝ＳＤ14001と、規模、方位、検出座標値が近似しており、一連の遺構と考えられる。しかし、これまでの調査で明らかにされた東西両側溝の検出座標値から、朝堂院中軸線より起算した推定西二坊大路中軸線までの距離をはかると各々に近似した数値を示

しているが、その中でも溝ＳＤ14001とＳＤ26503については最も東に位置している。しかし本調査地においては当該溝を検出した他は何も確認されず、周辺の遺構との関連は明らかにしえなかった。さらに、西二坊大路は東側溝に比べて西側溝の調査例が少なく、路面幅についても未だ確定する資料が少ない状況にあり、これらの点については今後の調査成果に負うところである。なお、この他にも西二坊大路東側溝推定地に含まれる地点を右京第101次[13]、第147次[14]調査として実施したが、いずれも当該溝は検出されなかった。

陶器町遺跡については、弥生時代（中～後期）、古墳時代（後期）、奈良時代にわたって営まれた集落跡であり、今回の調査では弥生時代後期の土器少量と、古墳時代後期の竪穴住居３軒を検出した。古墳時代後期の竪穴住居は、本調査地の他に右京第85次、第105次調査で各１軒、またその可能性の高いものが同じく各１例検出されている。中でも今回検出した竪穴住居については、いずれも北西方向にカマド、又は焼土塊を含むピットを検出しているが、竪穴住居の主軸方向にはちがいがみられる。各竪穴住居の時期については、ＳＨ26504は須恵器からみて７世紀前葉と考えられ、ＳＨ26509についてもほぼこれに近接する時期と考えられる。この他にも、遺構は検出されなかったものの周辺の調査地と同様に、弥生～古墳時代の遺物が出土しており、本調査地が位置する段丘部一帯にも同時期の集落が存在することを改めて示すものと考えられる。

注１　この他にも、井上礼子、山本志津子の御協力をいただいた。

２　小田桐　淳「右京第140次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度　1984年３月

３　山本輝雄「長岡京跡右京第85次調査概要」『長岡京市報告書』第９冊　1982年３月

４　小田桐　淳「右京第101次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和57年度　1983年３月

５　山口　博「長岡京跡右京第105次発掘調査概要」『京都府センター概報』第９冊　1983年３月

６　注２に同じ

７　山中　章「長岡京跡左京第27次発掘調査概要」『向日市報告書』第６集　1980年３月

８　高橋美久二・木村泰彦他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』　1980年

９　岩崎　誠「長岡京跡右京第90次調査概要」『長岡京市報告書』第９冊　1982年３月

10　注６に同じ

11　長谷川　達・石尾政信「長岡京跡右京第171次発掘調査概要」『京都府センター概報』1985年３月

12　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより調査継続中。石尾政信氏より御教示を得た

13　注４に同じ

14　原　秀樹「右京第147次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度　1987年２月

第３章　長岡京跡左京第184次（７ＡＮＭＳＴ－４地区）調査概要

１　は　じ　め　に

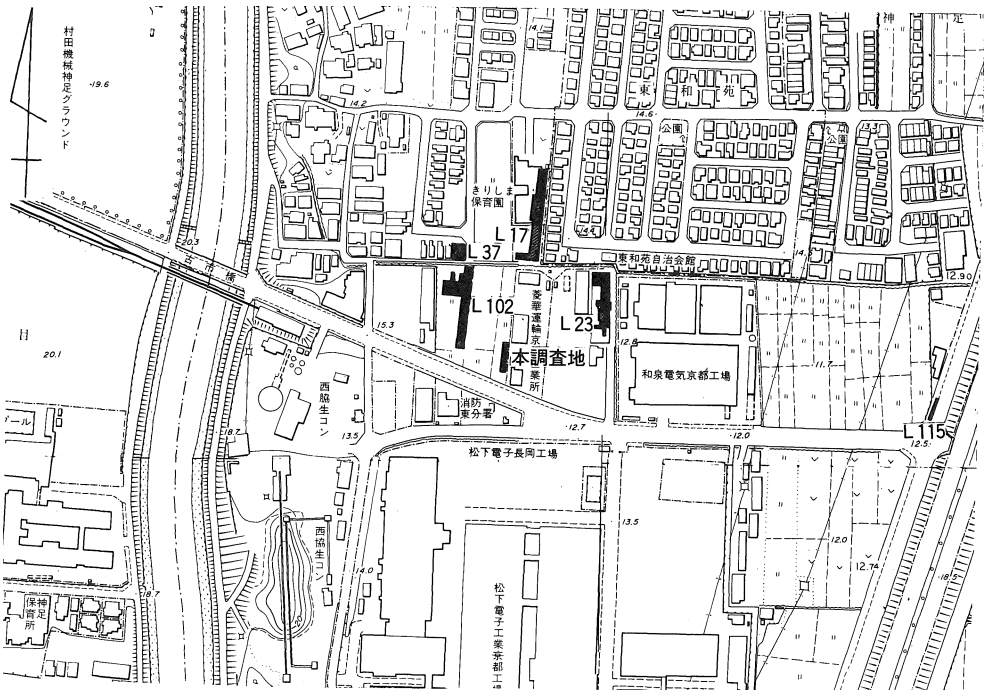
1　本報告は、1987年11月26日～12月26日まで、長岡京市神足芝本６において実施した長岡京左京六条一坊、六条第二小路と東一坊坊間大路の交差点、および雲宮遺跡・芝本遺跡の発掘調査に関するものである。調査面積は約 120㎡ である。

2　本調査は、長岡京条坊制解明のために重要遺跡確認調査の一つとして、長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。現地調査は長岡京市教育委員会文化財係中尾秀正が担当した。

3　調査後の遺構図面の整理、遺物の分類・実測・製図は、中尾・占部真里が担当した。(1)

4　調査実施にあたり、土地所有者である伊辻克美氏をはじめ、近隣土地所有者の方々の御協力を得た。また、調査中には、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどからご指導、ご援助を賜った。さらに、遺物写真は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏に撮影していただいた。

5　本報告の編集・執筆は中尾秀正が行った。



第25図　発掘調査地位置図（１／5000）

2 調 査 経 過

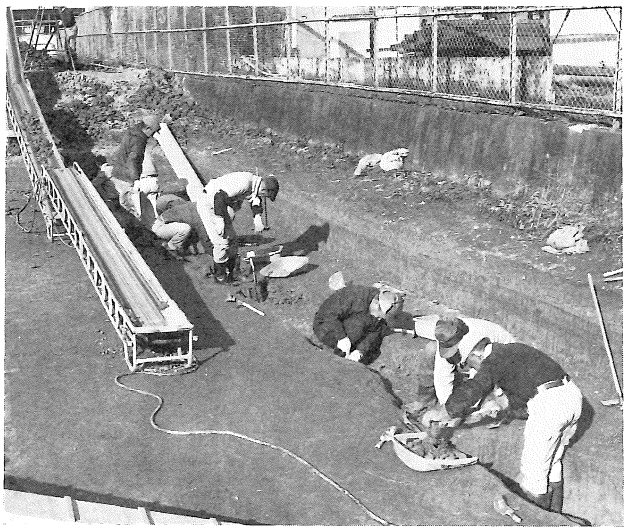
当調査地は、長岡京市の東部にあり、ＪＲ神足駅から東約 500ｍに位置する。地形的には、西から東に緩やかに傾斜した緩扇状地に立地しており、水田面の現地表は約12ｍを測る。当地から約200ｍ西側には、傾斜変換線に沿って小畑川が南流する。当地は、長岡京の条坊復原によれば長岡京左京六条一坊にあたり、また、弥生時代から古墳時代の集落跡である雲宮遺跡および縄文時代の散布地である芝本遺跡の範囲に含まれている。

今回の調査は、当地が左京六条一坊七町の東辺と南辺を画する東一坊坊間大路と六条第二小路との交差点と推定され、七町の宅地利用とともに長岡京の条坊制を解明する上で重要地点にあたるため、土地所有者の協力を得て、実施することとなった。

調査は、南北に細長い水田の南部に東西約５ｍ、南北約20ｍの発掘区を設定し、重機を用いて青灰色粘質土上面まで除去した。除去にあたっては、調査後元の農地に復するため耕作土・床土と下層とに分けて行った。その後人力により遺構検出に努め、記録を行った。さらに下層遺構を確認するため再び重機により緑灰色粘土上面まで除去し、人力によって遺構検出に努めた。なお、調査区の北部の東端で溝状遺構が検出されたため、調査区を東に拡張した。また、調査中に南部の東壁が崩壊したため、防護柵を設けた。調査後、順次埋め戻し、旧状に復した。

3 検出遺構と出土遺物

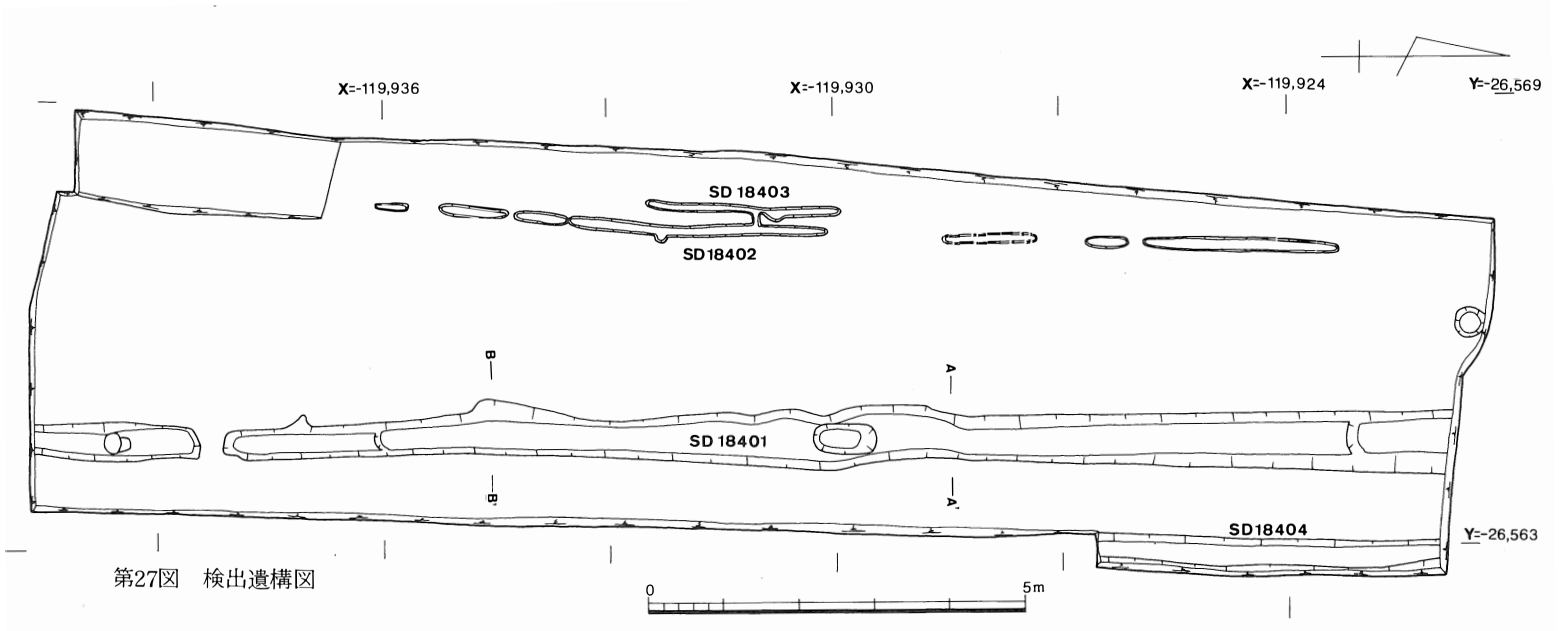
調査地の基本層序は、耕作土と床土の下に灰褐色砂・黄灰色砂質土が堆積している。灰褐色砂は洪水による氾濫の影響を被って堆積したものと考えられる。その下に暗灰色砂質土・暗黄褐色シルト・暗灰色シルト・青灰色粘土の順に、それぞれ約0.1ｍの厚さで水平堆積している。



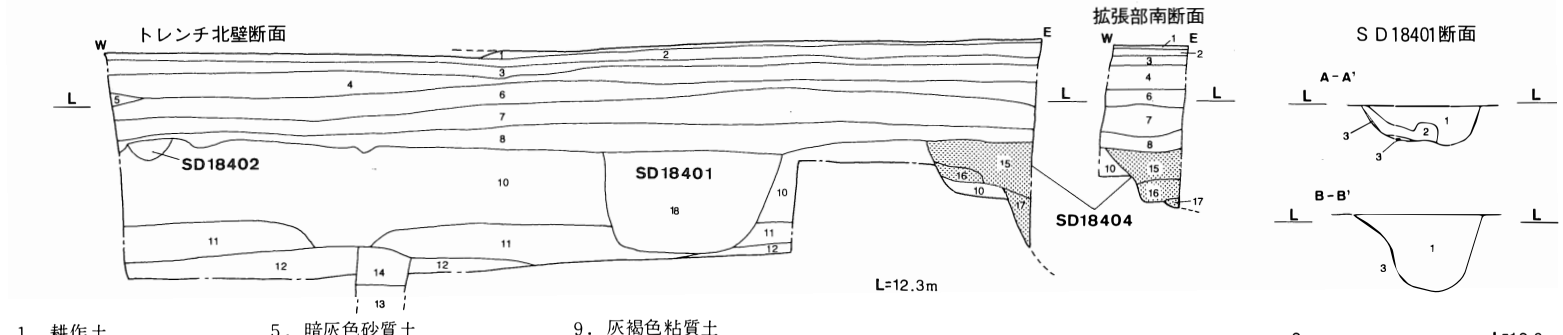
第26図 調査作業風景

青灰色粘土には土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦のほかに瓦器が含まれていた。さらにその下に黄灰色粘土があり、地表下1.2ｍで緑灰色粘土となる。黄灰色粘土は厚さ0.5ｍで、縄文土器の破片をわずかに包含するが、緑灰色粘土は軟質で、出土遺物が確認されなかったことから地山と考えられる。この面はほぼ平坦であるが、やや南から北に向かって緩やかに傾斜する。

遺構は青灰色粘土を除去した黄灰



第27図　検出遺構図



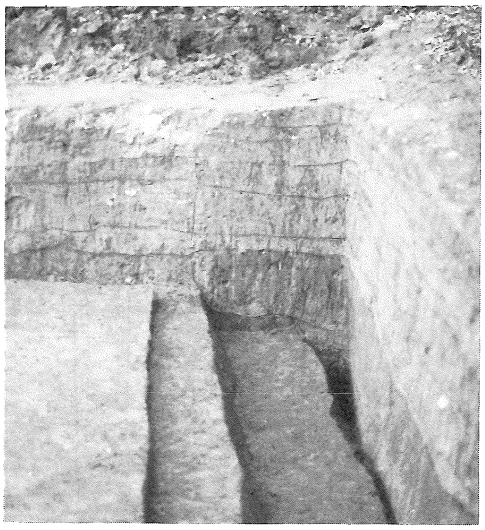
1．耕作土
2．灰褐色砂質土（床土Ⅰ）
3．灰褐色砂（小石混り）
4．黄灰色砂質土（床土Ⅱ）
5．暗灰色砂質土
6．暗黄褐色シルト（鉄分混り）
7．暗灰色シルト（鉄分混り）
8．青灰色粘土（鉄分混り）
9．灰褐色粘質土
10．黄灰色粘土又は黄灰色シルト
11．暗黄灰色粘質土（鉄分多量混り）
12．緑灰色粘土
13．明青灰色粘質土
14．明青灰色粘土
15．暗茶灰色粘質土
16．暗灰色粘質土
17．明青灰色シルト（炭片混り）
18．青灰色粘土（ＳＤ01埋土）

ＳＤ04埋土

1．青灰色粘土
2．黄灰色粘性砂質土
3．黄灰色粘土

第28図　調査地土層図

第29図　溝ＳＤ18401断面



第30図　溝ＳＤ18404断面

色粘土上面で検出された南北方向の溝４条である。なお、下層の緑灰色粘土上面で明青灰色粘土を埋土とする柱穴状のものを検出したが、出土遺物もなくその性格は明らかでない。

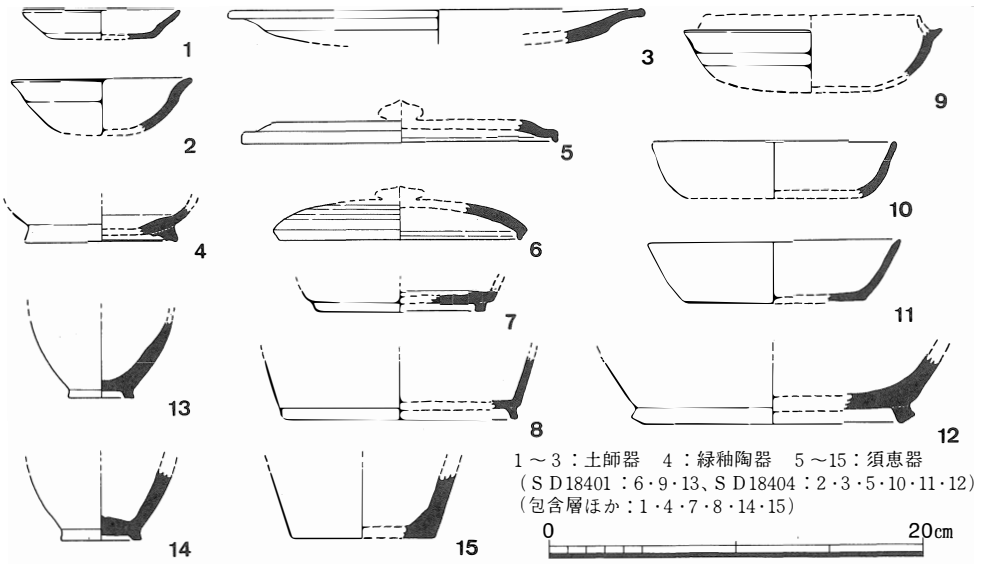
溝ＳＤ18401　素掘りの溝で、調査区の南部で一旦途切れ、0.3ｍあけて再び続く。幅約0.7ｍ、深さ約0.2～0.4ｍで、Ｕ字状の断面を呈する。なお、調査区の北端では幅約１ｍ、深さ約0.6ｍを測り、堅牢なものとなっている。埋土は青灰色粘土で、一部で下層に黄灰色粘性砂質土が堆積する。溝は底面に凹凸があり、埋土状況からみると水の流れはなかったと考えられる。遺物は青灰色粘土から土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・製塩土器・瓦の破片が出土している。

溝ＳＤ18402・ＳＤ18403　浅い素掘りの溝で、幅約0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は溝ＳＤ18401と同様に青灰色粘土で、遺物は出土していない。

溝ＳＤ18404　北部東端の拡張部で検出された溝。調査区域が限られたため溝の規模は明らかにできなかったが、二段に落ち込む素掘りの溝で、幅0.5ｍ以上、深さ0.6ｍ以上を測り、4.5ｍを検出した。溝の底面は緩やかに北から南に傾斜している。埋土は暗茶灰色粘質土（上層）・暗灰色粘質土（中層）・明青灰色シルト（下層）の三層に分かれている。遺物は、上層から土師器・須恵器・製塩土器・木片、中層から土師器、下層から炭片がそれぞれ出土し長岡京期に埋没したことが明らかになり、東一坊坊間大路の東側溝と推定される。

出土した遺物は、縄文・古墳時代から近代にいたる各時代の遺物がコンテナ３箱出土している。その種類は縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器・緑釉陶器・瓦器・陶器・瓦などがある。これらの遺物は、ほとんどが包含層の青灰色粘土および溝ＳＤ18401・ＳＤ18404から出土し、その多くは小片のため、実測が不可能であった。

包含層おもに青灰色粘土からは中世の土師器の小皿（１）や瓦器のほかに、須恵器の坏Ｂ（７・８）・壺Ｍ（14）・鉢（15）や土師器（高坏など）、近江産の緑釉陶器（４）、平瓦な



第31図　出土遺物実測図（１／４）

どの中世以前のものも出土している。

溝ＳＤ18401　須恵器には陶邑古窯のＴＫ43型式に相当する坏身の破片(9)や口縁端部を屈曲させる坏Ｂ蓋（６）、輪高台をもつ壺Ｍ（13）がある。13の底部外面にはヘラ書きの線刻が施されている。他に甕や壺Ｋまたは平瓶の体部片などもある。土師器には皿・椀・甕・羽釜または鍋の破片などがある。この他に瓦器（椀）や黒色土器、平瓦の破片などがある。

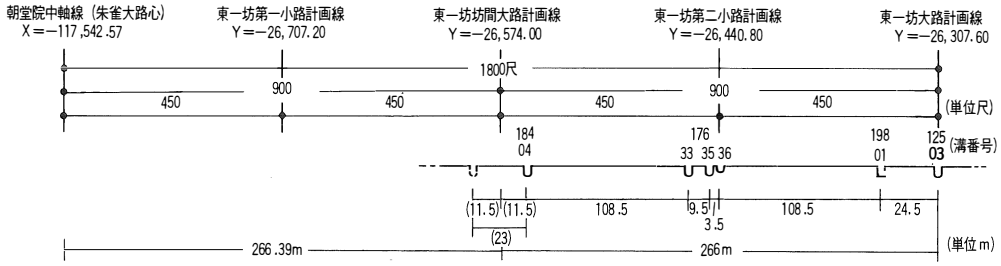
溝ＳＤ18404　土師器には壺Ｂ（２）・高坏（３）・皿・坏・壺・甕などがある。２はいわゆる墨書人面土器の口縁部の破片であるが、墨書は確認できなかった。須恵器には坏Ｂ蓋（５）・坏Ａ（10・11）・壺または鉢の底部（12）などがある。このほか製塩土器・木片などがある。

４　ま　と　め

今回の調査により、中世の溝３条と長岡京期の溝１条が検出された。ほかに周辺の調査で確認されている芝本遺跡や雲宮遺跡に関する縄文土器・古墳時代の土器類も出土した。

ところで、当初期待した東一坊坊間大路と六条第二小路との交差点は残念ながら検出されなかったが、東一坊坊間大路の東側溝と推定される溝ＳＤ18404が検出され、長岡京の条坊制を解明する上で貴重な資料を得ることができた。ここでは、この溝についてこれまでに調査研究の知見を考慮しながら検討を加えてみよう。

長岡京の東一坊坊間大路は、これまで検出例がなく、その路面幅が明らかにされていない。いま、調査によって明らかにされた内裏南北中軸線を東一坊坊間大路計画線と仮定し、道路の振れ角を度外視して計算すると、溝ＳＤ18404との距離は10.08ｍで、東一坊坊間大路の道路幅



朝堂院中軸線（朱雀大路心）
　X＝－117,542.57　Y＝－26,840.39
内裏中軸線
　X＝－117,536.540　Y＝－26,572.580
溝ＳＤ18404（推定東一坊坊間大路東側溝）
　X＝－119,924.00　Y＝－26,562.50
溝ＳＤ17633（推定東一坊第二小路西側溝）
　X＝－119,307.50　Y＝－26,454.00
溝ＳＤ17635（推定東一坊第二小路東側溝）
　X＝－119,307.50　Y＝－26,444.50
溝ＳＤ17636（推定東一坊第二小路の東側宅地境界溝）
　X＝－119,307.50　Y＝－26,441.00
溝ＳＤ19801（推定東一坊大路西側溝）
　Y＝－26,332.50
溝ＳＤ12503（推定東一坊大路東側溝）
　Y＝－26,308.00

第32図　東一坊坊間大路復原概念図

（溝心々間）は20.18mとなる。一方、朝堂院中軸線から求めた数値を東一坊坊間大路計画線と仮定し、同様に計算をすると、道路幅（溝心々間）は23mとなる。いずれも、東一坊坊間大路はこれまでに長岡京で検出された二種類の大路幅（60尺と80尺）のうち、80尺前後の広い幅の大路と推定される。このことは東一坊坊間大路が内裏の南にある宮南面の東門に通じる大路であり、平城京・平安京の例からも妥当な幅といえよう。

次に、東一坊の地割にふれておこう。東一坊第二小路は東西両側溝が確認され、溝心々間9.5mで、東側溝の東 3.5mに小路と宅地を画する溝がある。[2] 東一坊大路は異なる調査地で東・西側溝がそれぞれ確認され、[3] 溝心々間が約24.5mで、東一坊第二小路と東一坊大路間の宅地の東西距離が 108.5mと想定できる。また、検出された溝ＳＤ18404を東一坊坊間大路の東側溝とした場合、東一坊第二小路と東一坊坊間大路間の宅地も 108.5mと同じであり、東一坊大路に面する宅地が道路幅を確保するためより狭くなる平城京の地割と異なっている。また、条坊計画心が平城京では道路心上に設定されているのに対し、長岡京ではほぼ東一坊大路の東側溝心上にきている。このように従来から平城京型といわれてきた長岡京の条坊制にもいくつかの相違点がみられる。今後、未検出である朱雀大路東側溝および東一坊第一小路の検出と合わせて、朱雀大路に面した一坊の地割方法を再検討していく必要がある。

注1　なお、(財)長岡京市埋蔵文化財センター白川成明氏に多大な御協力を得た。

2　木村泰彦「長岡京跡左京第 176次調査記者発表資料」1987年

3　東側溝…久保田健士「長岡京跡第125次（７ＡＮ３Ｂ地区）」『京都府埋蔵文化財情報』第６号1982年
西側溝…国下多美樹「長岡宮跡第 198次発掘調査概報」『向日市埋蔵文化財調査報告書第24集（1987）』

第４章　長法寺七ツ塚古墳群第２次調査概要

長岡京跡右京第 269次（７ＡＮＪＫＫ－２地区）調査概要

１　は　じ　め　に

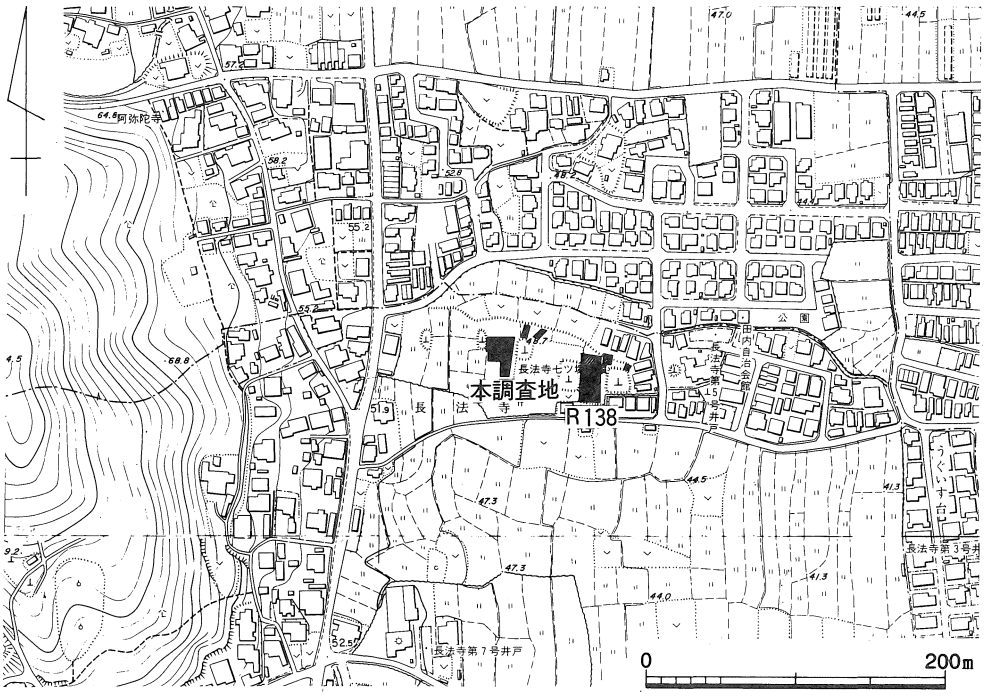
1　本報告は、1987年７月21日から８月25日まで、長岡京市長法寺北畠17番地において実施した長法寺七ツ塚古墳群の２・３号墳、および長岡京跡右京三条四坊十四町推定地の発掘調査に関するものである。

2　本調査は、長法寺七ツ塚古墳群中の２号墳と３号墳の間を開発する計画がもちあがったため、古墳群の保存施策に参考となる資料を作成する目的で行った。

3　調査は、長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。調査員は、(財)長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、山本輝雄が現地を担当した。

4　調査にあたっては、土地所有者である藪内治作氏をはじめ、三上道頼氏、大実建設株式会社など隣接地の方々に種々の御便宜を得た。また、調査中には中山修一、都出比呂志の各氏から御指導と御教示を賜った。記して、感謝の意を表したい。

5　本報告の編集・執筆は山本が行ったが、整理作業に際しては主に田中佐知子氏の協力を得ることができた。

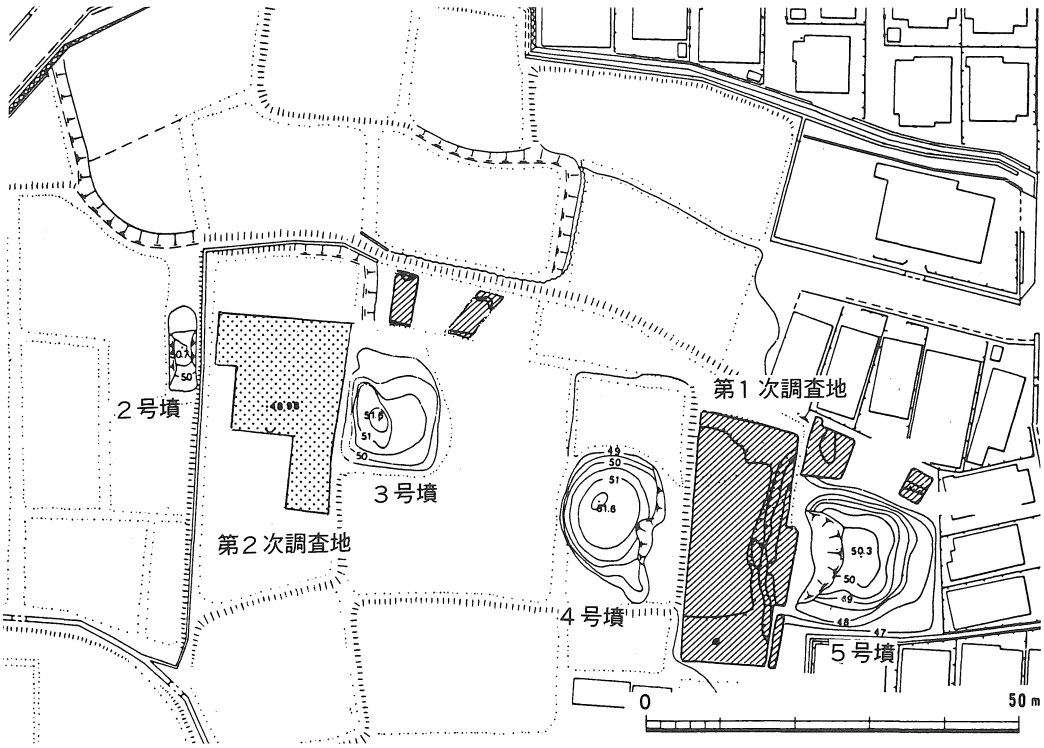


第33図　発掘調査地位置図（１／5000）

2 調 査 経 過

長法寺七ツ塚古墳群は、長岡京市長法寺北畠に所在する古墳時代後期に築造された古墳群で、その名が示しているように7基の古墳で構成されている。この古墳群は、西山山地の東麓に形成された扇状地で、南北を谷地形に挟まれた舌状に延びる尾根筋に立地し、標高が51～46mほどの範囲内にほぼ20mの間隔をおいて東西一列に並ぶ特徴をもつ。7基の古墳は、いずれも20m以下の小古墳で、西から順に1・2・3・4・5・6・7号墳と呼称されているが、そのほとんどは後世の土取り等によって墳丘の原形が損なわれている。その中で、中央に位置する3～5号墳の3基は、比較的遺存の度合が良好で、規模も大き目であった。これまで、3号墳と7号墳からは、副葬品とみられる須恵器が一括で出土しており、須恵器の型式から築造年代が6世紀の中頃であると考えられている。また、石材等が全く認められないので、埋葬施設は横穴式石室でなく、木棺直葬であることが推察されている。さらに、1983年に実施した第1次調査（長岡京跡右京第 138次調査）では、5号墳の西裾で陸橋を有する周溝が検出されるなど、古墳群の様相が次第に判明しつつあった。(1)

今回、2号墳と3号墳間の畑地を開発する計画がもちあがった為、古墳群の保存施策に参考となる資料を得る目的で発掘調査を実施することになった。発掘調査では、2および3号墳に周溝が伴うか否かを確認するとともに、当地が長岡京の右京三条四坊十四町にもあたることか



第34図　調査地周辺地形図（1／1000）

ら、それに関する遺構の確認に主眼をおいた。発掘区は、作物が栽培されている所を除外した範囲に設定し、1987年７月21日より調査を開始した。まず、重機で耕土を除去した後、人力で遺構の検出に努めた結果、２号墳と長岡京に関係する遺構は皆無であったが、３号墳の周溝とみられるＳＤ 26901を検出することができた。その過程で、発掘区を適宜拡張したため調査面積は約 330㎡ となった。そして、検出遺構の保存を図るべく川砂を入れて埋め戻し、８月25日に現地での調査を終了した。

第35図　検出遺構図（１／200）

3 検 出 遺 構

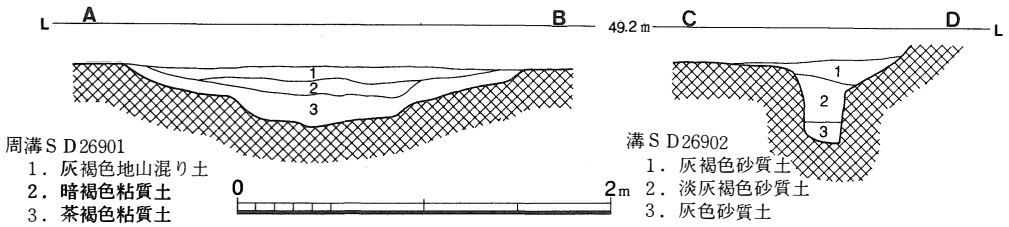
発掘区内の堆積土層は、耕土の下に床土があり、そのすぐ下が黄褐色の粘土または砂礫の地山になっていた。この地山面は、東西方向がほぼ平坦であるのに対して、南北方向では北から南に向って緩やかに傾斜しており、発掘区北端での標高は49.05m、南端では48.85mを測る。このため、地山面の低い発掘区の南部においては、床土の下に灰白色砂質土と暗茶褐色粘質土が厚さ 0.1～ 0.2mほど堆積している。地山である黄褐色の粘土および砂礫は、地質的にみて、大阪層群Ｍａ７の上面を覆う淡水性の堆積物であるらしく[(2)]、粘土と砂礫の境界は遺構を思わせるほど明瞭であった。このように、地山面までの堆積層が非常に薄いことは、後世にかなりの削平を受けているものと思われ、従って検出した遺構も調査面積の割合に比べて乏しいものであった。

検出した遺構は、３号墳の周溝とみられるＳＤ26901と敷地の境界溝ＳＤ26902が主なもので、他に水田耕作に伴う小溝群や土壙がある。これらの遺構は、すべて地山面で検出した。

周溝ＳＤ26901　発掘区の北東部において検出した素掘り溝で、３号墳の北西部あたりから西側に延びている。幅約 2.1m、深さ約 0.3mほどあり、溝内の堆積層は上・中・下の３層に区分できた。上層は灰褐色地山混り土層で、須恵器や瓦器の破片を包含している。中層はレンズ状に堆積した暗褐色粘質土層で、須恵器の提瓶・甕、土師器の甕など古墳時代後期の土器が出土した。下層は茶褐色粘質土層で、周縁部が薄く、中央部が厚い無遺物層である。この溝は、その位置や出土遺物の年代からみて、３号墳に伴う周溝であると考えられるが、墳丘の西側すべてを巡らずに途切れている。溝のない部分は、陸橋部として掘り残され、墓道として利用された可能性が推察されよう。

溝ＳＤ26902　発掘区の東辺部において検出した南北方向の素掘り溝で、２段の箱形に掘り窪められており、幅約１m、深さ約0.35mを測る。溝内の堆積層は、３層に分けられるが、近世以降の陶磁器片が少量出土したにすぎない。この溝は、敷地を画する境界溝として掘られたものであろう。

なお、２号墳の東側で周濠の形跡は確認されなかったが、このことは後世に削平を受けたものか、あるいは古墳の西側よりも地形の低い東側には周溝を設けなかったかもしれない。

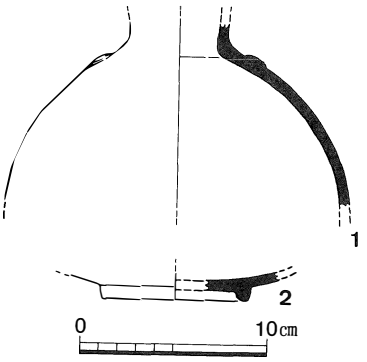


第36図　周溝ＳＤ26901・溝ＳＤ26902土層図（１／40）

4　出　土　遺　物

今回の調査では、耕土と床土および周溝ＳＤ26901などの遺構から少量の遺物が出土している。その内容をみると、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、鉄製品など各種のものがあるが、その多くは細片であって、全形をうかがい知るものや、図示し得るものはごく僅かである。

周溝ＳＤ26901では、先にも述べたように、上層から瓦器椀と須恵器甕の破片が、また中層から須恵器の提瓶・器台・甕、土師器の甕などが少量出土している。



第37図　出土遺物実測図（１／４）

第37図１は、口縁部を欠失した須恵器提瓶の体部片である。体部は、一方が比較的平坦であるのに対して、もう片方は丸味をもっている。肩部の上半には、吊手が退化した径約 1.2cmの円形凸起を貼り付けている。内外面ともロクロナデ調整して仕上げており、カキ目は施されていない。胎土は比較的精良で、灰色を呈する。器台は脚台部の小片であって、３条の沈線と波状文を巡らせ、沈線の上下には長方形とみられる透孔を施している。これらの須恵器は、陶邑編年のⅡ型式５段階前後のものと推察され、６世紀末から７世紀初頭に比定されよう。この他、２は床土から出土した無釉陶器碗の底部片で、ケズリ出しによる高台を有している。内面は、ヘラミガキを施して仕上げ、暗灰色を呈する。

5　ま　と　め

以上が、長法寺七ツ塚古墳群第２次調査の概要であるが、それを要約してまとめると次のようになる。

1　３号墳の西側において、周溝の存在することが明らかとなった。ただし、周溝は墳丘の西裾全域を巡るものではなく、その南半部を陸橋として掘り残し、墓道に利用していた可能性が考えられる。

2　周溝内の遺物は少量であるが、中層に包含されていた土器は、かって墳丘から出土した土器よりも後出的であり、古墳築造後しばらく遅れてから周溝が埋まり始めたことを示している。そして、上層から出土した土器の年代からみて、鎌倉時代にはほぼ完全に埋没したことが明らかとなった。

3　このような３号墳に伴う周溝の諸相は、５号墳のそれと共通性が多く認められ、古墳と墓道の関係や周溝の埋没過程など、古墳群全体の特徴を把握するための大きな展望が得られた。

4　一方、２号墳の東側においては、周溝の痕跡すら検出することはできなかった。このこと

は、周溝がすでに削平されたものなのか、あるいは3号墳や5号墳の場合がそうであったように、地形の高い古墳の西側に限って周溝を施したのかも知れない。

5　当調査地は、長岡京の右京三条四坊十四町にあたるが、長岡京期の遺構はもとより、遺物もほとんど出土しなかった。

注1　原秀樹他「長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第17冊　1986年

2　京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏より御教示を受けた。

第５章　奥海印寺遺跡第３次(２ＬＯＰＴＪ－３地区)調査概要

１　は　じ　め　に

1　本報告は1987年５月８日から６月13日まで、長岡京市奥海印寺東条28－１において実施した、奥海印寺遺跡第３次調査に関するものである。

2　調査はこれまで遺物の散布地として認知されていた奥海印寺遺跡の解明を目指し、共同住宅建設に先立って国庫補助事業として実施した。

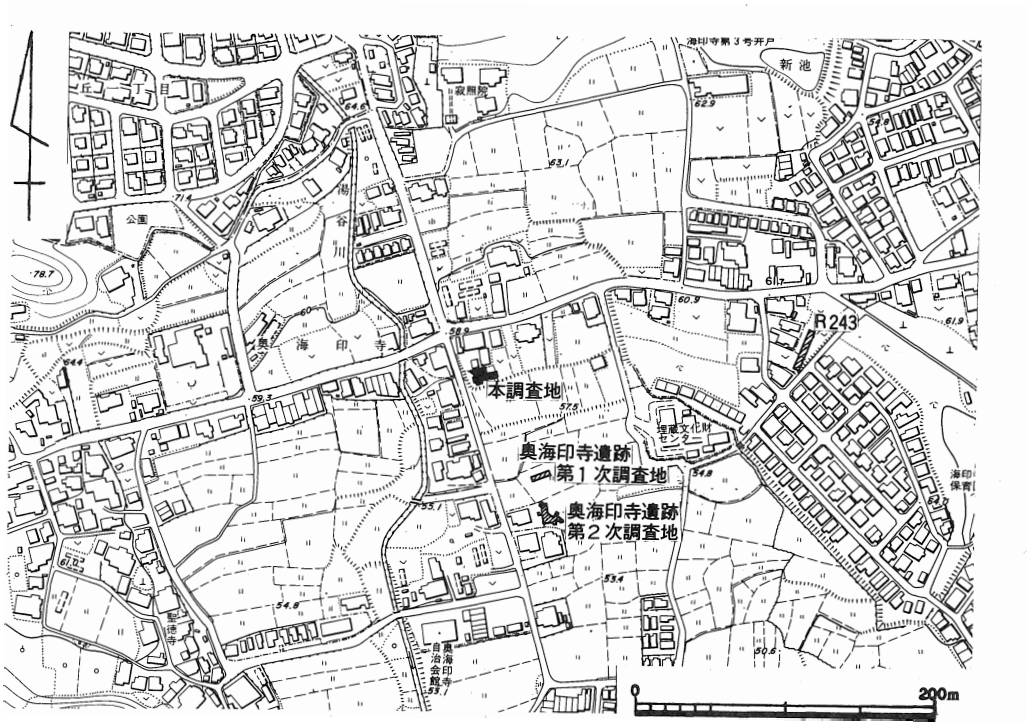
3　調査は長岡京市教育委員会が主体となり、調査員は(財)長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、小田桐淳が担当した。

4　調査実施にあたり、土地所有者である多貝茂氏には数々の御協力を得た。

5　発掘調査および本報告の作成にあたって、京都文教短期大学名誉教授、中山修一氏より種種の御教示を受けた。

6　調査後の遺構図面・遺物の整理は占部真里を始め多くの方々の協力を得た。

7　本報告の編集・執筆は小田桐が行った。



第38図　発掘調査地位置図（１／5000）

2 調 査 経 過

調査地は小泉川によって形成された段丘下位面に切り込む湯谷川の左岸域にあたる。ここは西山丘陵を形成する野山を降りた所であり、北から南の小泉川にかけての傾斜地となっている。

当地はこれまで奥海印寺遺跡として周知されている。奥海印寺遺跡は先土器時代の翼状剝片や縄文時代の石鏃、奈良時代から中世にかけての土器等が散布している遺跡であるが、長岡京域外にあたることからこれまで調査があまり行われていなかった。奥海印寺遺跡の他にも、平安時代に僧道雄によって開かれた海印寺跡が当地一帯に想定される。海印寺は、現存する寂照院が一子院として唯一法燈を伝えており、また寂照院の西方には「奥ノ院」「大見坊」などの小字名としてその名残りを留めている。調査地はこの寂照院の南方150 mほどの所である。また北方の山裾から山麓にかけて大原古墳群、走田古墳群などの群集墳や平安時代の奥海印寺瓦窯などが所在している。

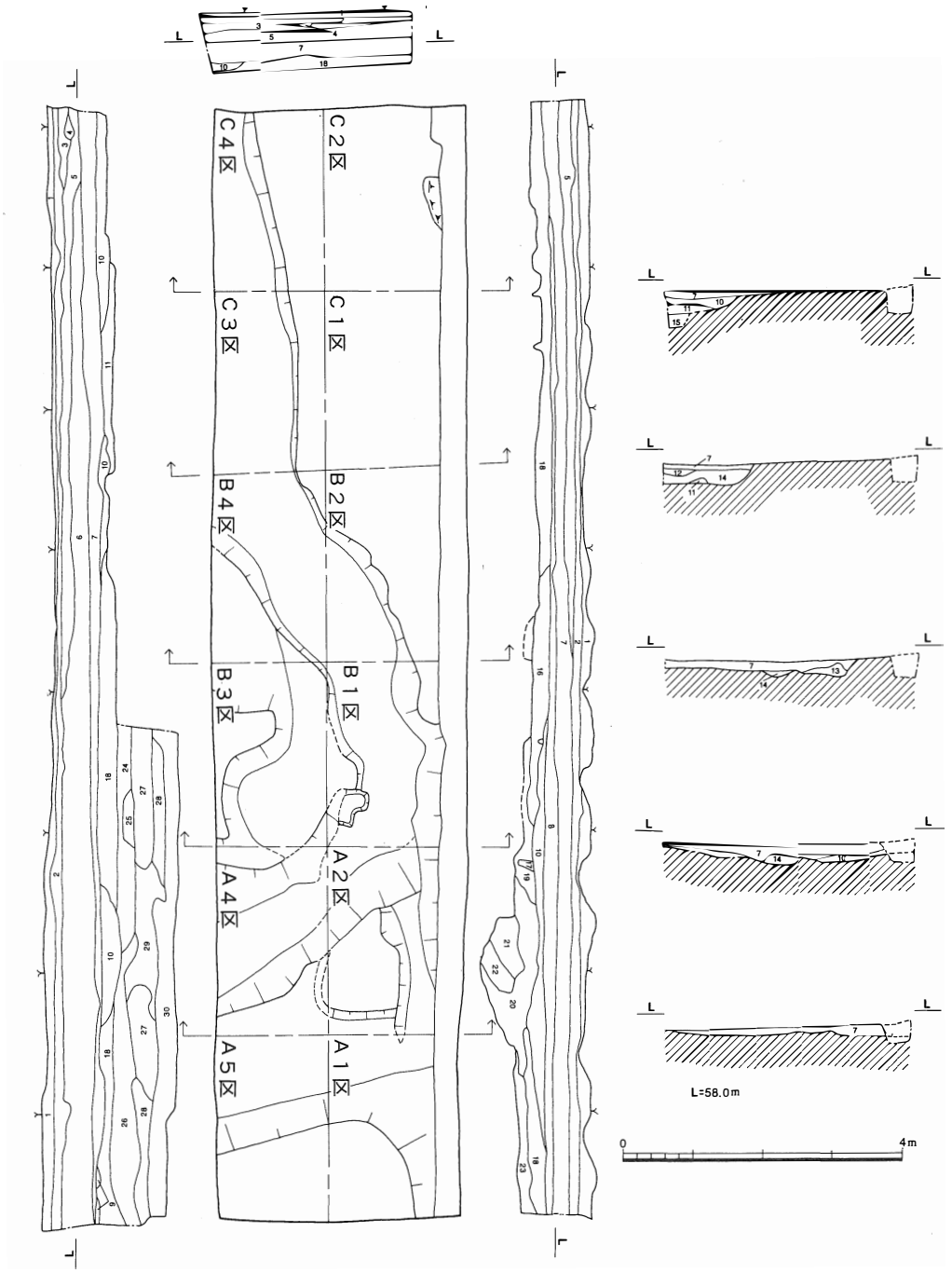
調査地は多貝茂氏宅の裏庭にあたり、畑地となっていた。ここに3ケ所の試掘グリッドを開けた後、4×15mのトレンチを設定した。当初人力による掘下げの予定であったが、耕作土以下の層が硬く締っていることと、遺物の出土する層が深いことから重機を入れることにした。

基本層序は、耕作土・床土層以下灰色砂質土（5層）、茶褐色土（6層）、黒茶色礫土（18層）とあってベース面に至る。ベース層は濁茶褐色ないし黄褐色の礫混り土で、地山層はトレンチ東端でさらに0.7 mほど下がって確認した。第7層以下の堆積は層が複雑に入りくんでおり、調査地の西を流れる湯谷川が運んだ土砂であると考えられる。これらの中に遺物は含まれていない。

調査は耕作土・床土層までを機械で除去し、以下を人力での調査にきり換えた。

床土層下面での精査によって、トレンチ中央部から6層をベースとして西に一段低くなる5層の輪郭を検出した。他に遺構が存在しないことを確認し、5層の除去を行った。5層中には瓦器、土師器、須恵器、磁器などの中世遺物に混じって染め付けが出土している。全て小片である。6層の上面でも遺構が確認されないため、6層の掘下げに入った。6層中には瓦器、土師器などの微細な破片が多く含まれている。6層の厚さは深い部分で40cmほどあったため、2回に分け、途中精査を行って除去した。

6層下面では18層をベースにした暗茶褐色土（7層）の不定形プランが検出されたため、トレンチ内を12区に分け、セクションを残して掘下げに入った。この不定形プランはトレンチ内を東西から南北に折れ曲る溝状の落込みでＳＸ01と名命した。ＳＸ01からは瓦器埦や土師器皿などが大量に出土した。特にＢ１区とＢ２区はＳＸ01が南へ折れ曲る所であるが、ここの北肩に最も多く土器があった。Ｃ３区の壁ぎわでは石がＳＸ01の肩に平行して並んでいた他、Ｂ１区でも石列および石の集積が認められた。



1．盛土
2．床土Ⅰ（橙褐色土）
3．床土Ⅱ（明灰褐色砂質土）
4．黄褐色土
5．灰色砂質土
6．茶褐色土
7．暗茶褐色土
8．暗灰褐色土
9．淡黒灰色土
10．明橙灰色粘質土
11．黒茶色礫土
12．黄茶色土
13．淡黒茶色土
14．暗茶褐色砂礫土
15．黒褐色粘質土
16．黒褐色粘質土
17．淡茶灰色砂質土
18．黒茶色礫土
19．黒茶色礫土
20．黒茶色粘質土
21．濁茶褐色礫土
22．黄褐色砂質土
23．濁茶灰色礫土
24．濁茶褐色粘質土
25．明黄褐色土
26．濁茶灰色礫土
27．濁灰褐色砂礫
28．明黄茶色土
29．濁黄褐色砂質土
30．明橙灰色粘質土

第39図　トレンチ壁面図・ＳＸ01断面図・地区設定図（１／100）

ここで一担記録を取った後、18層を除去した。7層下面では多数のピット、土壙などを検出した。これらの埋土は18層と同じような土であることから、本来18層上面から切り込まれていたものと考えられる。中でもC区のトレンチ北部では、ピット列が2間分、SX01の北肩に平行する形で検出された。このピット列が建物になるかどうかを確認するため、トレンチを北側に拡張する必要性が出てきたが、調査地内では掘った土を置く場所がないため、現在のトレンチを一部埋め戻して拡張することにした。

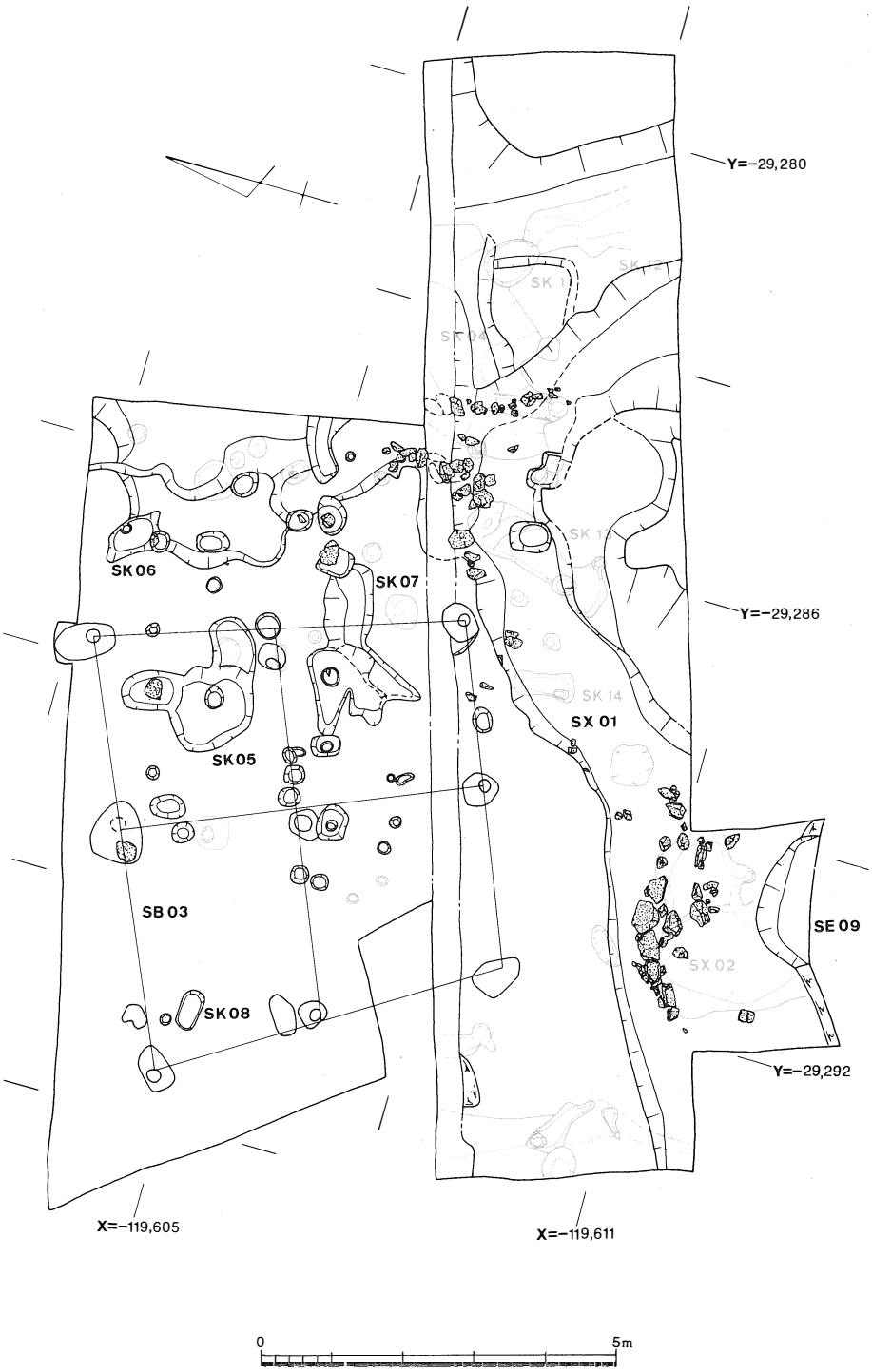
第40図　調査風景

この頃、調査地である多貝氏の敷地と南隣りの水田との境界に擁護壁を造る工事が始まり、調査と並行して第87045次立会調査を実施した。この水田面と調査地との段差は1.5mを測る。

立会調査の結果、この段差は削平によってできたもので、調査地の堆積層は若干の傾斜をもって南へ下がるが、これが段差の所で切りとられていることが判明した。南隣りの水田では床土の下は即地山層（トレンチの断割りで確認した層）となっている。

この立会調査で、トレンチC2区石列の南延長部において井戸（SE09）を確認した。しかし立会調査の制約上、工事中止には至らず、工事の重機を使用して井戸内埋土を取上げていただき、井戸底を確認するに留まった。井戸の深さは工事掘削底面よりさらに1.2mほど下がった所であった。井戸の施設は残存していない。

最初のトレンチを終了した後、トレンチの北部の拡張とC2区から立会調査で井戸を確認した南側部分の拡張を行った。その結果北拡張区ではSX01が北側にさらに延び、またこのSX01に囲まれる形で掘立柱建物、土壙、柱穴等を検出した。検出面である18層は地形に即して北へ行くほど若干高くなっている。また南拡張区では石列の下に土壙と立会で確認していた井戸（SEO9）の北側⅓ほどを検出し得た。この拡張部分においてはSX01の南肩にあたる土層の上りは検出されず、B3・4区において南にあがる肩はSE09の周辺にとりまくものと考えられ、C3区の石列とSE09との関連が想定された。以下各遺構について概略を記す。



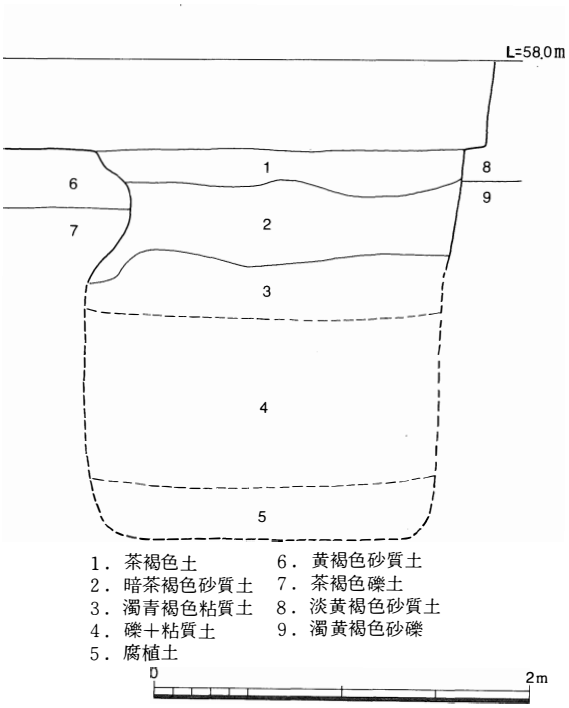
第41図　検出遺構図（１／100）

3 検 出 遺 構

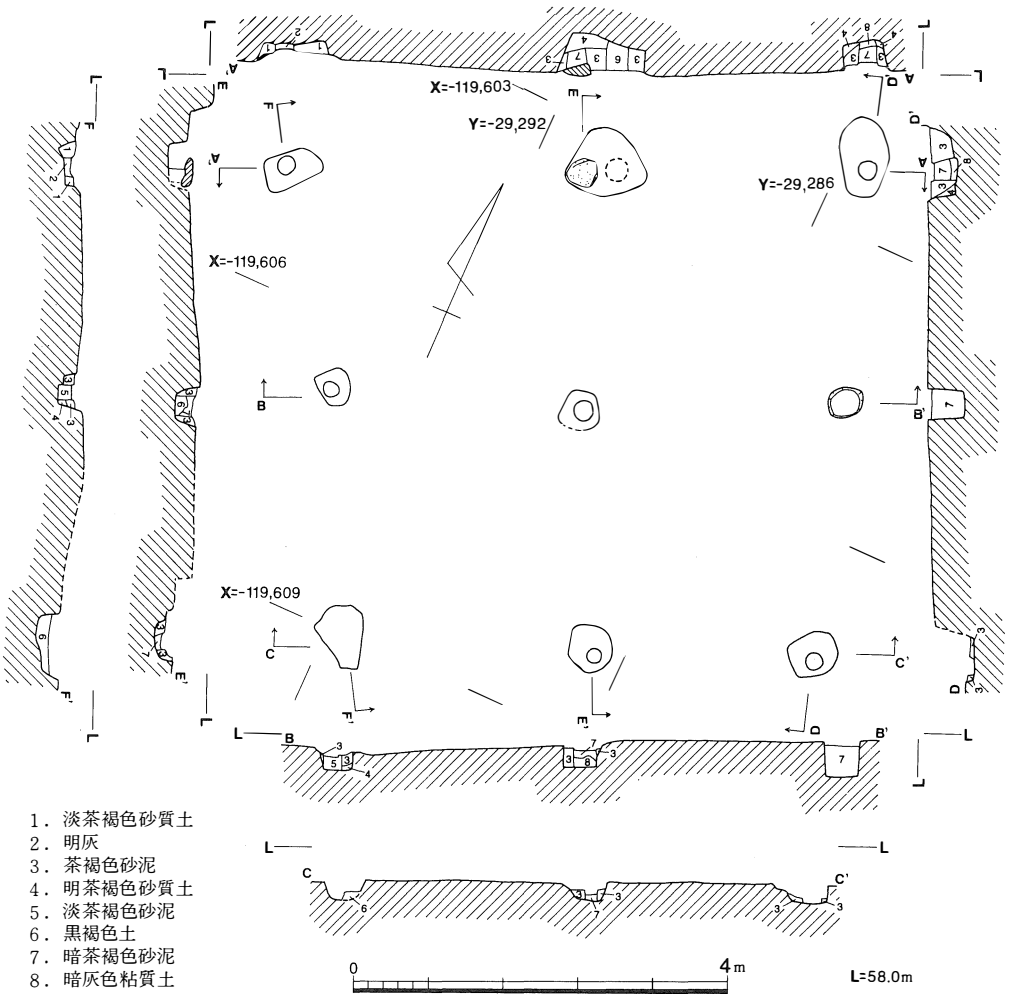
ＳＸ01　南西―北東方向と北西―南東方向にＴ字形に交わる溝状の落込みで、北肩と南部東西肩は比較的明瞭に落ちるが、その他の部分では緩斜面となっており、プランは明瞭でない。深さは25～30㎝ほどで、埋土は場所によって若干異っているが、ＳＸ01の最上層である７層はトレンチ全面を被っていることからこの層はＳＸ01を埋めた整地土であると考えられる。Ａ２区からＢ１区にかけての両肩付近には径20㎝前後の角礫が並んで検出された。これらはＴ字に合流する北西コーナー部の斜面にＬ字形に敷かれている集合と、その反対側斜面に直線的に並ぶ集合との２群に大別され、護岸として敷かれていたと考えられる。一方Ｃ３区においても石の集合が検出された。こちらは11層の上に置かれており、50㎝四方の円礫（これは周縁が打ち欠かれている）を最大として、20～30㎝大の円礫と角礫が敷きつめられたような状態で密集している。中には砥石の割れた断片も含まれていた。この石群の南方には後述する井戸ＳＥ09があり、この井戸の中に同様の石材が大量に投棄されていたことから、この石群は井戸周辺の石敷きの一部になると考えられる。ＳＸ01の他の地区では石材は全く出土していない。

遺物は、７層からは全地区にわたって破片が量的に多く出土している他、Ｂ１・２区の北肩斜面（13層）に形になるものも含めて大量に出土し、またＣ３区の石敷周辺からも形になるものが多く出土している。

井戸ＳＥ09　敷地の南端で行われた擁護壁工事に伴う立会調査（第87045次立会調査）で確認された井戸で、工事の終了を待ってトレンチを拡張し、調査を行った。その結果、６層を除去したベース面上でＳＥ09の北側⅓ほどを検出した。この井戸は円形ぎみを呈し、確認部分で幅1.8ｍのプランを測り、直径２ｍ強くらいになると思われる。深さは0.8ｍまで確認したが、擁護壁工事の完了を待って水を入れた南側水田の水が流れ込み、以下の調査は断念した。第42図は立会調査の記録を合わせて復原した断面図で、深さ２ｍほどになる。最下層には有機質の土層が堆積しており、土器・木器類が出土した。



第42図　井戸ＳＥ09断面図（１／40）



第43図　掘立柱建物ＳＢ03実測図（１／80）

掘立柱建物ＳＢ03　ＳＸ01の北西部平担面で検出された２間×２間の総柱建物で、柱間は東西で2.3ｍから2.8ｍ、南北は2.4ｍから2.7ｍほどを測り、やや北側が開いた形状を呈している。建物の振れ角は柱列によって異るが、柱の並びが比較的そろっている東西列で計測すると、おおよそ東で北に22°前後振れている。この角度はＳＸ01の西部北肩のラインとほぼ平行している。

その他の遺構　今回の調査では、18層上面と下面の２面で遺構を確認したが、18層と遺構埋土はほとんど同じ土であり、18層上面で見落とした遺構が下面で検出されたものもかなりある。埋土からあきらかに下面に切り込む遺構であると確認できたのはＳＫ02とＳＫ04である。このうちＳＫ02はＳＥ09によって切られている。この２つの土壙からは遺物は全く出土しておらず、時期や性格等は不明である。18層上面の他の遺構はピット・土壙であるが、ピットの中には根石をもつものがある。また切り合いから数時期の変遷が考えられる。

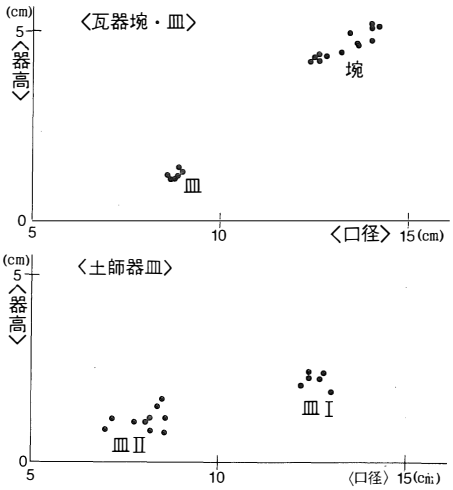
4 出 土 遺 物

今回の調査で出土した土器類はコンテナ数にして14箱ほどになるが、その大部分はＳＸ01から出土したものである。中でもＢ１・２区の13層出土遺物は一括性の高い資料であると考えられる。ここでは個体としてまとまる資料が多く、その種類は瓦器埦・瓦器皿・土師器皿にほぼ限られており、中でも瓦器埦の占める割合いが破片も含めて圧頭的に多い。他の器形では羽釜の小片、輸入磁器片があるが、量的にはきわめて少い。このような傾向は他の地区・層・遺構でも同様である。ここではＳＸ01出土遺物をまず検当し、他の遺構・層出土遺物と比較してゆくという方法で報告したい。

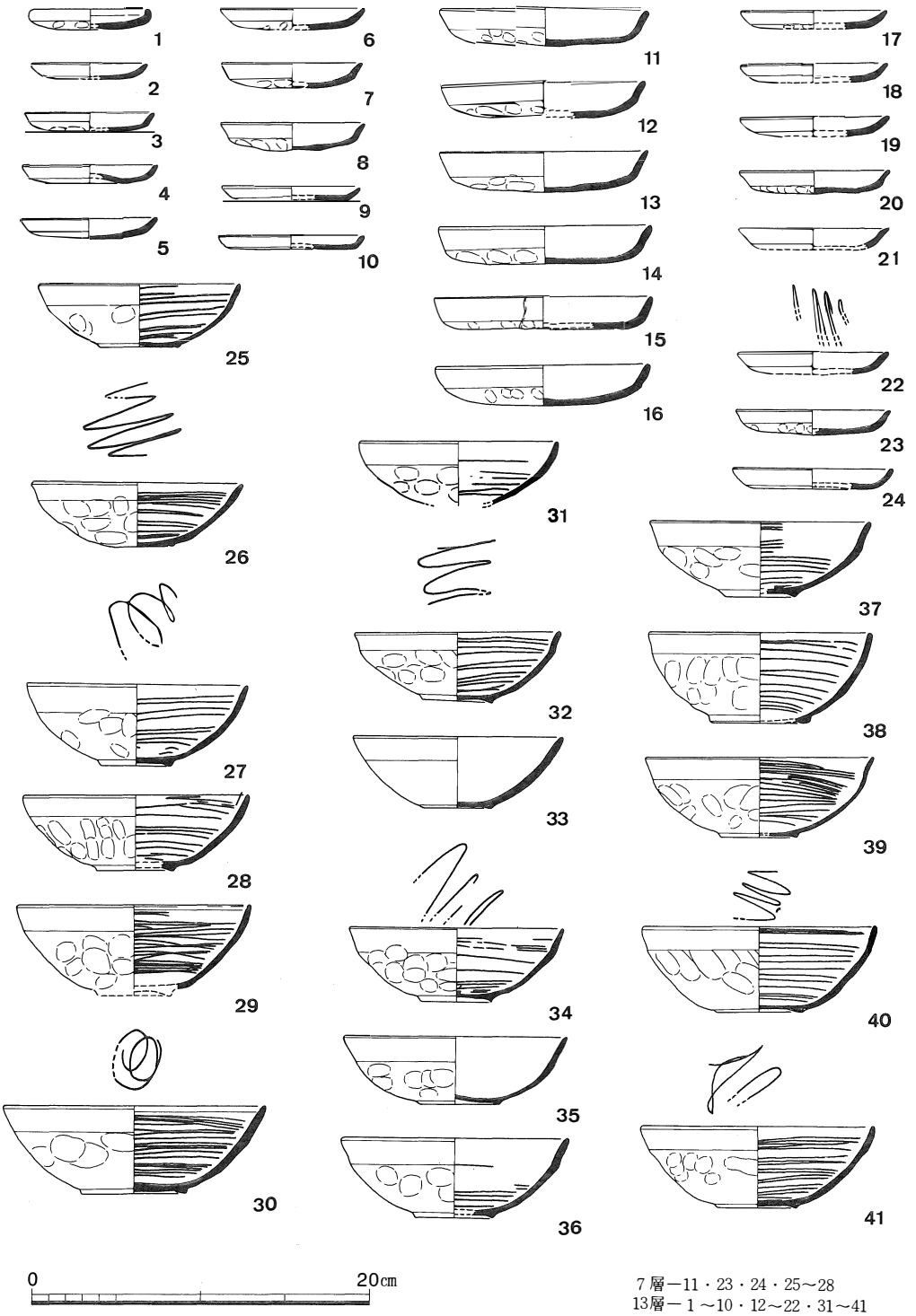
ＳＸ01出土遺物　ＳＸ01出土遺物は第45図と第46図のうち７層と13層出土のものである。この中でＢ１・２区13層出土のものは第45図１～３、７、８、10、(土師器皿Ⅱ)、12～15（土師器皿Ⅰ)、17～19、21、(瓦器皿)、32、34～35、37、39～41、(瓦器埦) である。これらに計測可能な破片を加えて作成した法量図が第44図である。これを見ると瓦器埦は口径が12.5～14cm、器高４～５cmと若干幅がある。口縁部外面に暗文の施こされたものは全くなく、内面の暗文も荒いものが多い。図示したものは口縁端内側の沈線がないものばかりであるが、破片では全体の２割ほどに沈線が認められる。見込の暗文は簡単な鋸歯文がほとんどである。高台は断面逆三角で２～３mmの高さのものが多く、中には粘土をすりつけた程度のものもある。炭素が全体的に吸着していないものや全く吸着していないものが１割ほどある。瓦器皿は口径８.５～９cm、器高１～１.５cmと埦に比較してよくまとまっている。見込に暗文のある例はない。土師器皿類は比較的薄手のつくりで、淡赤灰色を呈している。胎土はいずれも精良で、赤色粒子・金雲母・長石の小片を含んでいるものが大半である。調整はいずれも内面および口縁部外面をきれいになでるのみで、底部外面には凹凸が残る。皿Ⅰは口径12～13cm、器高２～２.５cmの中にまとまっている。15の破片では粘土の板を重ね合わせた痕跡を留めている。皿Ⅱは口径８～８.５cm、器高１～１.５cmのものが最も多いが、中には７cm強と小ぶりなものも少し混る。

これらの瓦器・土師器類は橋本編年のⅢ－３期からⅣ－１期くらいの時期におさまるものと考えられる。

このまとまって出土したＢ１・２区13層の土器群を基準として他の土器との比較をすると、ＳＸ01の埋土上層である７層では差異は認められない。ＳＸ01が切込むベース層となっている18層はあまり遺物

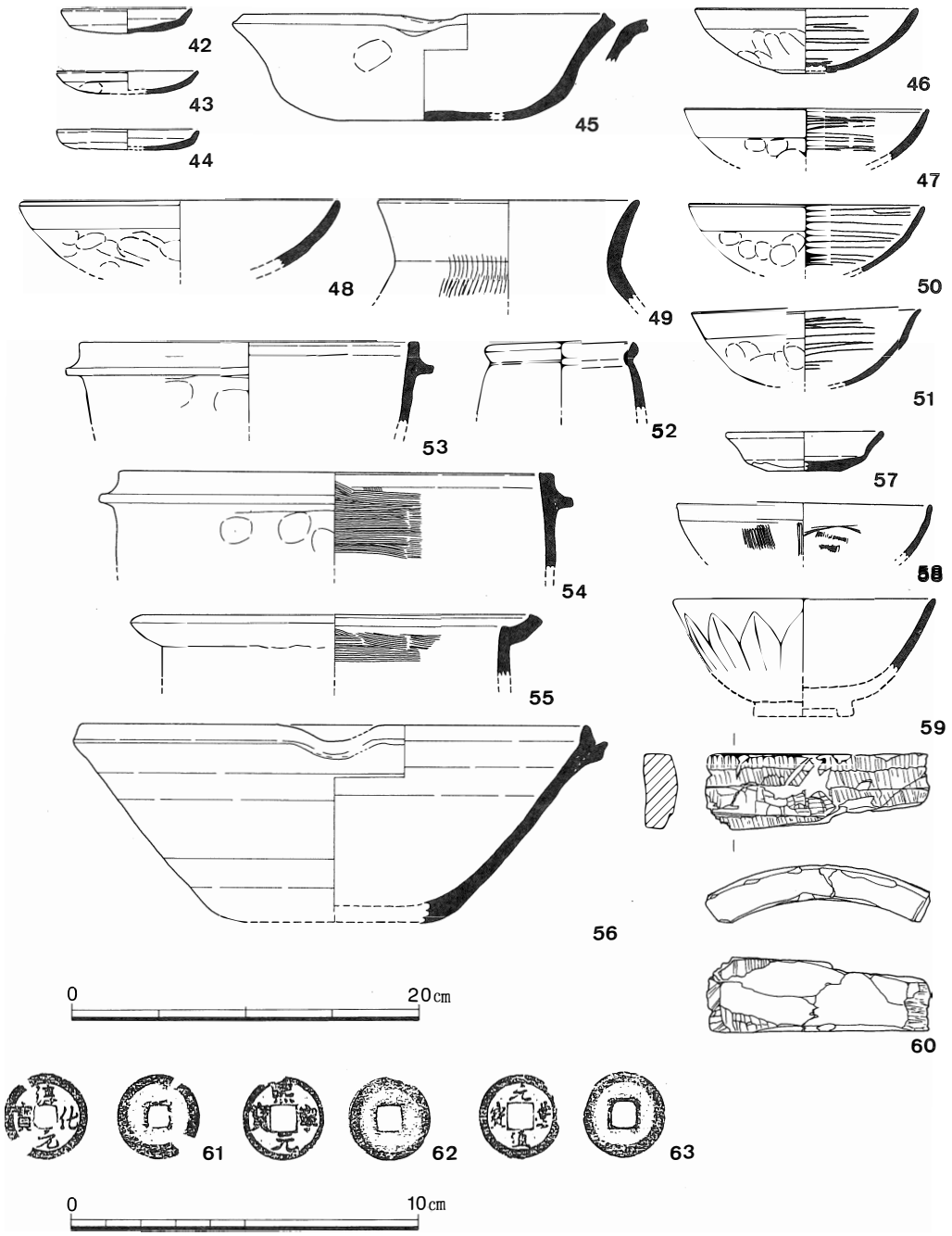


第44図　Ｂ１・２区13層出土埦皿類の法量図



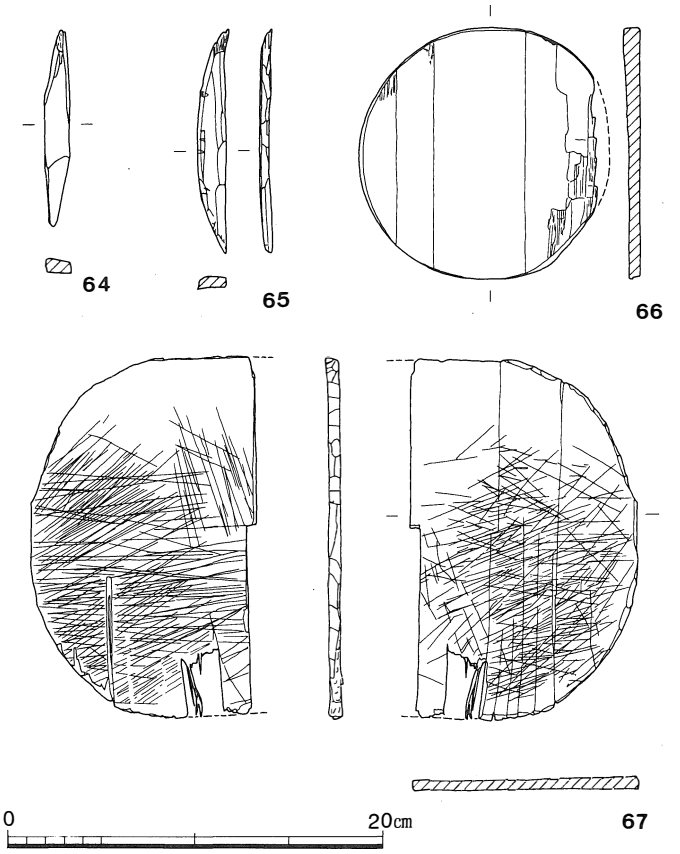
7層―11・23・24・25～28
13層―１～10・12～22・31～41
18層―29・30

第45図　出土遺物(1)（１／４）



S E09－42～45
S B03－46～49
S K07－50・51・61～63
6　層－52・53・57・60
7　層－54・55・58
13　層－59
18　層－56

第46図　出土遺物(2)（1 / 4）



第47図　出土遺物(3)（１／４）

は出土していないが、29・30の瓦器埦をみると、内面の暗文も密で見込に螺旋文が認められ、古相を帯びる。56の片口鉢は東播系の製品で13世紀代のものである。これらの土器はＳＸ01より若干古い様相を示すが、時期的にはさほど隔たりをもたない。ＳＢ03出土瓦器埦は、外傾度が増し、若干器高が低いものである。これは13層の中でも新しい様相を示すものであり、７層中にも認められる。48は皿Ⅰよりさらに大型の土師器皿である。ＳＫ07はＳＢ03と平面が重なるが、瓦器埦の形態からはＳＫ07の方が古い。ここからは淳化元寶・熙寧元寶・元豊通寶が一枚ずつ重なって出土している。ＳＥ09出土遺物はほとんどが礫層の下の井戸最下層から出土している。図示し得た土器は皿Ⅰと鍋であるが、他に瓦器埦の小片も比較的出土しており、これらの土器も13層およびＳＫ07と同様のものである。

６層中の遺物もこれらとあまり差のない時期のものが占めている。60は滑石製羽釜の破片を再加工して温石として使用したと考えられるものである。

図版18にのせたものはＳＸ01およびＳＥ09から出土した砥石である。このうち68・73・76はＳＸ01Ｃ３区石列中に混入していたもので、他は全てＳＥ09の礫層中に他の多くの自然石とと

もに混入していたものである。69・71・75の砥石は火を受けてた痕跡を留めている。焼けた石はこの他にもＳＥ09、ＳＸ01Ｃ３区の両方に存在した。

５　ま　と　め

本調査で検出された遺構は、いずれも13世紀後葉から14世紀前葉にかけての比較的短い時期の遺構であり、その中でも数時期の変遷が認められるものである。その構成はＳＸ01を排水施設として、これによって区画された空間をもち、ＳＸ01の北西部に建物を配し、南側に井戸をもうけている。この井戸は、中に投棄されていた礫とＳＸ01Ｃ３区からこの井戸にかけて裾えられている石列との構成がいずれも砥石・焼石を含むという共通性をもっていることから、もとは井戸の周囲に敷かれていたものと考えることができる。この敷石によって井戸はＳＸ01の底面より一段高くなる。ＳＢ03はこの遺構群の中では一番新規のものになる。ここでの建物区画は、トレンチの北側に主要建物を配するものとなろう。さらに、ＳＸ01がＴ字状に交差することから北西部にも別の区画が存在するものと考えられる。これらの敷地は18層によって整地されており、この時期新らたに開発されたことを物語っている。またＳＢ03廃絶後はさらに６層によって埋めたてられ、トレンチ内に限っては以後建物が建てられることなく現在に至っている。

この一連の遺構は、整地・排水施設・石敷井戸というしっかりした構造をもっており、また砥石が大型で数も多いことなどから、一般的な民家とは考え難い。ここに当遺構と関係が考えられるものに海印寺跡があげられる。海印寺跡は９世紀に僧道雄によって創建された寺で定額寺として一時期栄えた寺である。その後衰退の徒をたどるが、文永二年（1265年）後嵯峨上皇によって海印寺再興の院宣が出されており、[(1)]整備されたことが知られる。調査によって検出された遺構の時期はこれより少し後のものになるが、当時まだ海印寺が存続していたであろうことは確実であろう。また寂照院仁王像の体内から発見された康永三年（1344年）銘の結縁交名にみえる中世海印寺村もすでに成立していたであろうことから、この村との関係も考えなければならない。いずれにしても当地域の調査は途についたばかりであり、今後海印寺跡とその周辺の村落の解明によって、本遺構の位置付けがなされることになろう。

注１　「寂照院総合調査報告書」『長岡京市報告書』第16冊　1985年３月

第６章　奥海印寺遺跡第４次（２ＬＯＰＳＲ地区）調査概要

１　は　じ　め　に

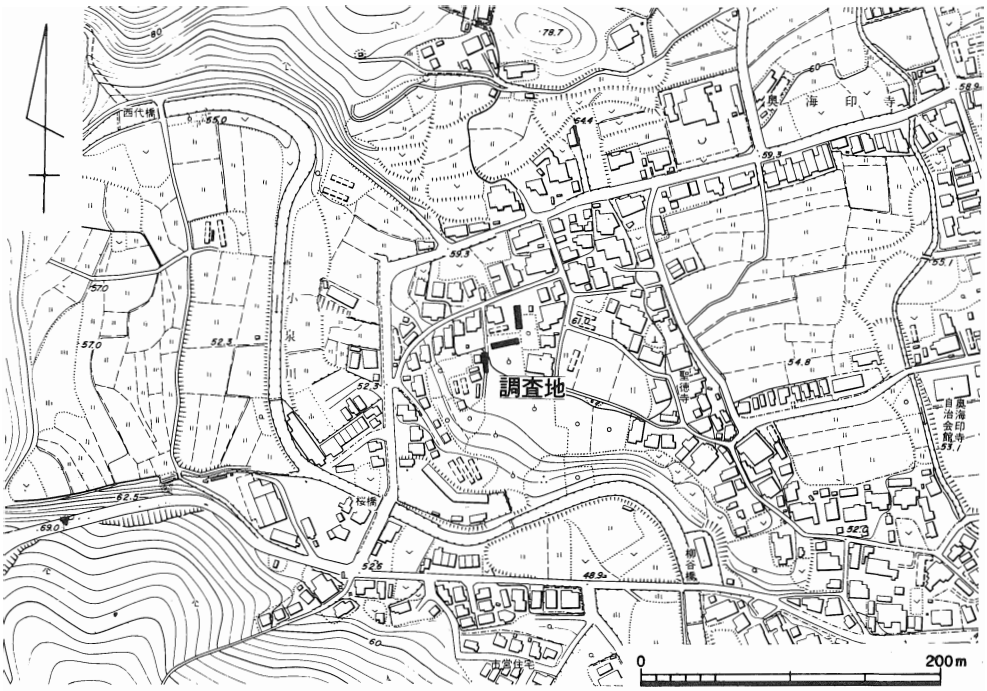
1　本報告は、1987年５月28日から同６月24日まで、長岡京市奥海印寺城(しろ)10－35他において国庫補助事業として実施した奥海印寺遺跡第４次調査に関するものである。

2　本調査は、伴野昇次他３名による住宅建設工事に伴うものであり、道路予定部分に沿って３本のトレンチを設定、南から第１トレンチ、第２トレンチ、第３トレンチとした。各トレンチの調査面積は第１トレンチ36㎡、第２トレンチ60㎡、第３トレンチ54㎡で、総調査面積は 150㎡である。

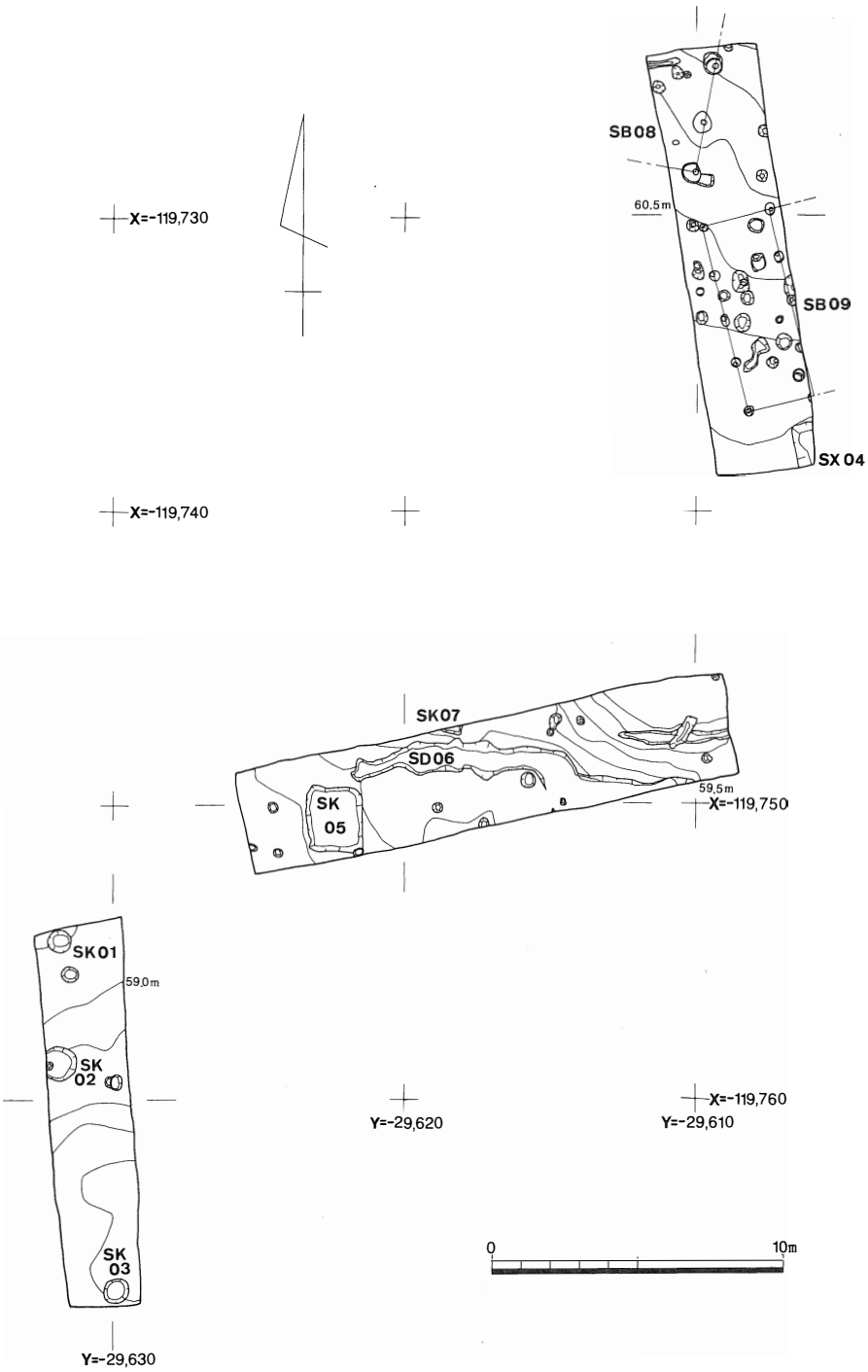
3　本調査は、長岡京市教育委員会が行い、現地での調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに委託し、同センター調査員木村泰彦が行った。

4　本報告書作成にあたり、日下雅義氏（立命館大学）、小森俊寛氏（平安京調査会）より多くの御教示、御助言をいただいた。

5　本報告の執筆・編集は木村が行った。



第48図　発掘調査地位置図（１／5000）

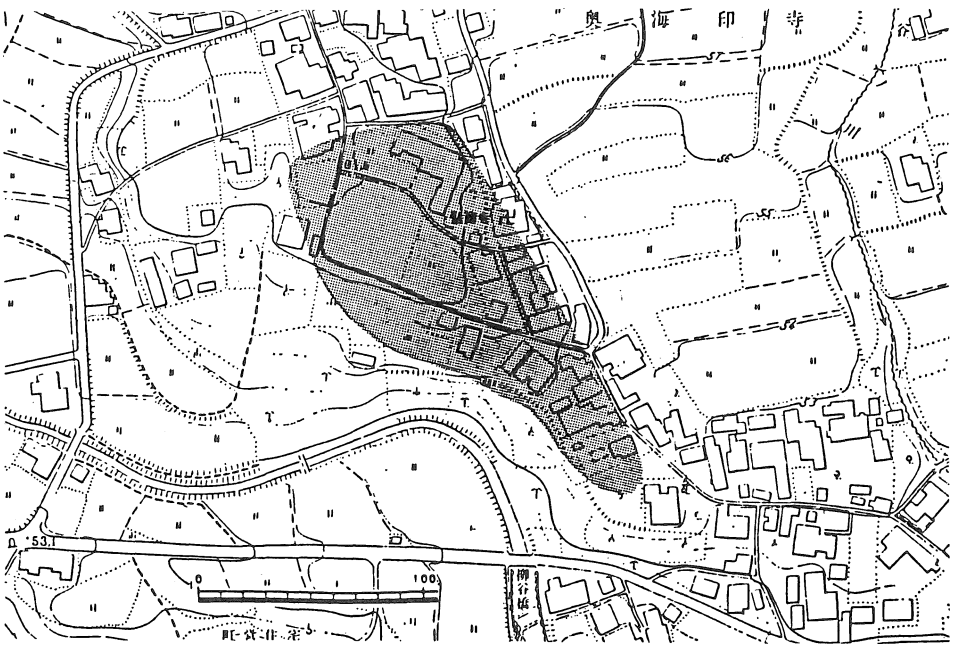


第49図　検出遺構配置図（1／250）

２　調　査　経　過

今回の調査地は、奥海印寺遺跡にあたることはもとより、その「城」の地名が示す如く奥海印寺城の推定地にもあたるところから、主として城館関係の遺構の検出を目的として調査を行うこととした。奥海印寺城に関しては、地名と周辺地形からその存在が推定されるのみであり正確な範囲、成立時期などはまったく不明であるが、現在推定されている奥海印寺城の範囲は、南東へ伸びる丘陵上の250ｍ×100ｍの細長い部分である[(1)](第50図参照)。このうち西と南は小泉川によって形成された比高約10ｍの段丘崖によって囲まれており、まさに天然の要害を思わせる地形といえる。現在斜面部は主に果樹園として、平坦部は宅地および水田としての利用がなされており、今回調査の対象となった部分は、推定地のうちの西端、果樹園のある緩傾斜地部分にあたる。調査は桑・密柑等の伐採の後、カギの手に曲がる道路建設予定部分に合わせて、南側に南北方向の第１トレンチ（３×13ｍ)、中央に東西方向の第２トレンチ（3.5×17ｍ)、北側に南北方向の第３トレンチ（ 3.5×14.5ｍ）の３本のトレンチを設定した。付近の標高は第３トレンチで約62ｍ、第２トレンチ、第１トレンチは一段低くなった部分にあたり約60ｍを測る。

掘削は各トレンチともに重機によって現在の耕作土および以前の竹薮の客土を除去し、以下の層は人力によって行った。又第１・第３トレンチでは下層の状況を調べるため遺構面より断ち割りを行った。発掘調査は６月19日に終了し、その後再び重機による埋め戻しを行い、６月24日すべての作業を終了した。



第50図　奥海印寺城範囲推定図（注１文献より転載）

3 検 出 遺 構

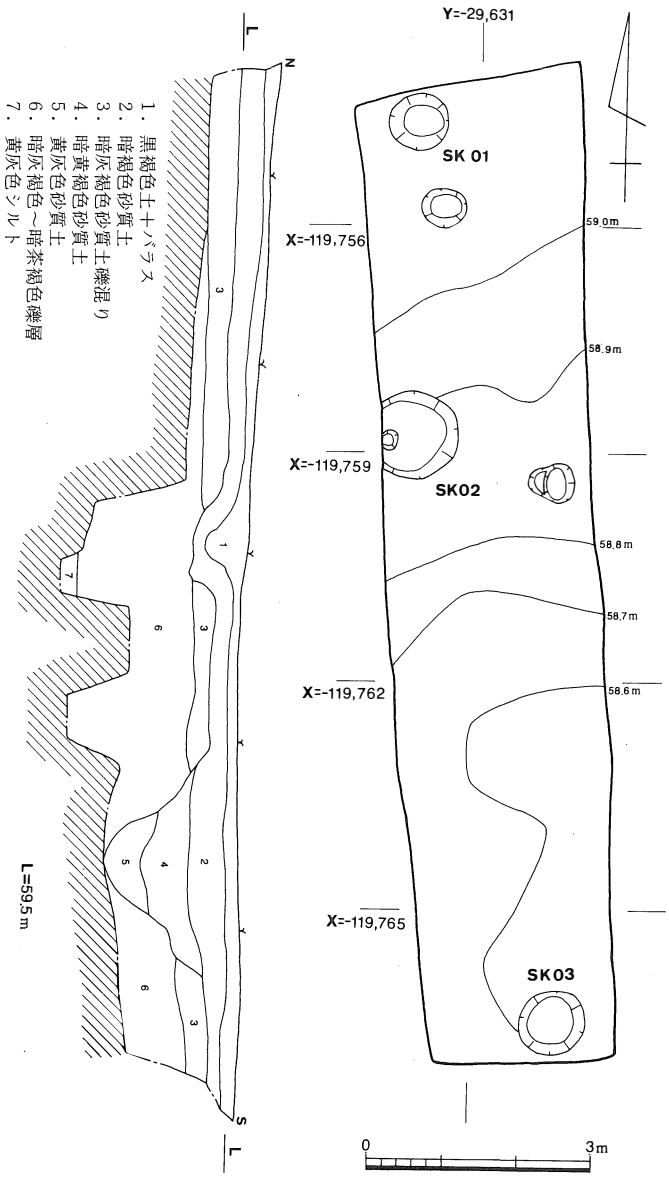
第1トレンチ　基本層序は整地用バラス以下、耕作土である暗褐色砂質土、暗灰褐色砂質土礫混り(竹藪客土)の順で、地表下約1mで遺構面である暗灰褐色～暗茶褐色礫層に至る。この礫層は非常にしまりが悪く、堆積時期が比較的新しいものと推定される。トレンチ東辺部での断ち割りによって礫層の厚さを確認したところ約1.5m程あることが判明、さらにその下からは黄灰色シルトの段丘礫上古土壌が検出された。同様の状況は周辺の崖面においても観察されることから、この礫層は中世をそう遠く遡らない時期の土石流によって形成されたものと考えられる。(2)

遺構は、近世（18世紀後～19世紀初頃）の土壙が2基と中世の土壙が1基、他に無遺物の小ピットが検出された。

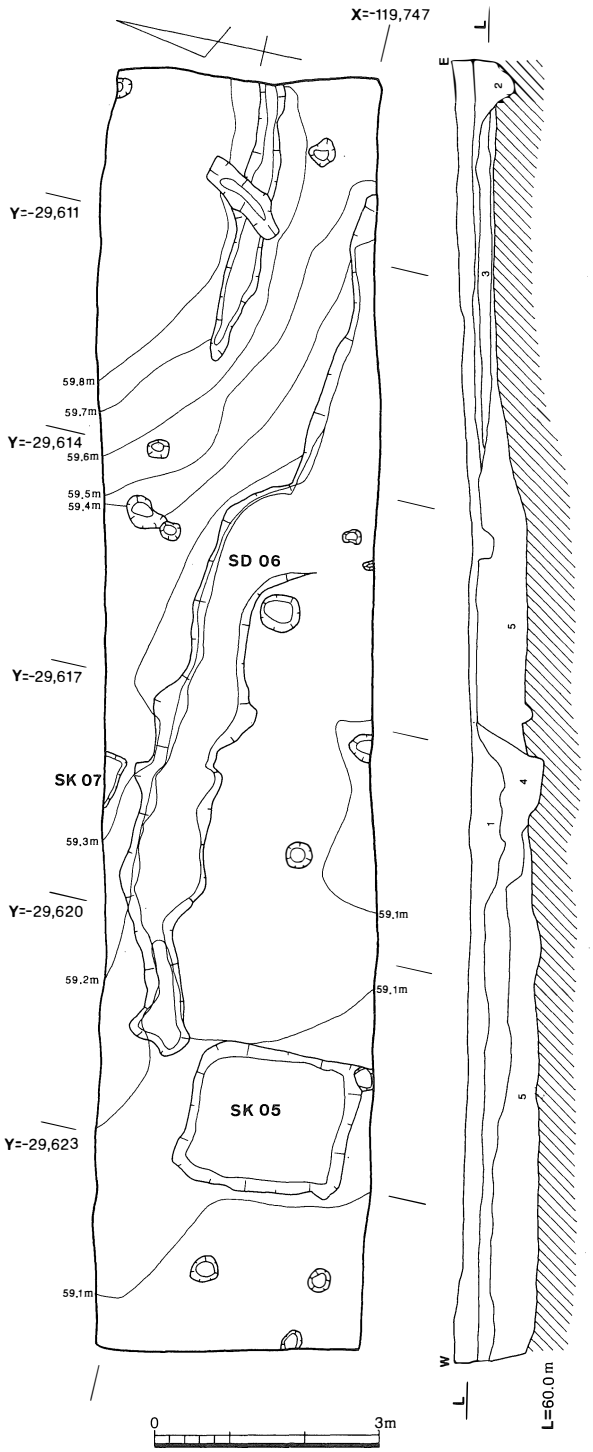
ＳＫ０１は、直径 0.8m、深さ 0.2mの小土壙で、備前焼甕体部片、伊万里皿小片、土師器皿片等が出土している。

ＳＫ０２は、直径 1.2m、深さ 0.2mを測り、中央でさらに1段深くなる円形土壙である。炭・焼土を含むが焼けた痕は見られない。備前焼のすり鉢、土師器皿片、白磁の小片等が出土している。

ＳＫ０３は、直径 0.9m、深さ 0.4mを測る円形の土壙で、14世紀前半頃の瓦器椀・皿片、小形三足付羽釜、土師質皿等の小片が出土した。



第51図　第1トレンチ平面・断面図（1／100）

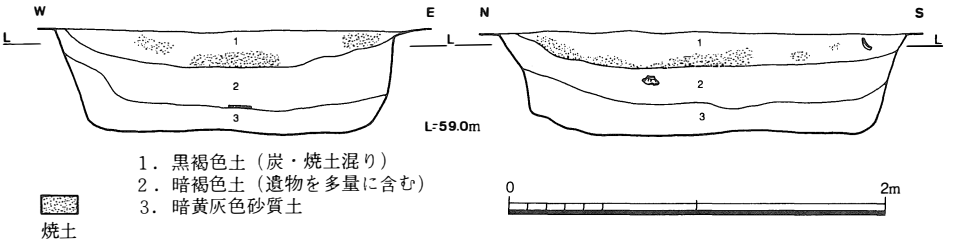


第52図　第２トレチ平面・断面図（１／100）

第２トレンチ　層位の大半は、現耕作土と開墾の盛土、および椎茸栽培用の鉄柱据付けのための覚乱であり、西半部に竹薮客土である黄灰色砂礫混り土が残されている。遺構面はそれらの層の直下にあり、北東隅が高く南西方向に約 0.6ｍの段差を持つ斜面を形成した後、平坦面が広がる地形となる。このことから、現在の地形はトレンチの北で２ｍ程の崖面が広がるものであるが、本来は連続する傾斜面であり、開墾等によって切土されたものと見られる。遺構検出面の土は高い部分が黄灰色砂質で、低い部分に行くに従い第１トレンチでも確認された土石流堆積による礫層へと変化していく。

検出された遺構には溝・土壙・ピット等があるが遺物の出土したものは少なく、いずれも江戸時代(18世紀後半～19世紀初頃）のものである。他のほとんどは覚乱およびしみ込みである。

ＳＫ０５はトレンチの西側で検出された平面四角形を呈する土壙で、南北 2.2ｍ、東西 1.9ｍ、深さ 0.5ｍを測る。壁面はほぼ垂直に近く掘り込まれており、底部は平坦面となっている。埋土は３層に分けられ、最上層である黒褐色土には大量の炭や焼土が含まれている。次の暗褐色土には上記の炭・焼土は見られないが、多量の遺物が包含されていた。最下層である暗黄灰色砂質土にはほとんど遺物は含まれていなかった。土壙の壁面には焼けた痕跡



第53図　土壙ＳＫ０５断面図（１／40）

が見られないことから、付近でゴミを焼いた後投入したものであろう。ただ本来の機能は別なものと考えられ、後述の如くＳＤ０６と一連の施設であった可能性が強い。

ＳＤ０６は、前述した斜面の裾付近を蛇行しながら東西に伸びる溝で、幅約１ｍ、深さ 0.1ｍを測る。西に行くにつれて浅くなり肩も南側では不明瞭な部分が多い。両端部はちょうどＳＫ０５の北東隅に接するように作られていることから一連の施設かと思われる。

ＳＫ０７は、トレンチ北辺で肩の一部が検出された深さ約 0.3ｍを測る土壙状遺構である。遺物は陶器片、土師器片が少量出土したのみであり、性格・規模については不明である。

第３トレンチ　基本層位は、２層の盛土（駐車場用）以下、厚さ0.3～0.8ｍの礫層の堆積（第54図３～７層）、中世遺物包含層である暗褐色砂質土層の順で遺構検出面である黄灰色砂質土（12層）に至る。このうち３～７層の各礫層は１・２トレンチで見られた土石流堆積と同質のものであるが、北側から順次堆積した様子が看取されることから人為的な埋めたてによるものと考えられる。

遺構面以下の層については部分的な断ち割りによって深さ１ｍの所まで確認している。12層は厚さ約 0.5ｍで、その下に暗黄灰色礫（13層）、黄色砂質土（14層）、暗褐色礫（15層）の堆積が見られた。しかしいずれも安定した層ではなく、又土石流による堆積でもないことから人為的に盛土が行なわれた整地層である可能性がある。(2)

検出された遺構は、掘立柱建物２棟、土壙１基、その他にピットとしみ込み状の窪みがある。ピットの中には柱痕を残すものもあるが狭小なトレンチのため建物としては確認できなかった。

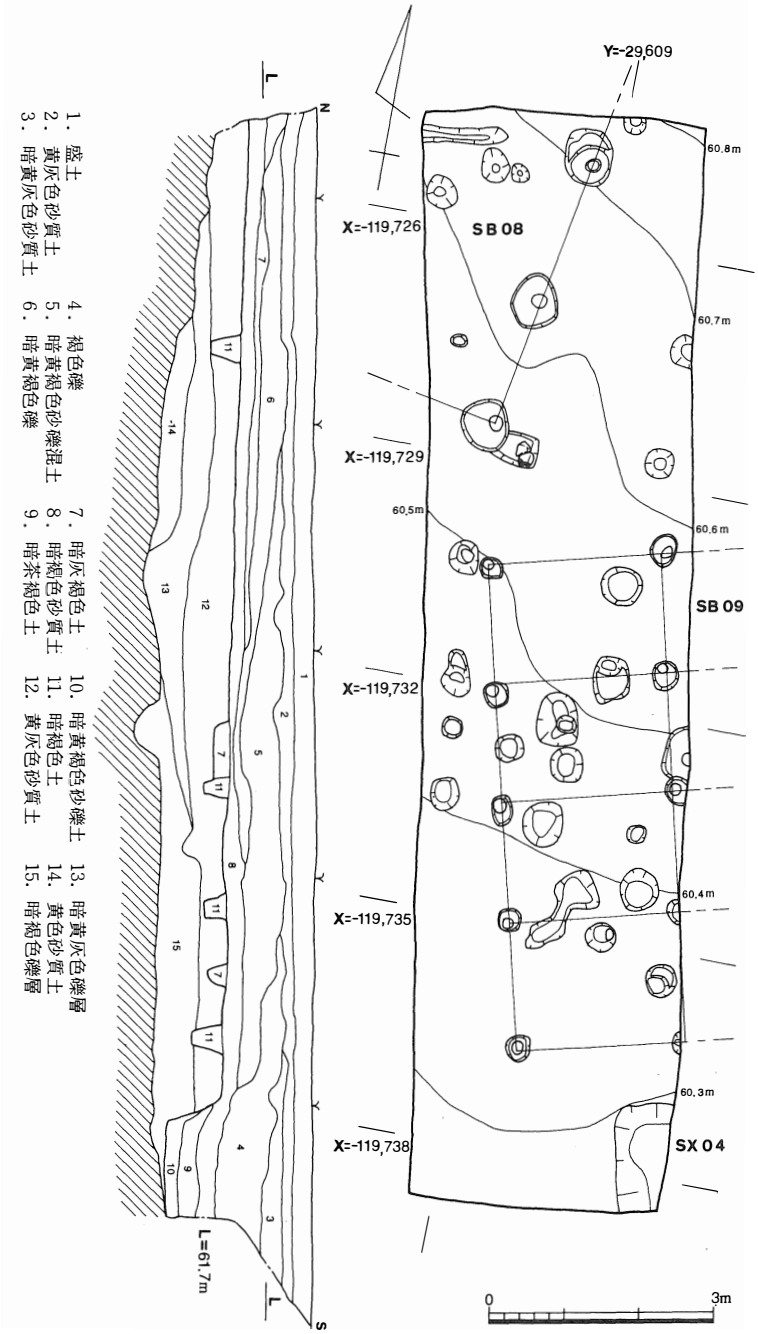
ＳＢ０８はトレンチ北側で２間分３個の柱穴が検出されたもので、おそらく掘立柱建物の東側部分にあたるものと見られる。検出された柱穴の中で最も大きく、直径約 0.7～ 0.9ｍ、深さは中央のものが 0.8ｍ、他は 0.5ｍを測る。それぞれ直径18cm前後の柱痕が残されていた。柱間は不等間で、北で２ｍ、南で 1.7ｍである。遺物は柱掘形内から土師器皿の小片が出土したのみで、時期の決定には困難を伴うが、包含層より出土した瓦器椀片などから概ね14世紀前半頃のものと推定される。

ＳＢ０９はＳＢ０８の南で検出された南北４間、東西２間以上の小規模な総柱の掘立柱建物である。図では西辺を検出したものとして復原したがさらに西に広がる可能性もある。柱掘形

の直径は 0.3m前後と小さく、いずれも直径約15cm前後の柱の痕跡を残している。柱間は東西で 2.3m、南北はかなりバラつきがあり 1.5～ 1.7mを測る。柱掘形内より出土した遺物には瓦器埦片・土師器皿片などがあり、瓦器埦の特徴からこの建物の年代はＳＢ０８とほぼ同時期と推定される。ただ両建物はその方位がかなり異なることから若干の時期差があると思われるが、前後関係は不明である。

ＳＸ０４はトレンチの南東隅で北西肩の部分が検出された土壙で、深さは 0.7mを測る。埋土は２層あり、少量の瓦器埦小片・土師器皿片等が出土した。おそらく前述の掘立柱建物と同時期のものと考えられる。一部分のみの検出のため規模・性格は不明であるが、遺物包含層である第８層の堆積状況から見ると、かなり大きな土壙であった可能性がある。位置的にはＳＢ０９に附随する施設であったかもしれない。

この他にはしみ込みとピットが数個検出されているが遺物を出土するものがほとんどなく、また前述の如く建物としてのまとまりも見出し難いため、時期や性格等については不明である。



第54図　第３トレンチ平面・断面図（１／100）

4　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物のほとんどは近世の土壙ＳＫ０５のもので占められ、他に少量の中世遺構に伴うものが出土しているが図示できるものは非常に少ない。以下ＳＫ０５から出土した遺物を中心に、図示し得たものについてその概略を述べることとしたい。

ＳＫ０５の遺物は、多量の炭・焼土とともに出土している事から火事あるいは焼却によって投入されたと推定される一括資料である。量はコンテナバットにして５箱あり、そのうちの約６割が陶磁器で占められる。次いで土師質の土器が２割、瓦類が１割、残りが金属製品・土製品その他となる。陶磁器では圧倒的に肥前系染付磁器が多く全体の８割を占めている。次いで唐津系の陶器、瀬戸・美濃系の陶器、京焼系の陶器の順で、志野系の土器片が１点ある。時期は、青磁染付の筒茶碗、広東碗の存在、瀬戸・美濃系の落蓋の形態などから18世紀後半～19世紀初め頃のものと推定される。

碗　磁器と陶器があり、磁器はすべて肥前系である。１は新しい形態のもので数は少ない。外面に菊花文、見込みには「寿」銘をもつ。２・３は丸腰の碗で、３の高台は外側に張り出す形態。外面は桐・梅文、見込みには鳥文、高台外面には圏線を施こしている。３は内面に菱繋ぎ四方襷の文様帯がめぐる。

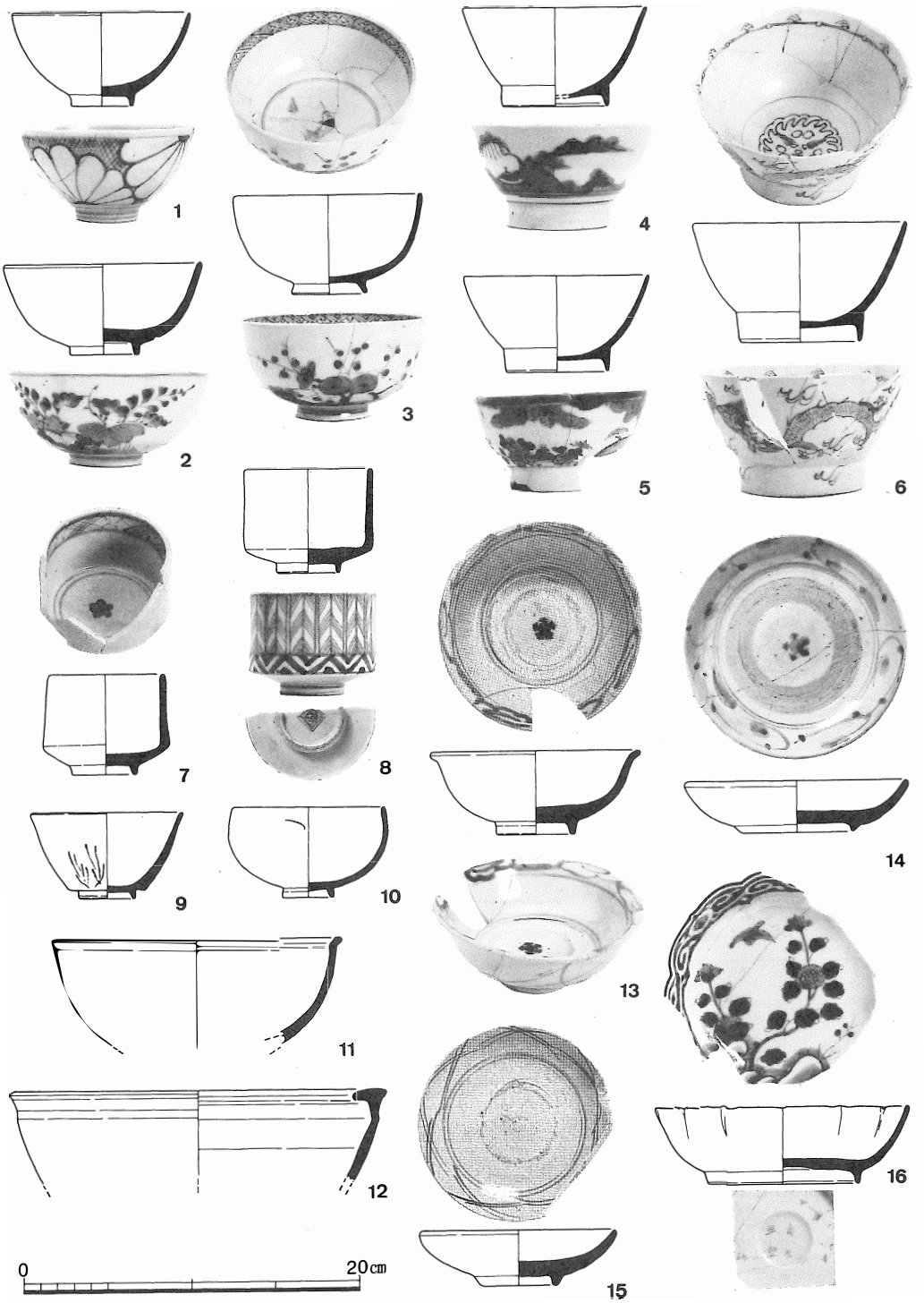
４～６は広東碗である。セットとなる蓋については６のみ小片が確認されただけで、他は見あたらなかった。４は山水図を外面に描くものだが呉須の発色はやや黒ずんだ青色である。５は外面に菊花と松を見込みには四弁花を描いており呉須の発色は良好、全面に貫入が見られる。６は外面に雲龍文を描く一回り大きなもので、龍は三つ爪である。

筒茶碗２点のうち７は青磁染付である。口縁がややすぼまる形態で、内面には四方襷の文様帯をめぐらせ、見込みにはいわゆるコンニャク判による五弁花文をもつ。五弁花のみ発色が悪い。８は直立する半筒形のもので、内面には菱繋ぎ四方襷、見込みには手描による五弁花文をもつ。高台にははなれ砂が付着しており、中央に角枠の渦福銘を描いている。

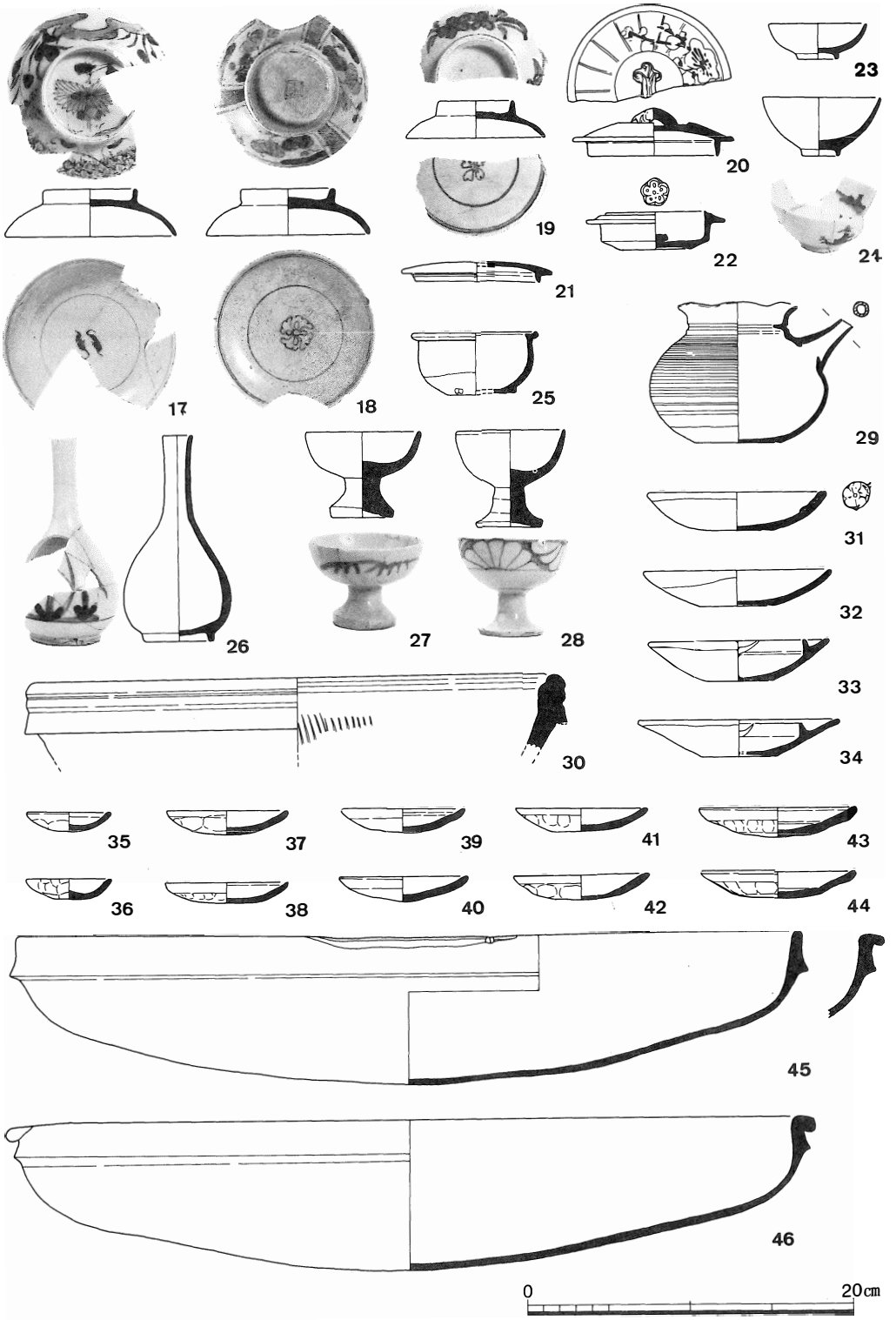
９・10は陶器の碗。９は京焼を模した唐津系のもので外面には省略された根付若松を描いている。10は京焼系の丸腰の碗で、外面には草文と思われる銹絵の一部が残る。

鉢　10・11は唐津系の陶器鉢、11は口縁端を外反させるもの、12は内外面に肥厚させた平坦面をもつものである。11外面には草文銹絵の一部が残る。13は肥前系磁器。鉢としておいたがやや浅いため碗に含めた方が良いかも知れない。外面には折れ松葉文、内面には唐草文を描いており、見込みは蛇の目釉はぎを行う。中央には五弁花のコンニャク判をもつ。

皿　いずれも肥前系の磁器。14は直径13㎝、15は直径11.5㎝の厚手の皿で、内傾気味の高台を有する。見込みには蛇の目釉はぎを行う。14は内面に花唐草文とコンニャク判の五弁花を、15は松葉文を施こしている。16は型づくりによる輪花皿で口銹を施こすものである。内面全体



第55図　土壙ＳＫ０５出土遺物実測図１　（１／４）



第56図　土壙ＳＫ０５出土遺物実測図２（１／４）

に花鳥文を描き、底部中央には「成化年製」銘をもつ。

蓋　磁器と陶器がある。17～19は広東碗の共蓋で、いずれも肥前系の磁器。外面には菊などの草花文を描くものが多い。このうち18・19はともに内面に四弁花を描き、黄味を帯びた釉で呉須の発色も良くない。18には角枠銘が見られる。

20・21は山蓋で、20は梅花文の上絵付を行っている。21は合わせ部のみ釉を施こさない。

22は瀬戸・美濃系の鉄釉陶器の落蓋で、梅花文を貼り付けたつまみを有している。

小物　23は白磁、24は肥前系染付で内外面ともに山水図を描く、25は鍋であるが小形のためここに含めた。内面と外面上半に鉄釉を施こす瀬戸・美濃系の陶器。外面の一部には煤の付着が認められ、実際火にかけられたもののようである。把手は欠失する。

袋物　数は少なく、図示できたものは肥前系染付の一輪差(26)一点だけである。外面には草花文を施こしている。他に唐津系の徳利と思われる体部片が１点ある。

仏飯　27・28ともに脚台上部に内弯する小碗をのせた形態のものである。27は草文、28は菊花文を外面に描いている。他に体部片と脚部片が１点づつあり、いずれも肥前系磁器である。

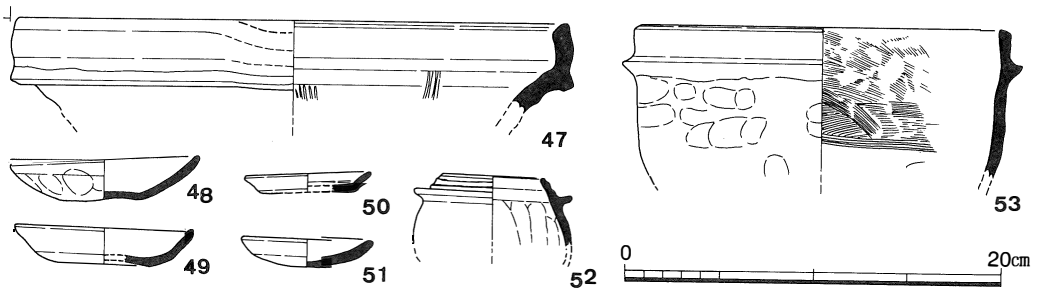
土瓶　29は唐津系の薄手作りのもので、口縁部は波状に成形し、注口は先すぼまりとなる形態である。耳の部分は欠失、底部は無釉である。他に瀬戸・美濃系のものが３個体分程ある。

擂鉢　数は少なく、図示し得たのは30の備前焼一点のみである。他には信楽系の口縁が１点と体部片が数点、丹波焼と思われる口縁部片が３点程ある。

灯明皿　陶器と土師質のものがある。陶器は唐津系の施釉されたもので平皿（21・22）と受付皿（33・34）がある。直径11～12cm前後でいずれも焦げ跡を残している。平皿のなかには内面に菊花文や梅花文を貼り付けたものも見られる。

土師質の皿は法量から３つに分類される。35・36は直径５cm前後のもの。手づくねで中央部がわずかにふくらむ。全面に金雲母の粉が付着する。37～42は直径８cm前後のもので最も量が多い。43・44は直径10cm前後で見込みに凹線を廻らせるもの。いずれも細い胎土に砂粒をわずかに含み、数ケ所に焦げ痕を残す。乳白色を呈するものと橙色を呈するものがある。

炮烙　45・46はともに口径48cm、器高９cmの底部形づくりによるもので底部外面に雲母の粉



第57図　出土遺物実測図（１／４）

が付着する。貼り付けによる把手を相対する位置に作り出している。

土製品　伏見人形・土鈴などがある。伏見人形は破片が多く原形不明のものが多い。狛犬が唯一の完形品。鈴は成土板を絞り上げ開口部を切り取るもので２個体出土した（図版25)。

瓦　軒丸瓦は２点、いずれも周囲の珠文のみで中心部を欠くが三つ巴文であろう。軒平瓦は均正唐草文で同じく２点ある。一部燻し焼きが全体に及んでいないものも見られる。平瓦の中には広・狭端部を持つタイプが確認される（図版26－１）他に桟瓦片が１点ある。

金属製品　鉄製品には釘・鎌、銅製品には煙管、釘、釣手、鈴などの他に用途不明品が数点ある。又銭貨として寛永通宝（新寛永）も一枚出土している（図版26－２）。

その他の遺物　前述の如く図化できるものは少ない。近世では第１トレンチＳＫ０２出土の備前焼擂鉢（47）と土師質皿（48）がある。遺物の量が少なく時期の判断はつき難いが、ＳＫ０５と同時期かあるいはやや古いものかと推定される。

中世では同じく第１トレンチのＳＫ０３出土のものがある。50・51の土師質皿と52の小形三足付羽釜が図示し得たものであるが、他に瓦器埦の小片も10数個体分出土している。瓦器埦の形態から見て概ね14世紀前半頃に比定されるものである。

53は第３トレンチの暗褐色砂質土層から出土した羽釜である。直線的に立ち上がる口縁部と断面三角形を呈する鍔を有するもので15世紀代に入るものであろう。

５　ま　と　め

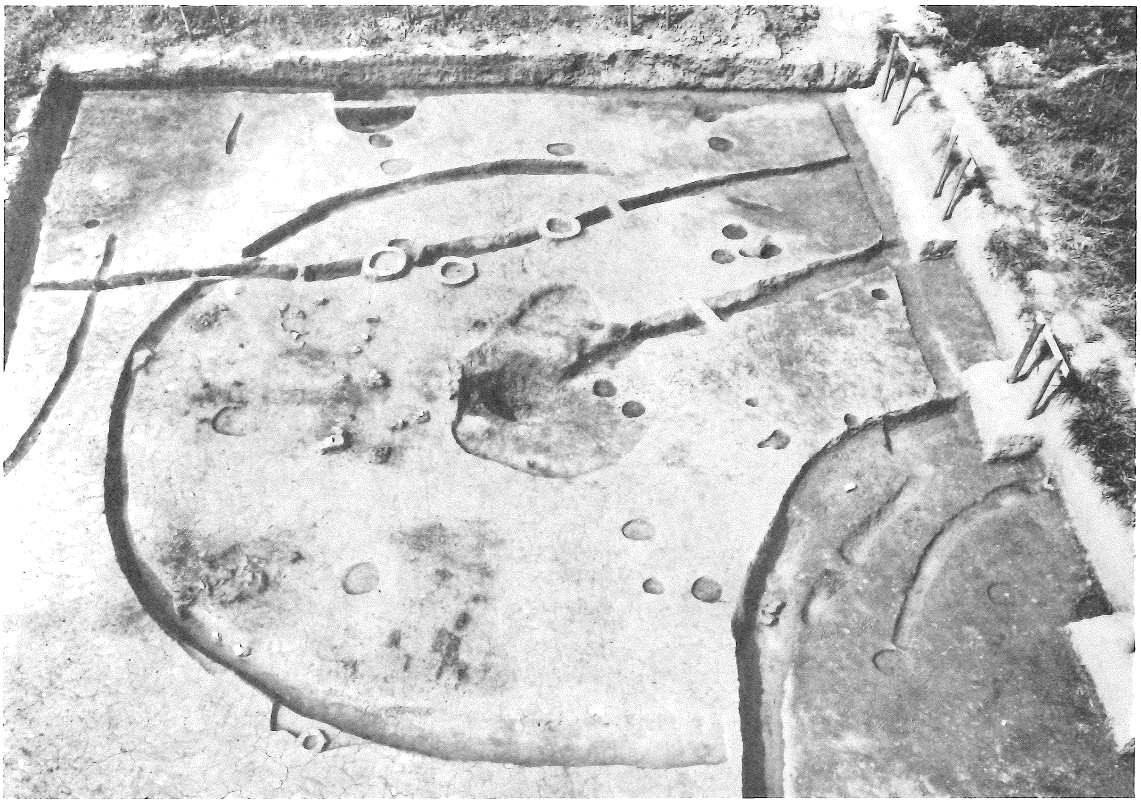
今回の調査では、当初目的とした奥海印寺城に関する決定的な遺構は検出されなかったものの14世紀前半頃と推定される掘立柱建物や土壙などが検出され、当地周辺の歴史を考える上で貴重な成果を得ることができた。文献上ではこの城に関して直接触れたものは無いが、その存在を推定させる史料でも15世紀後半までにしか遡らない[(1)]。従って今回検出された建物はその性格は不明ながら少なくともＳＢ０８の様な比較的規模の大きな建物を有する集落がすでに14世紀代には存在していたことを示し、当地における在地勢力の伸展状況を表す一つの資料になるものと考えられる。先の文献には高橋左衛門尉の名が見え、奥海印寺城をこの人物の城とする説もある。高橋家は現在も分家して存在しており、弓構と呼ばれる同族集団を保っている。高橋氏が15世紀頃に当地で勢力を持っていたのはほぼ間違いないと思われ、奥海印寺城が高橋氏の居館であった可能性は高い。第３トレンチで確認された如く、周辺地において大規模な整地作業が行なわれたと見られることから、今後周辺地での調査が進行することにより城の遺構はもとより乙訓の中世史を考える上での大きな成果が期待されるものである。

注１　山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭』『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号 1986年３月

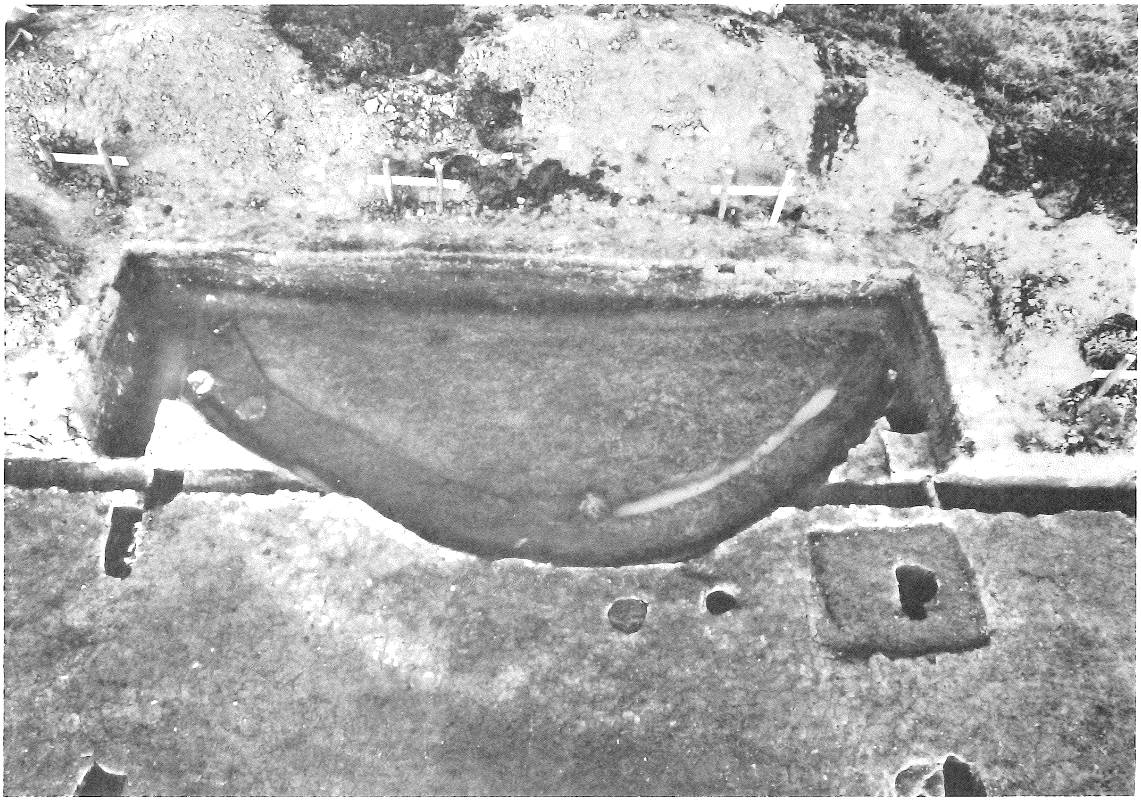
２　日下雅義氏の御教示による。

図　版

調査地全景（北から）



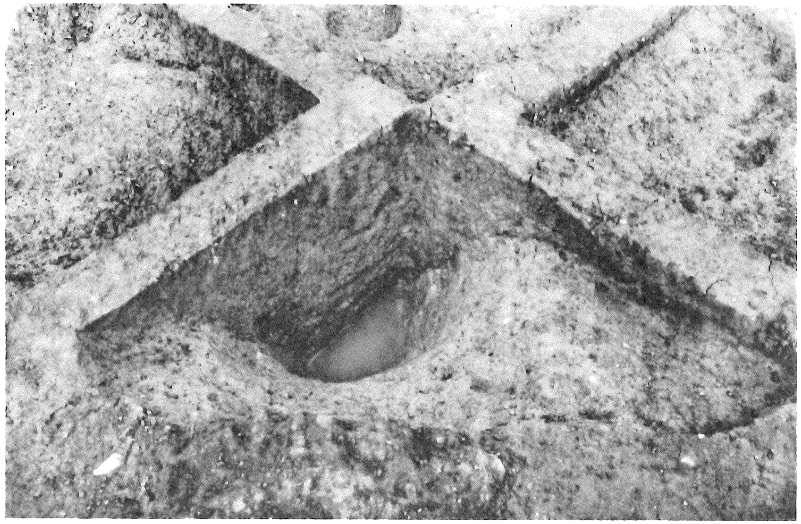
1　竪穴住居ＳＨ22813（南から）



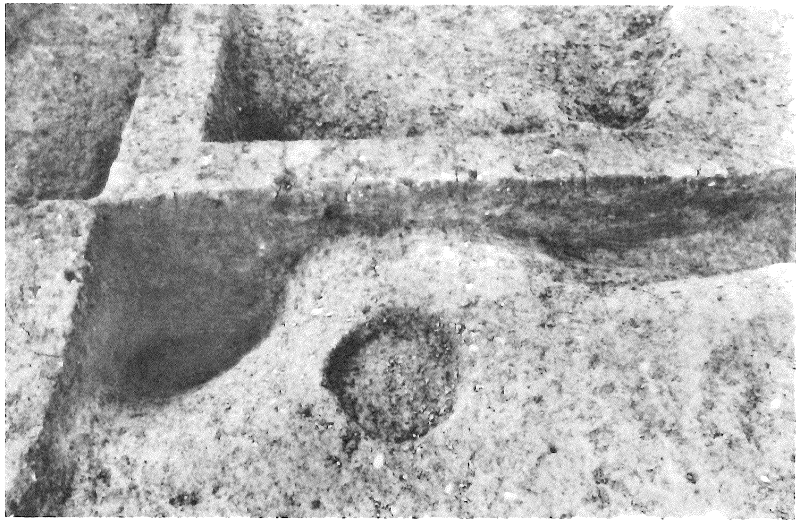
2　竪穴住居ＳＨ22804（西から）

1　溝ＳＤ22808（東から）

2　溝ＳＤ22808の土層（西から）

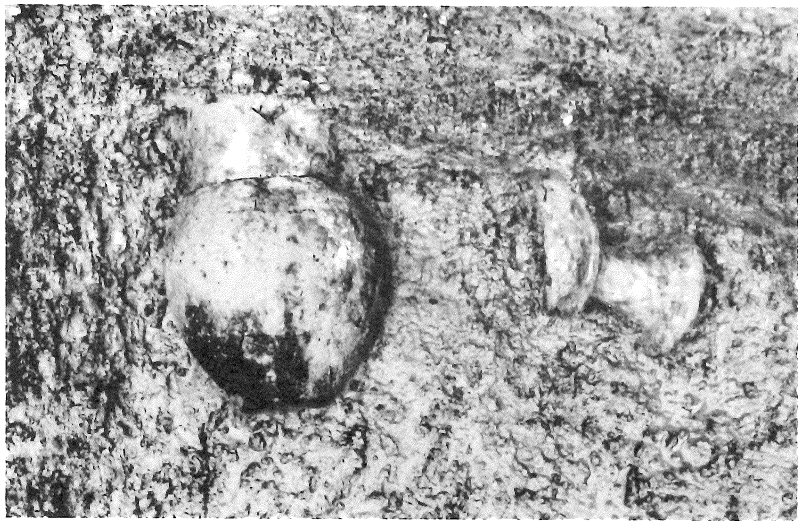


1　竪穴住居ＳＨ22813・中央ピットの土層（北面から）



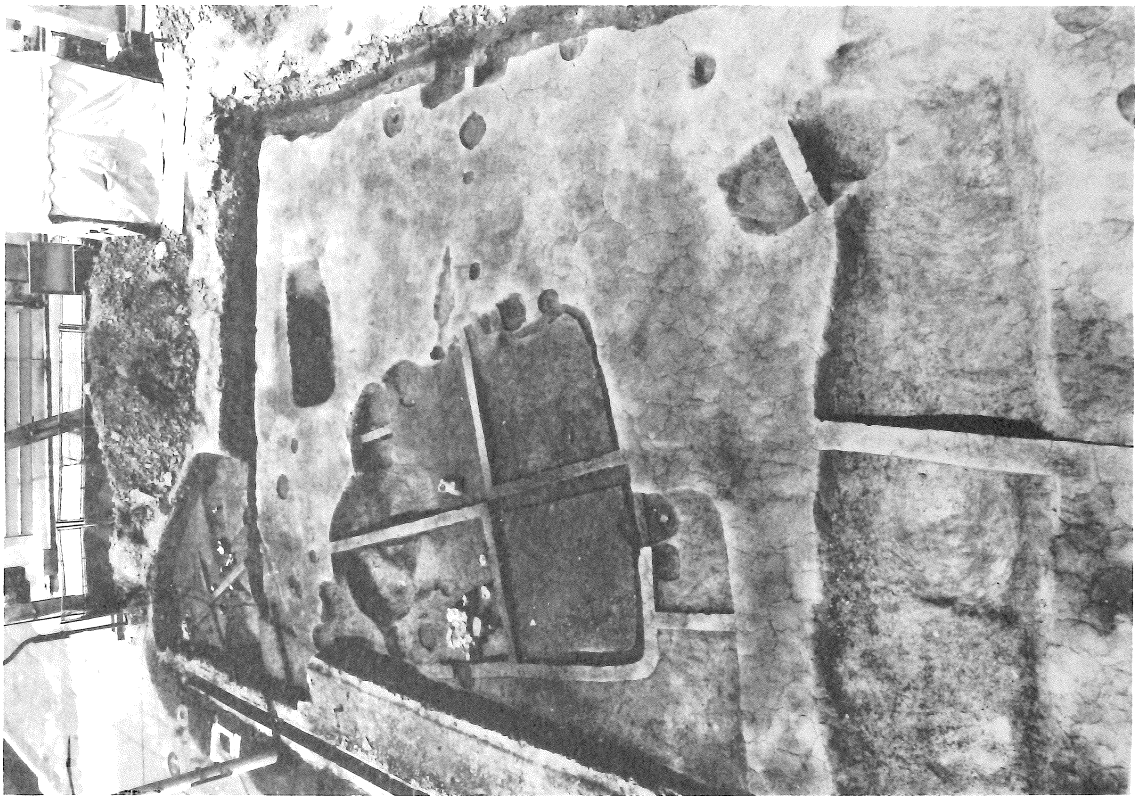
2　竪穴住居ＳＨ22813・中央ピットと排水溝の土層（南東から）

3　溝ＳＤ22808遺物出土状況（南から）

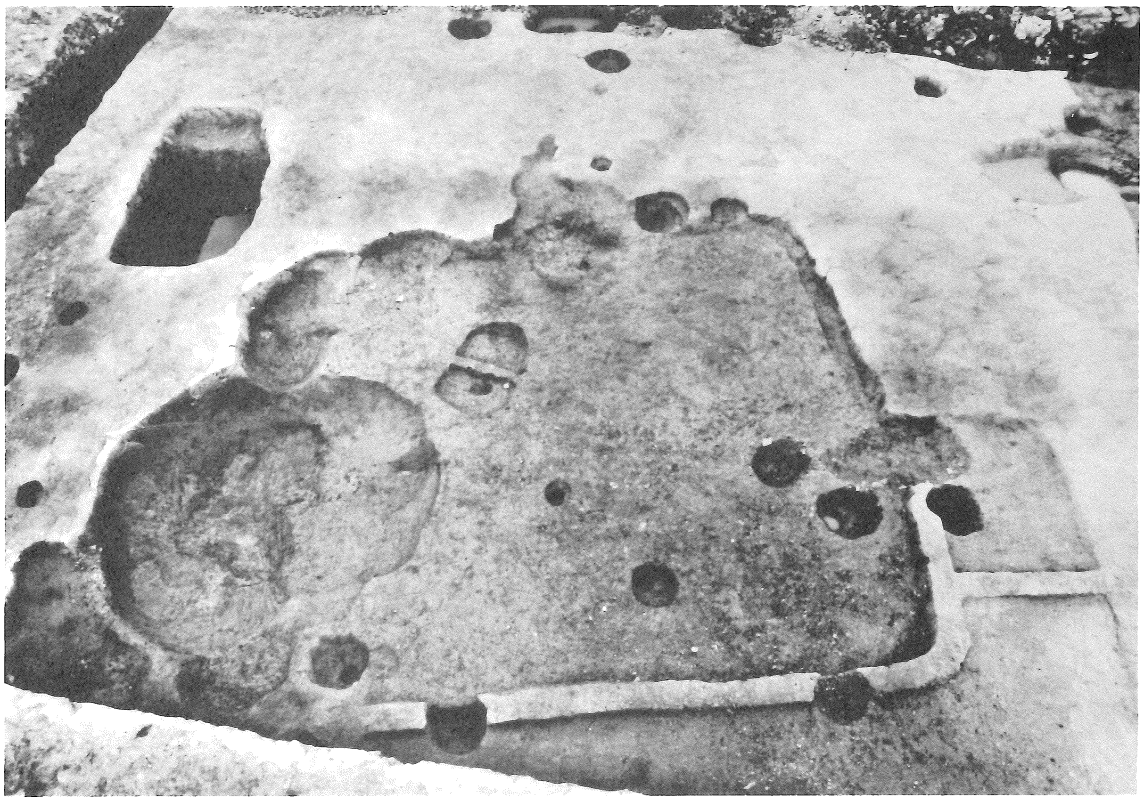


4　溝ＳＤ22808遺物出土状況（東から）

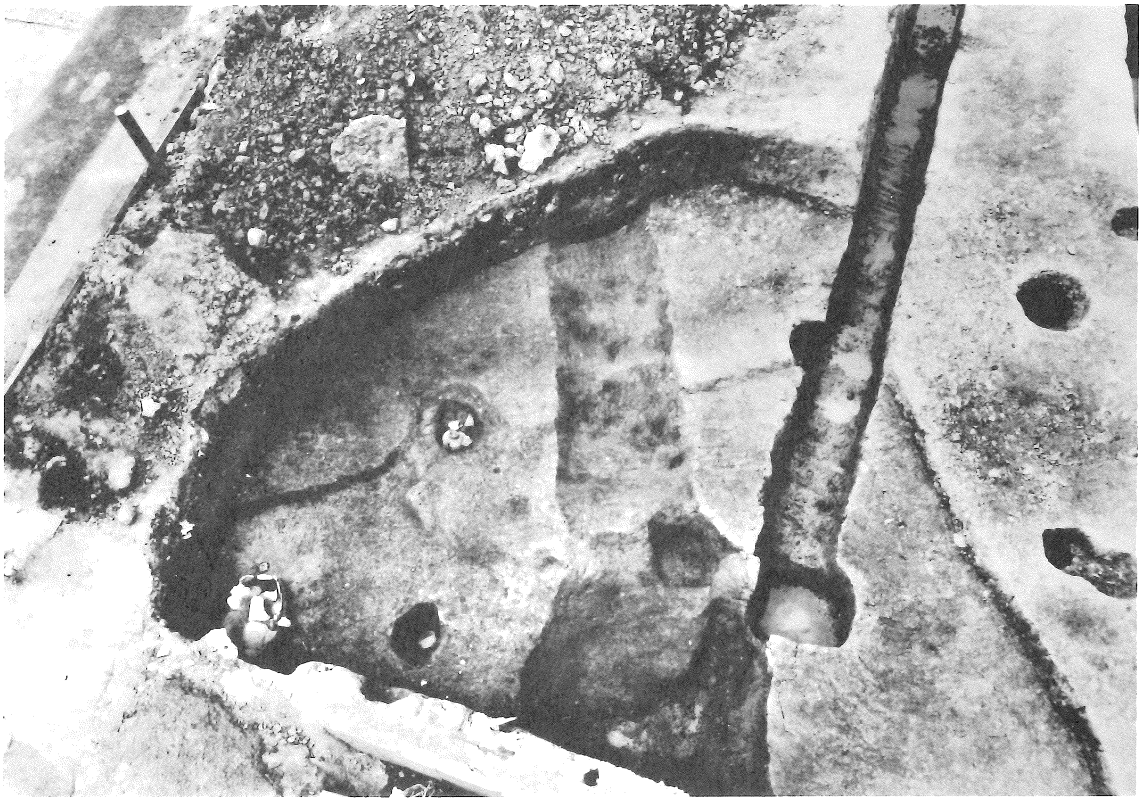
1　溝SD26503（南から）



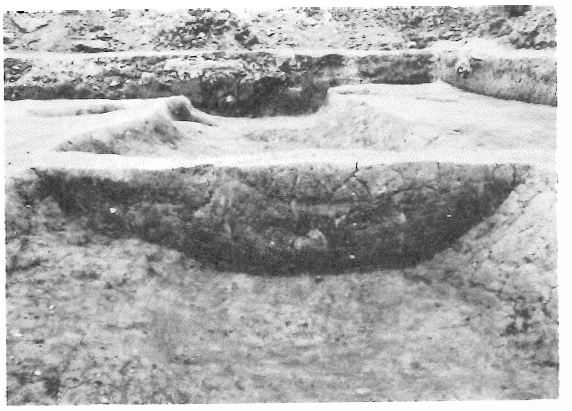
2　調査地全景（東から）



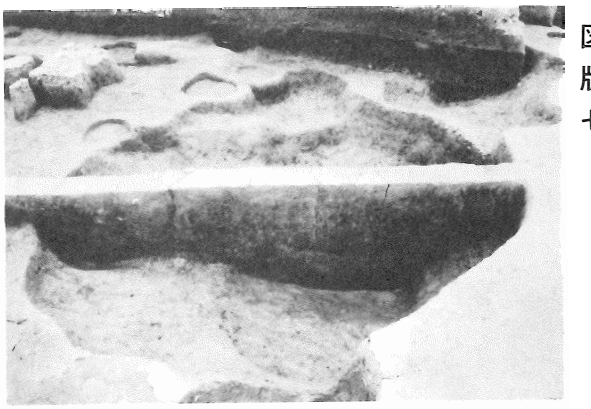
1　竪穴住居ＳＨ26504（南から）



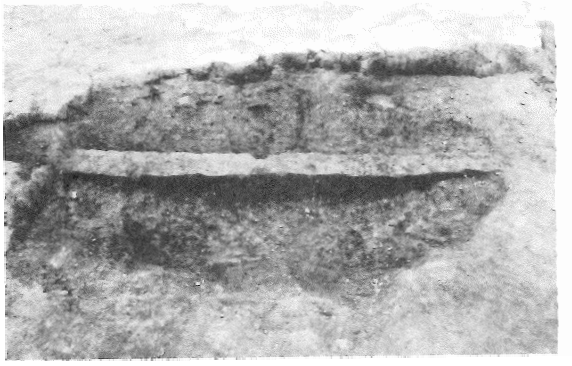
2　竪穴住居ＳＨ26509（南から）



1　溝ＳＤ26503断面（南から）

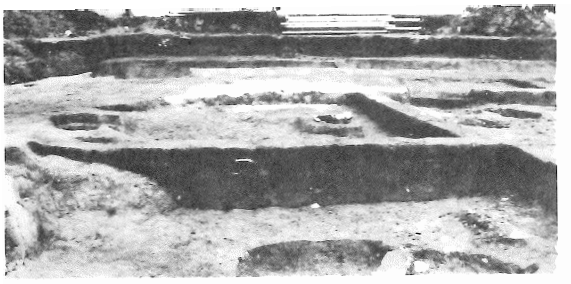


2　土壙ＳＫ26506断面（北から）



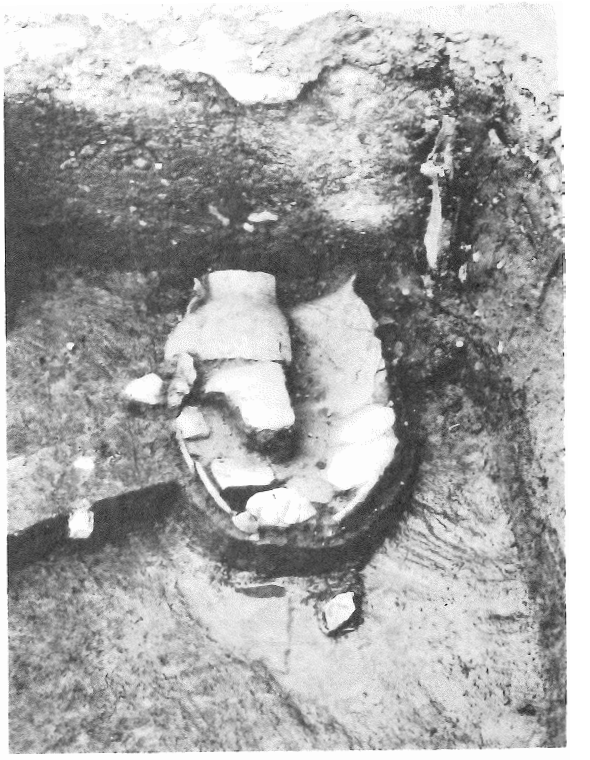
3　土壙ＳＫ26511断面（西から）

4　竪穴住居ＳＨ26504遺物出土状況



5　竪穴住居ＳＨ26504断面（西から）

6　竪穴住居ＳＨ26509カマド検出状況



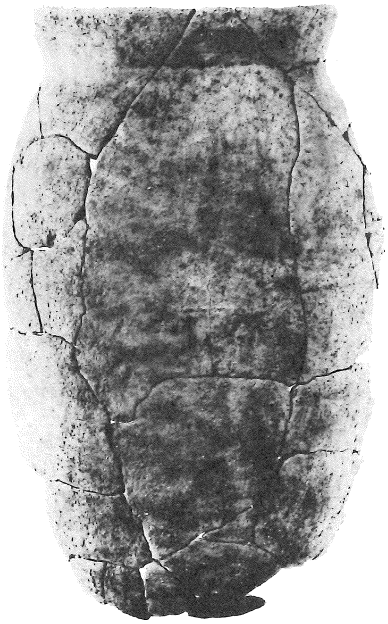
7　竪穴住居ＳＨ26509遺物出土状況

1

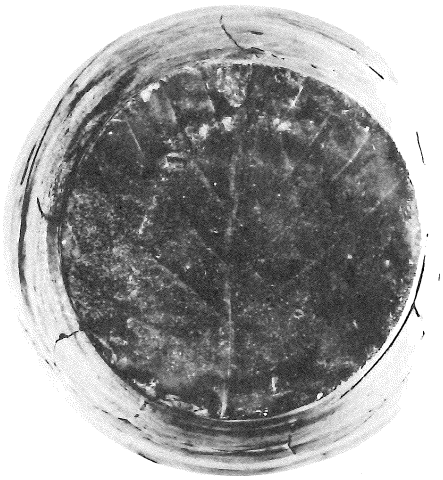
13

2

3

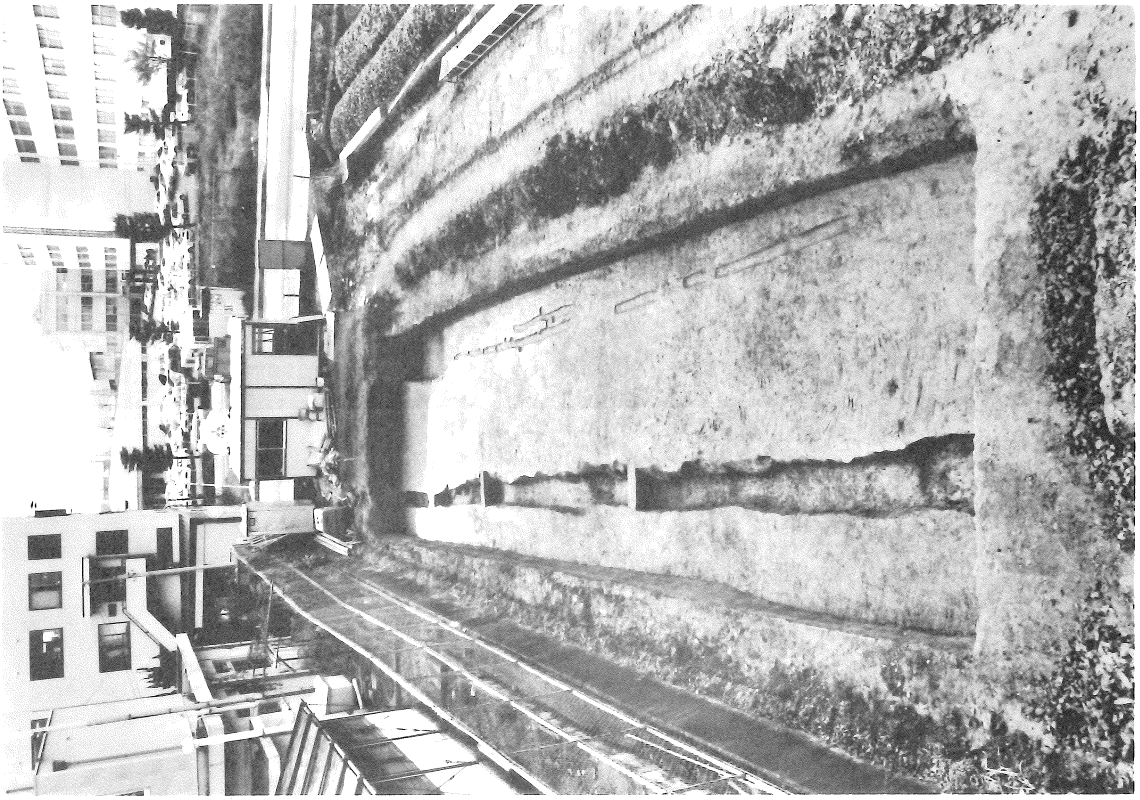


9

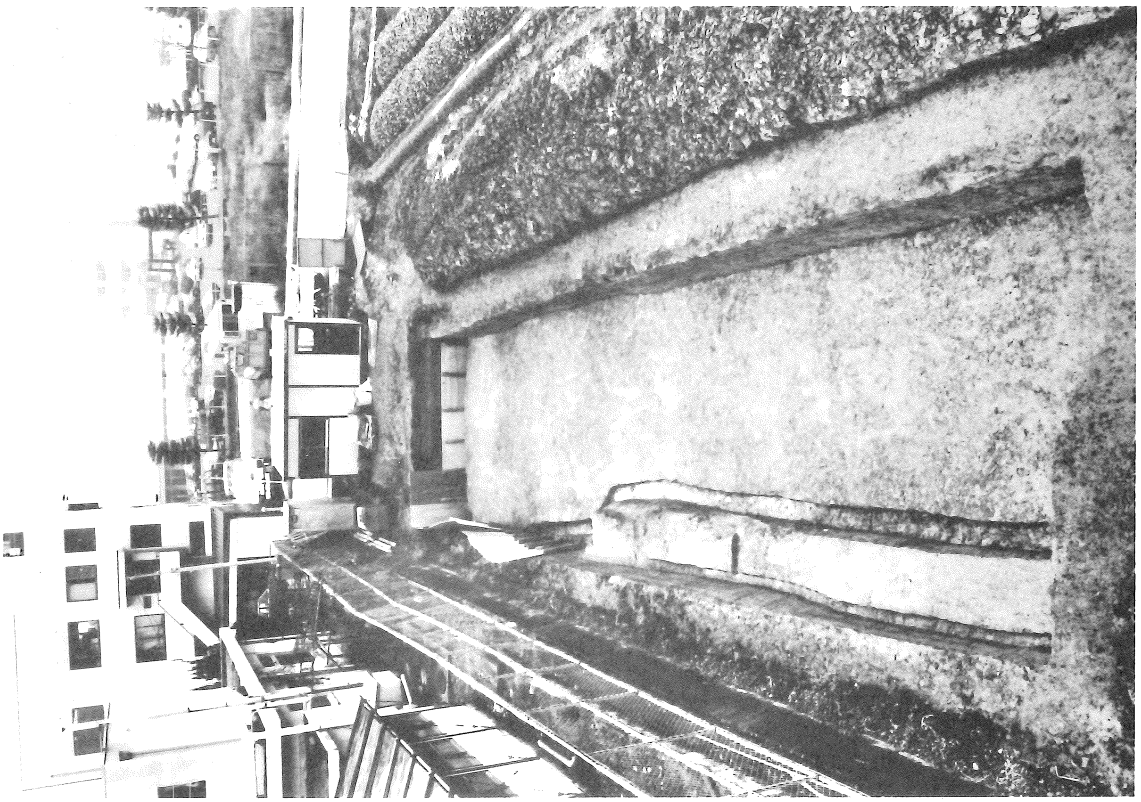


18

出土遺物



1　上層遺構検出状況（北から）

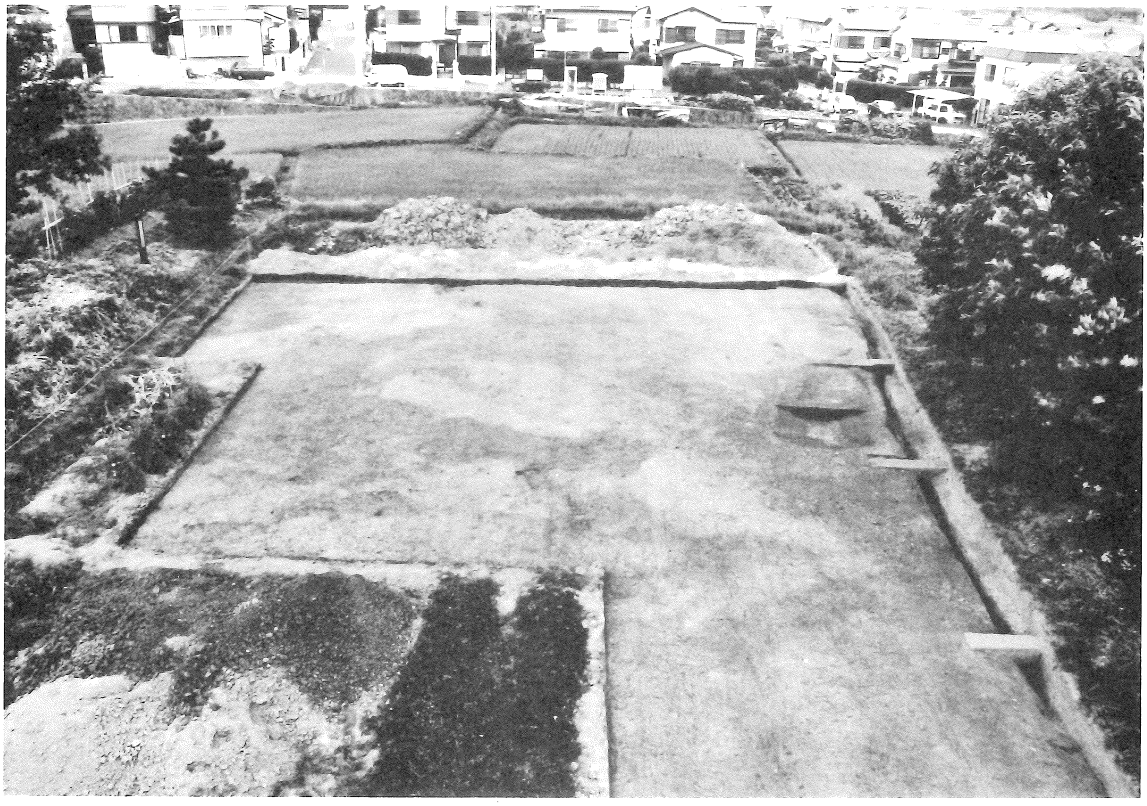


2　下層遺構検出状況（北から）

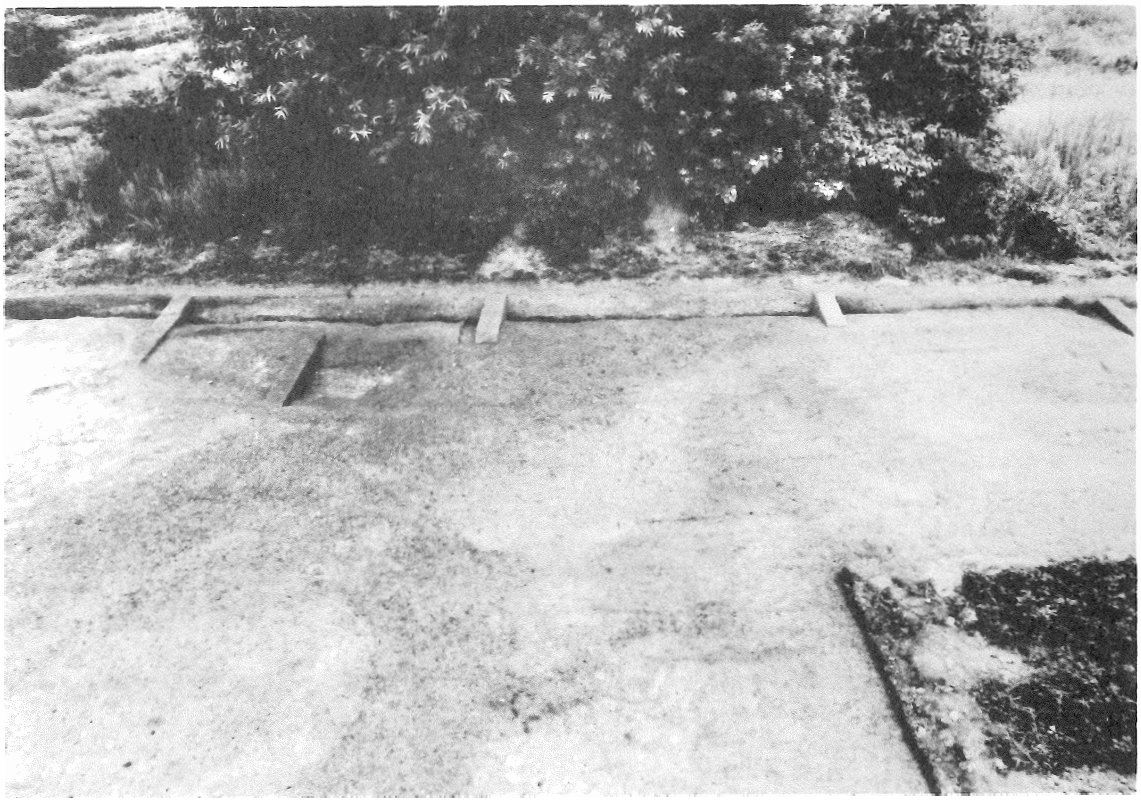
1　溝ＳＤ18404検出状況（南から）

2　出土遺物

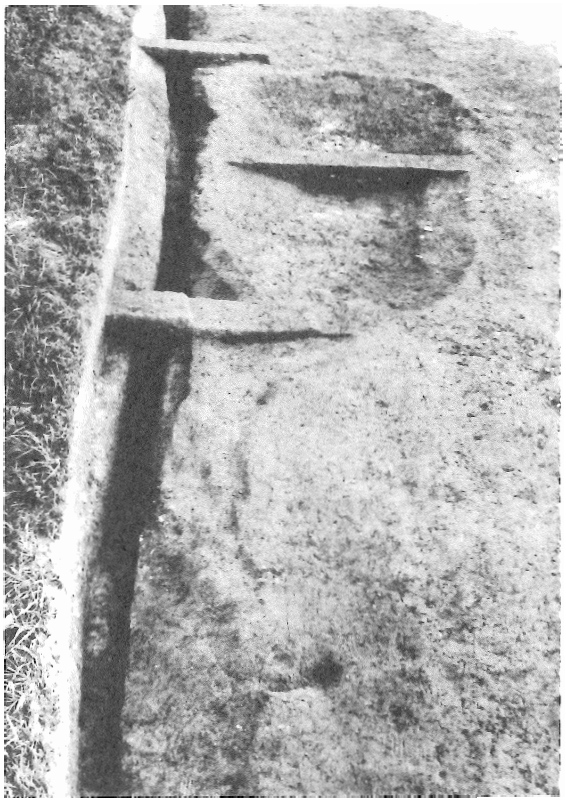
1　発掘調査地遠景（南西から）



2　発掘区全景（南から）

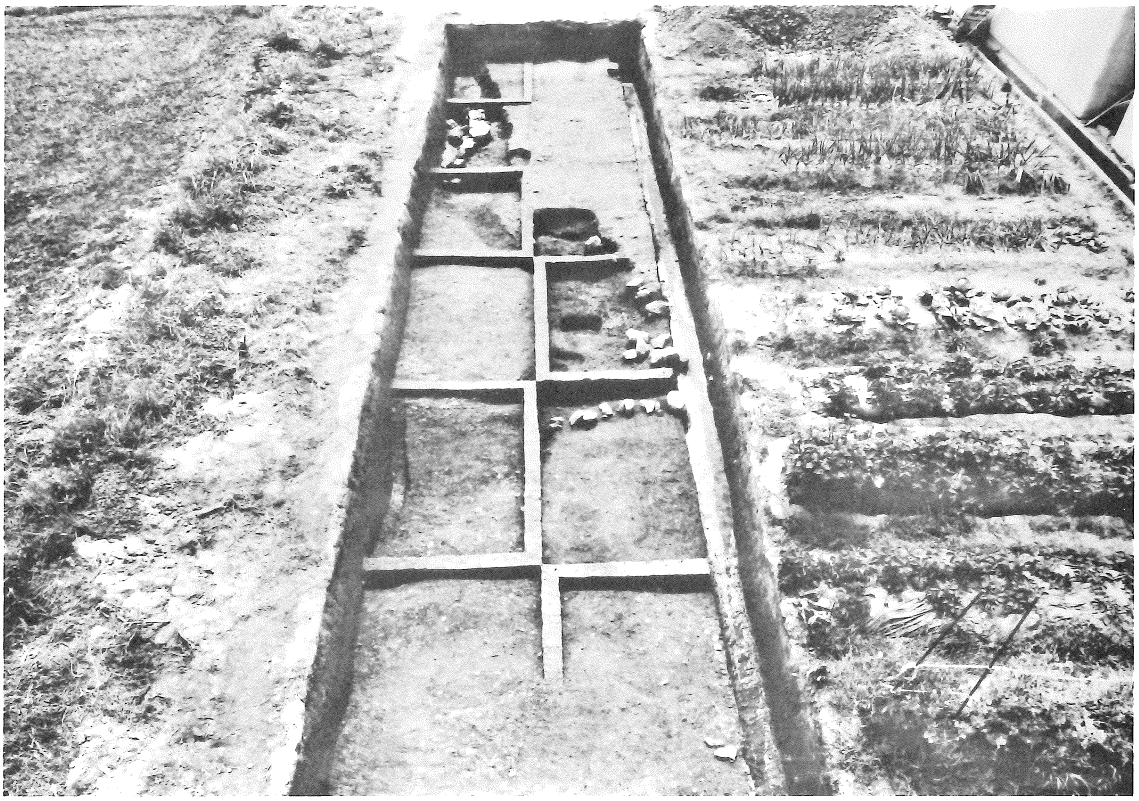


1　３号墳と周溝ＳＤ26901・溝ＳＤ26902（西から）

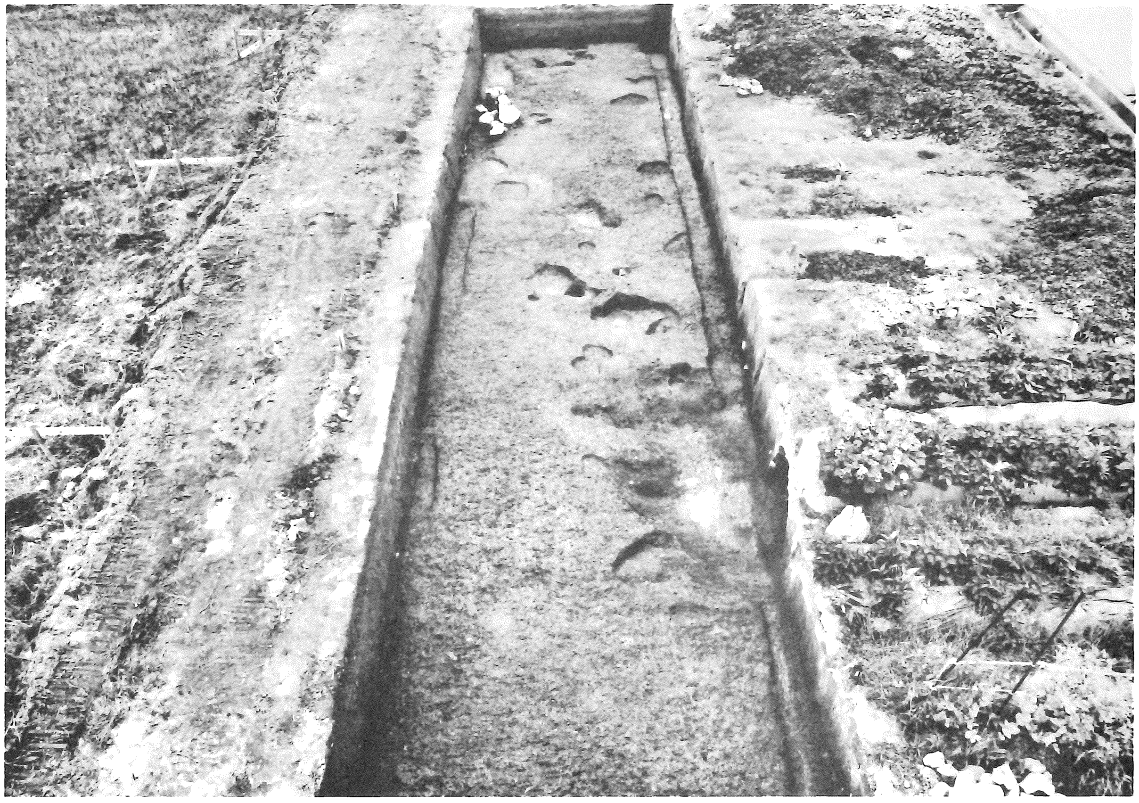


2　周溝ＳＤ26901全景（北から）

3　出土遺物

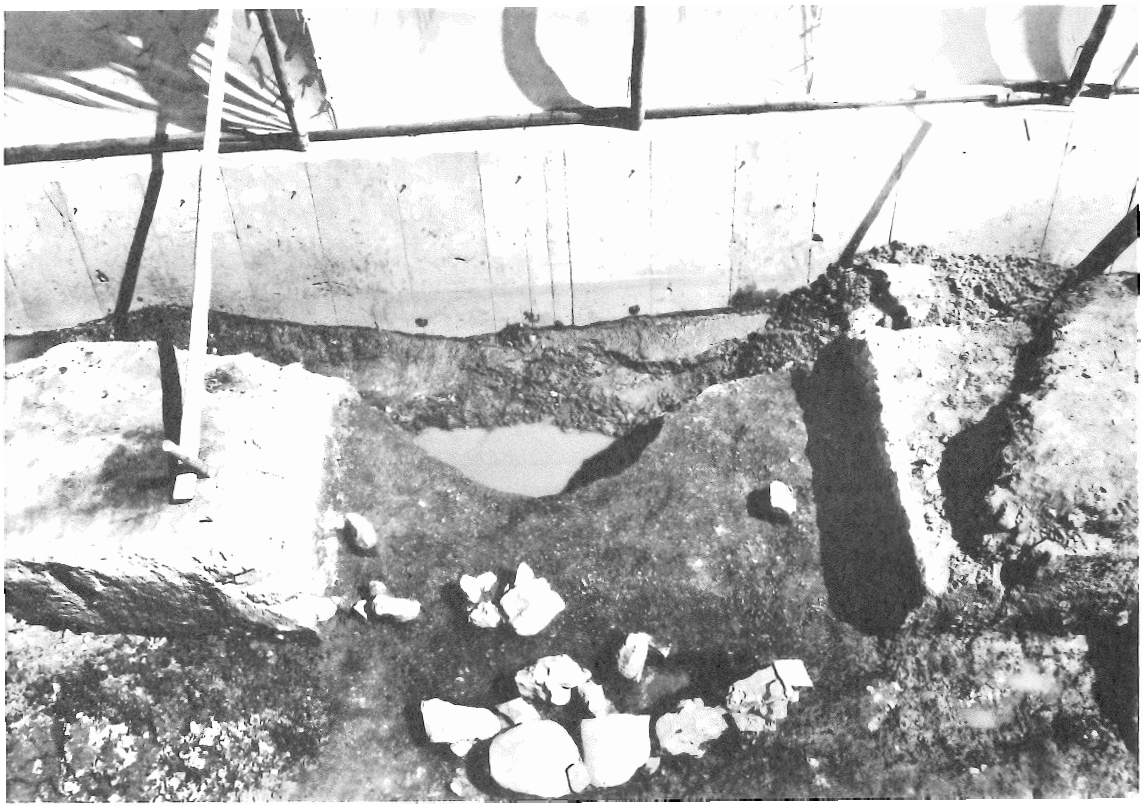


1　拡張前の18層上面・ＳＸ01（北東から）

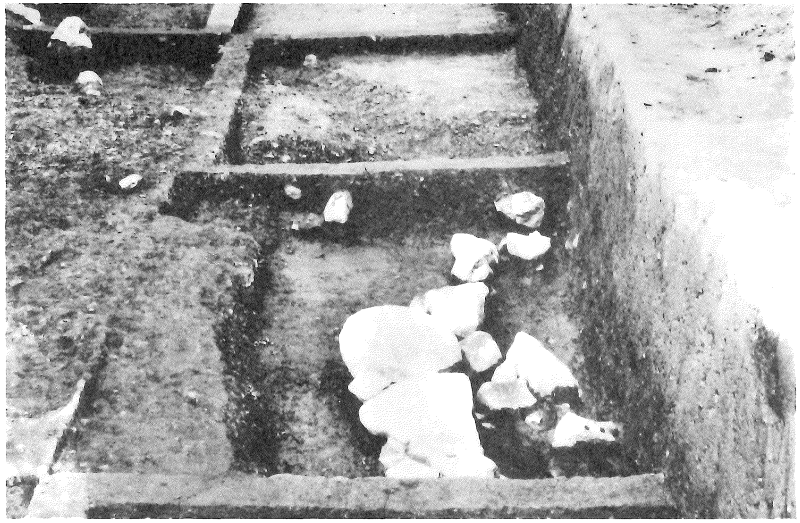


2　拡張前の18層下面（北東から）

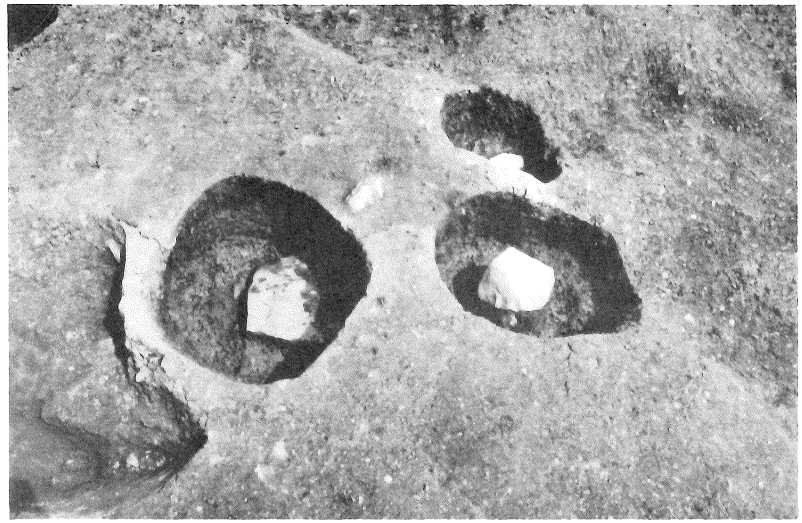
1　拡張後の調査地全景（北西から）



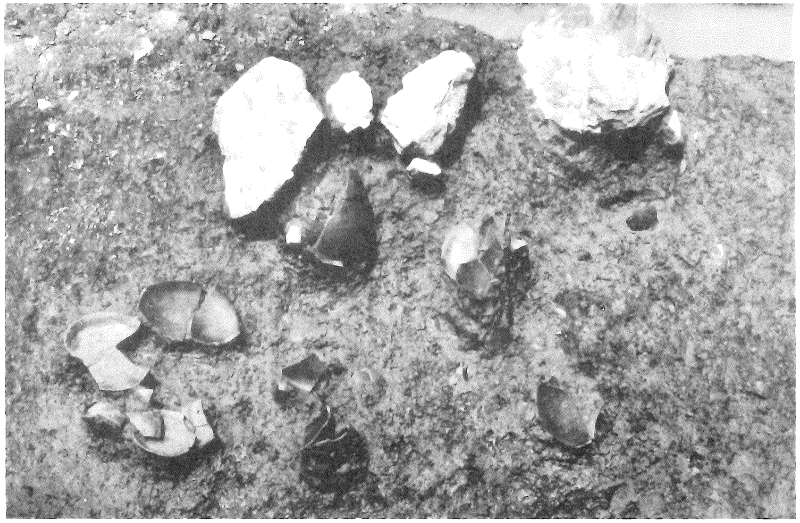
2　井戸ＳＥ09（北西から）



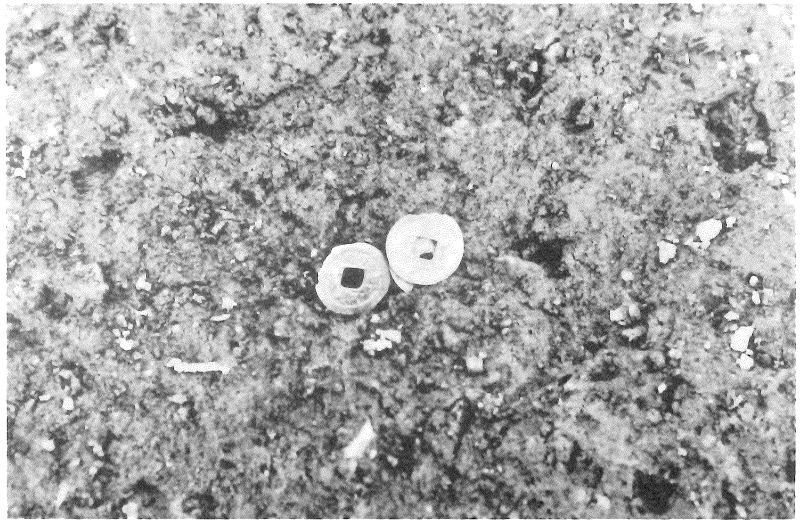
3　ＳＸ01・Ｃ３区石列検出状況（南西から）



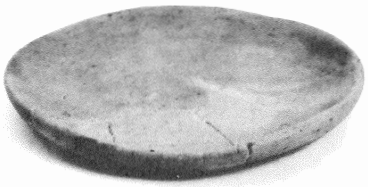
1　ピットの根石検出状況（南東から）

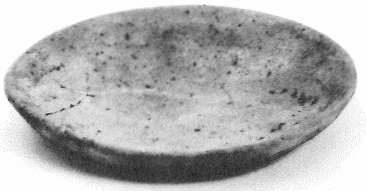


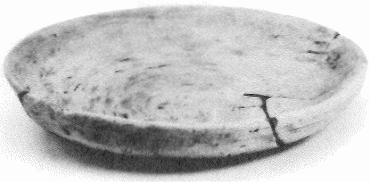
4　ＳＸ01・Ｂ１区遺物出土状況（南東から）

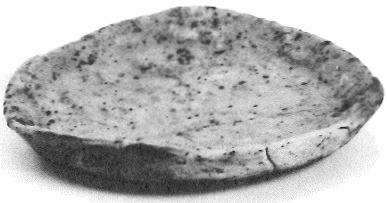


2　土壙ＳＫ07・銭貨出土状況（北西から）


4

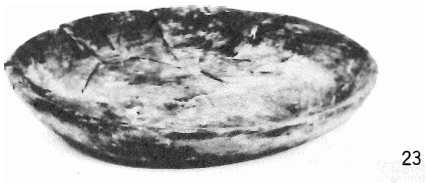

5


7

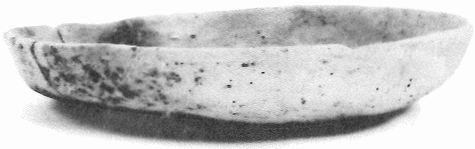

8

42

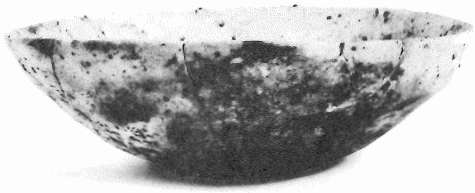
20


23

11

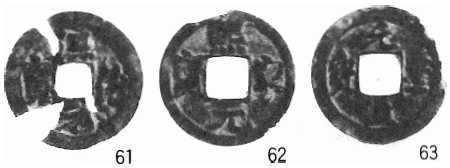

14

16


26

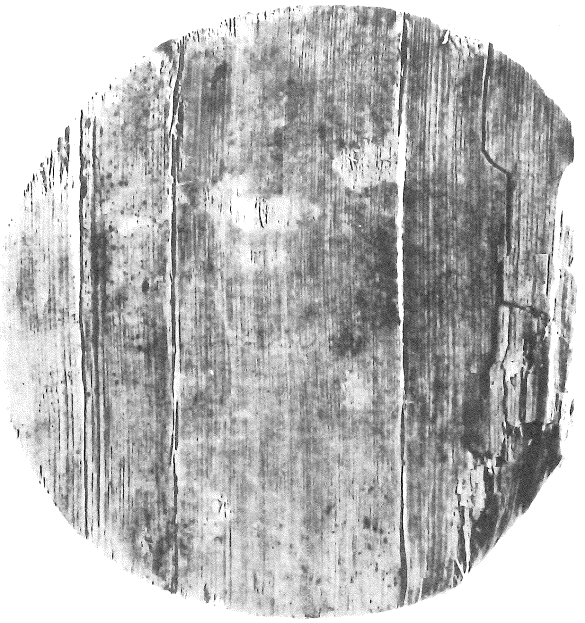
32

60

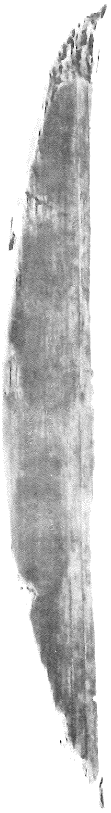

61 62 63

出土遺物(1)

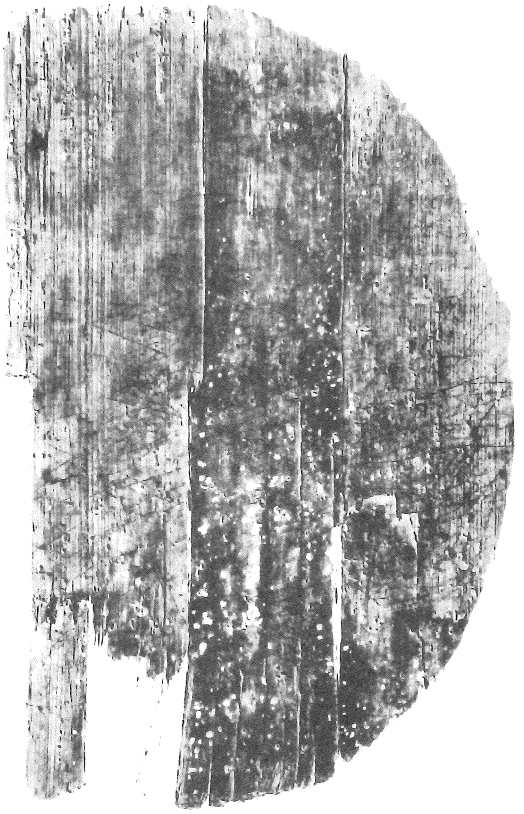
64



66



65



67

出土遺物(2)

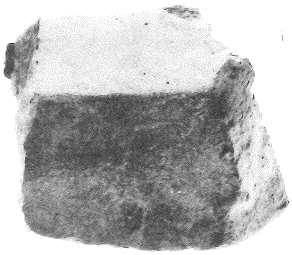
68

69

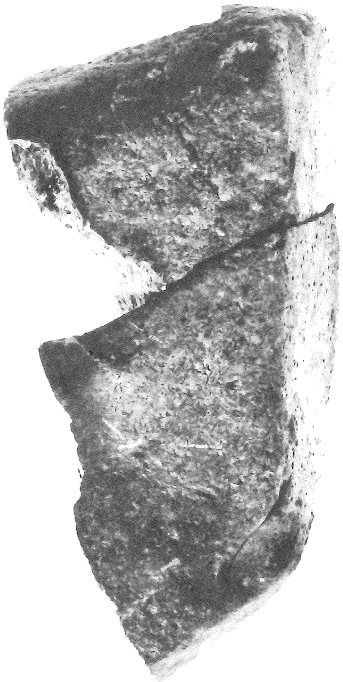
70

71

72



73



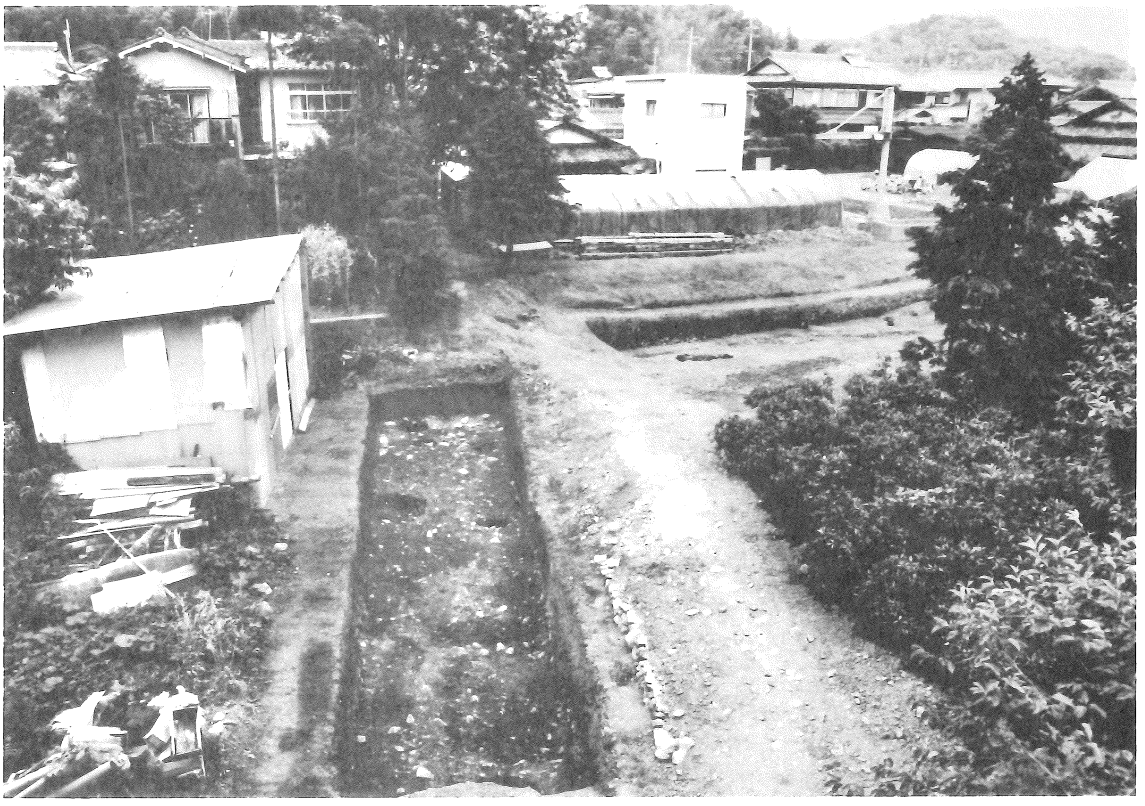
75

74

76

出土遺物(3)

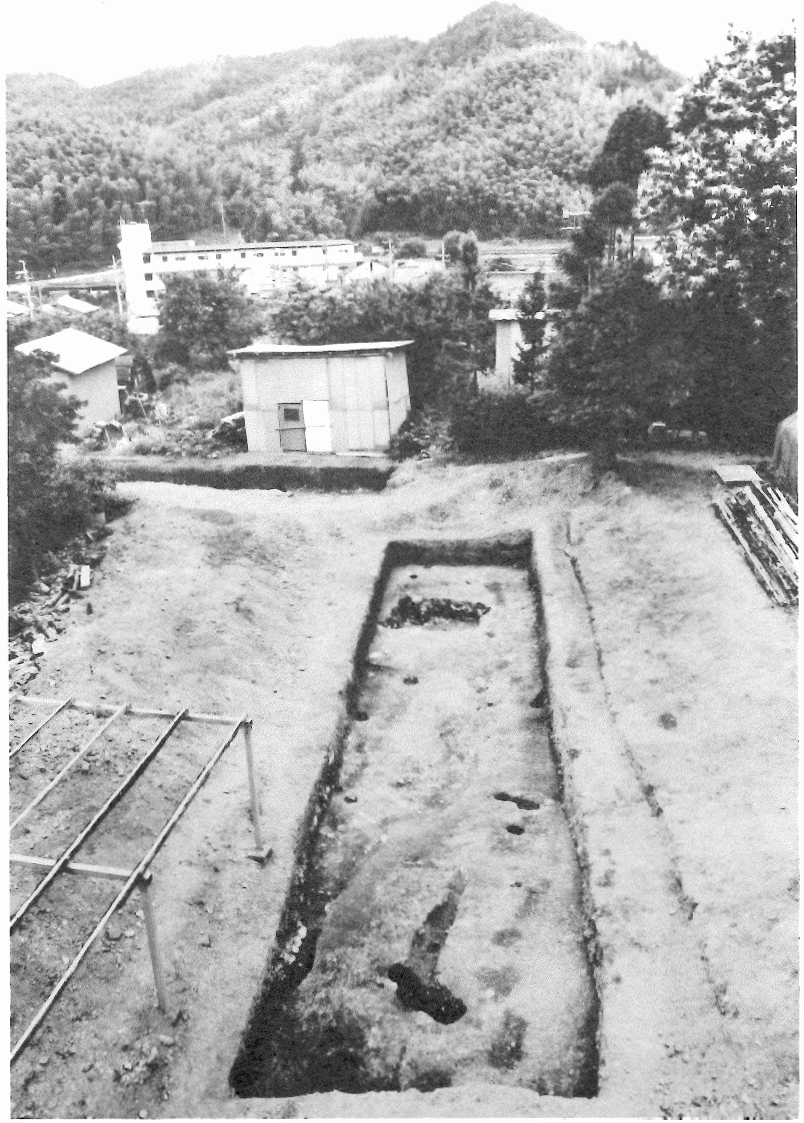
1　調査地全景（北東から）



2　調査地全景（南から）

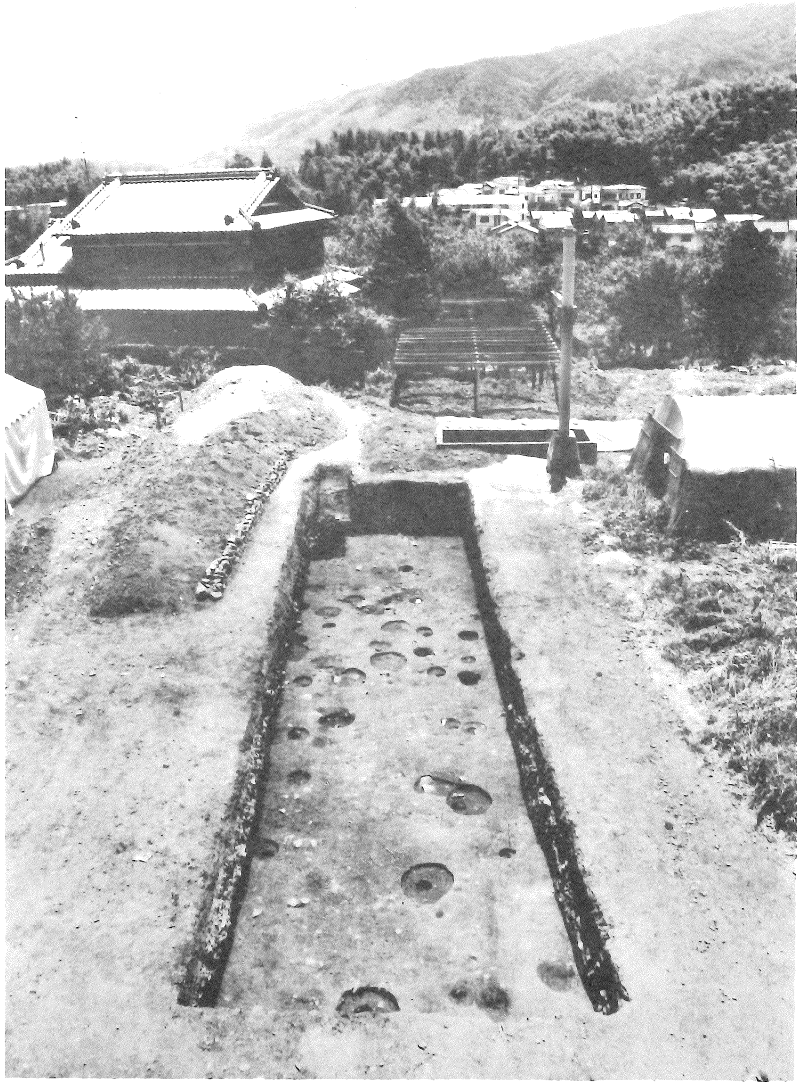
1　第1トレンチ全景（南から）

2　第1トレンチ全景（北から）

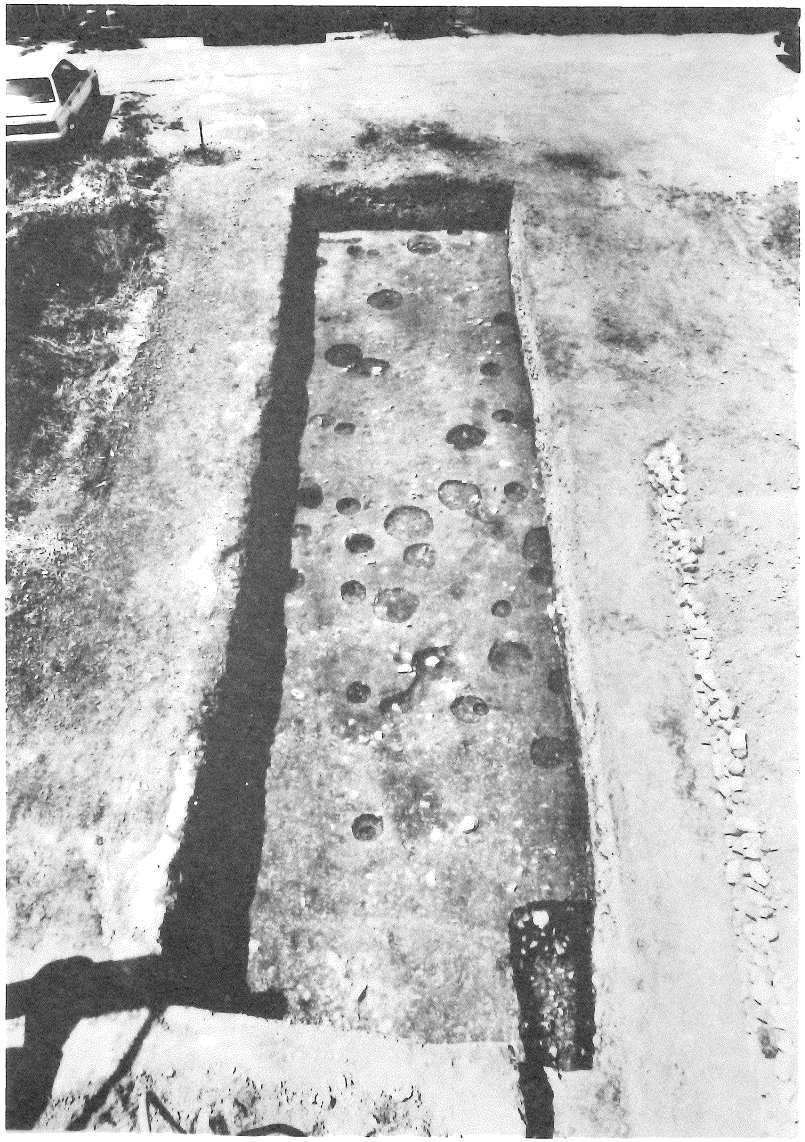


1　第2トレンチ全景（東から）

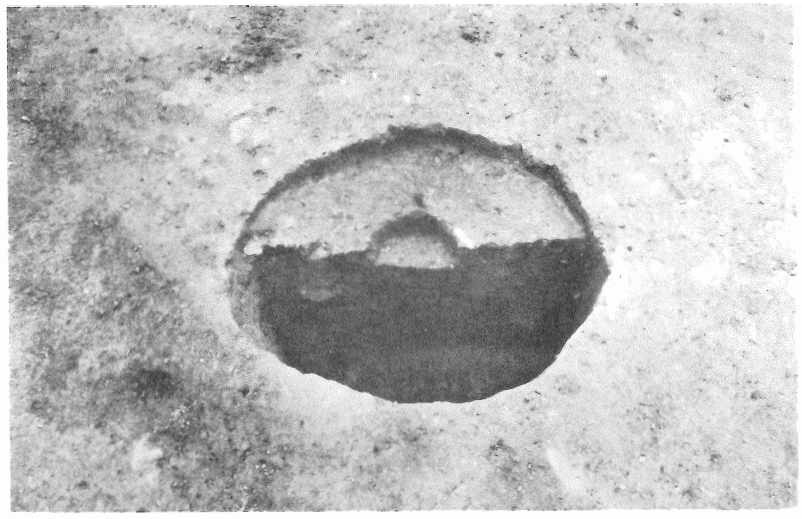
2　第2トレンチ全景（西から）



1 第3トレンチ全景（北から）

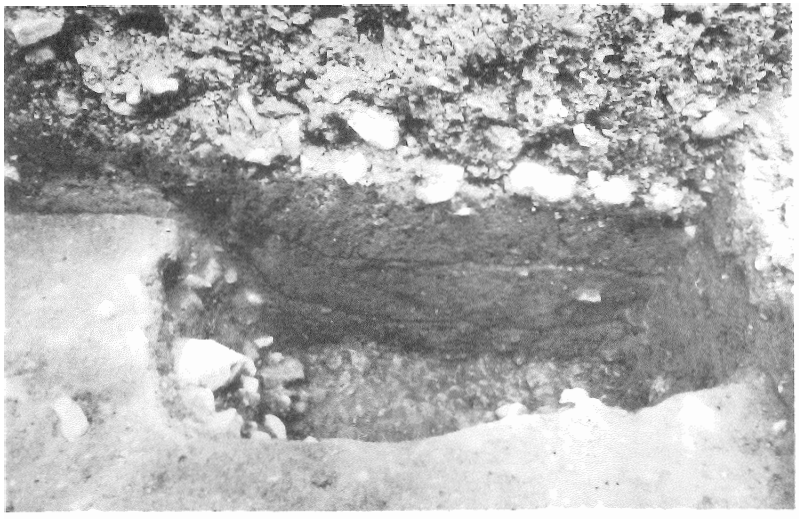


2 第3トレンチ全景（南から）

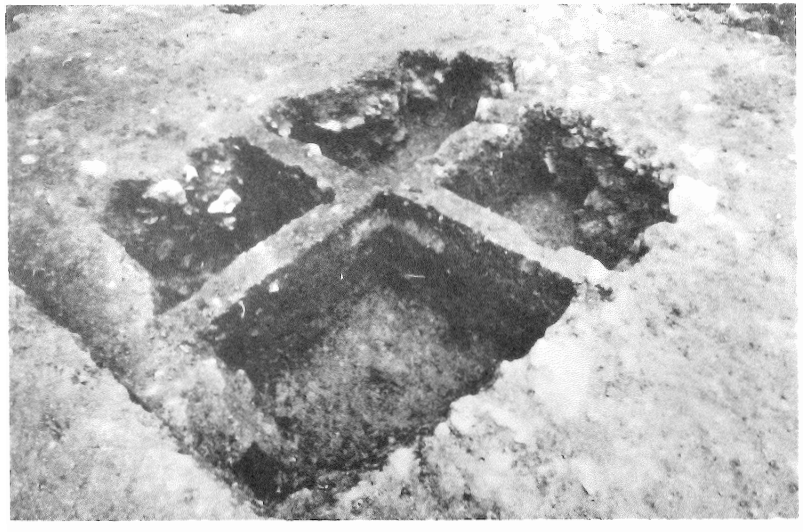


1　掘立柱建物ＳＢ08柱掘方（西から）

2　掘立柱建物ＳＢ09柱掘方（西から）



3　ＳＸ04（西から）

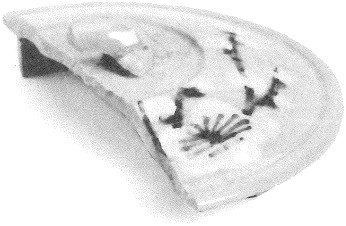


4　土壙ＳＫ05（北西から）

7

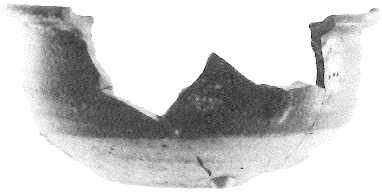
9

10

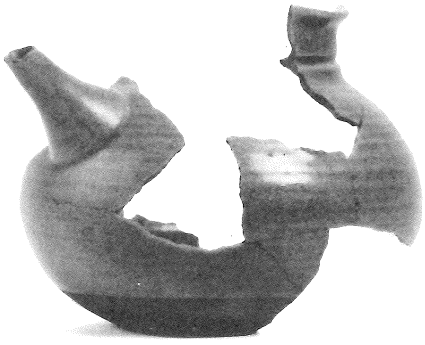


20

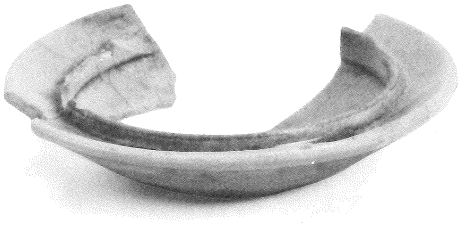
22



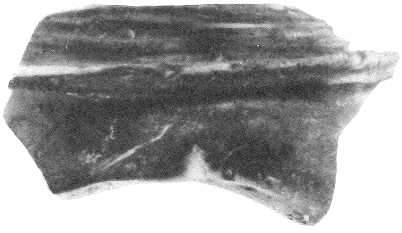
25



29



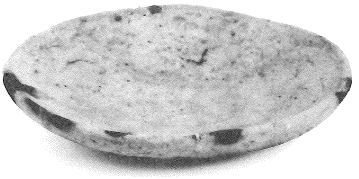
33



52

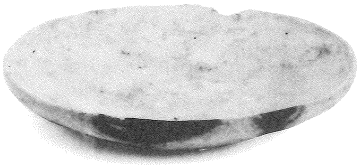
53

出土遺物（52―ＳＫ03，53―暗褐色砂質土、他はＳＫ05）



37

35

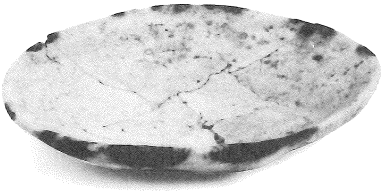


38

36

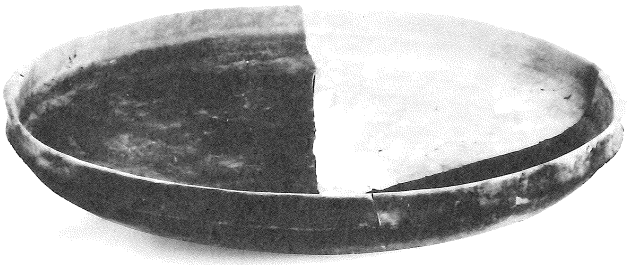
40

43



42

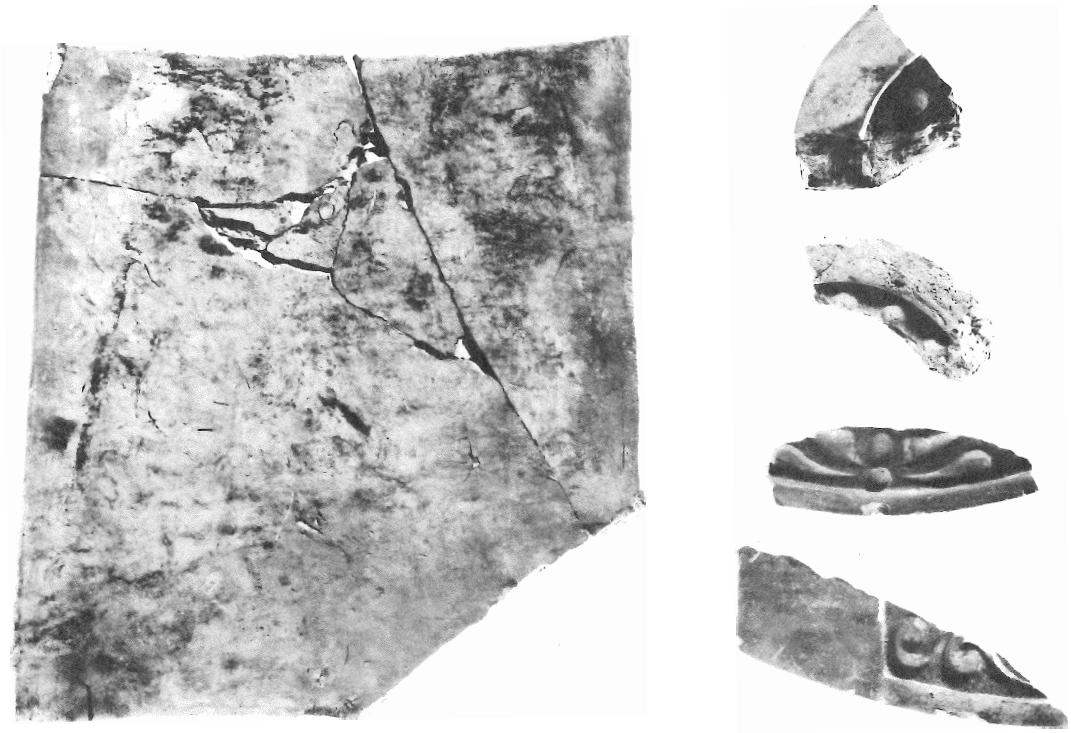
44



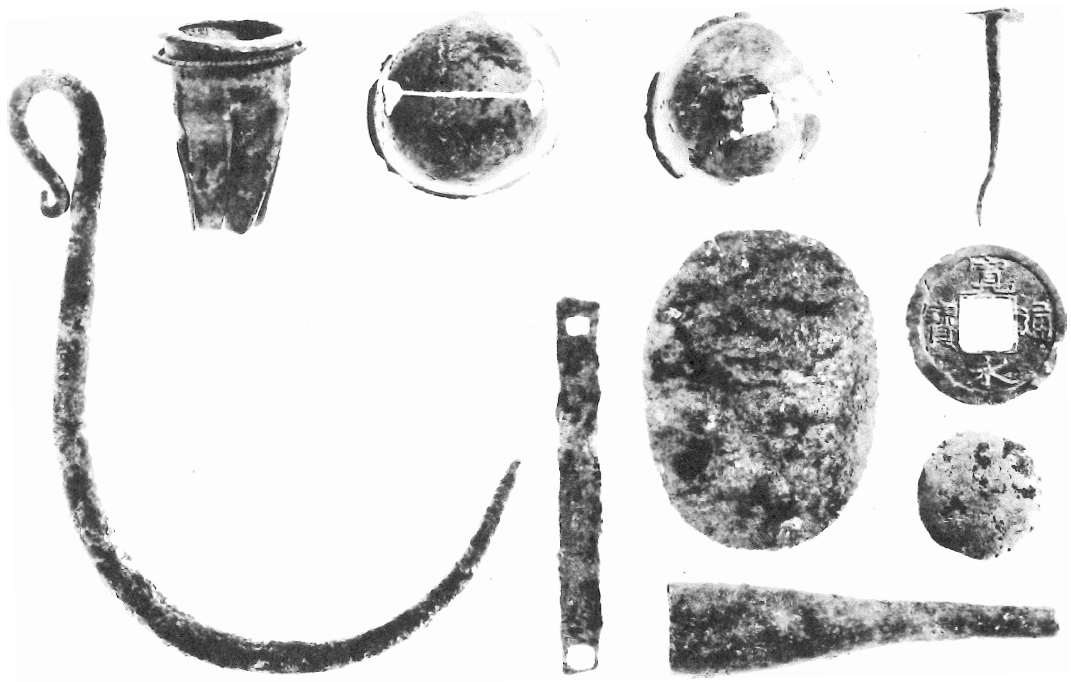
45

46

土壙ＳＫ05出土遺物



1　土壙ＳＫ05出土瓦



2　土壙ＳＫ05出土金属器

長岡京市文化財調査報告書　第20冊

発　行　日　昭和63年3月31日

編集・発行　長岡京市教育委員会

〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号
電　話　075-951-2121

印　　刷　株式会社 図書印刷 同朋舎

京都市下京区中堂寺鍵田町2
(075) 361—9121